同氏の結論

ては瘰癧最多く、其後に至れば貧血、神經過敏、頭痛、眼疾等多を占むと云。ヘルテル氏は右調査の結果に基づき教育者が衞生學の知識を有せざるが爲に、次第に多くの薄弱不具者を製出するを致すを罵倒して以爲へらく、最良の生徒も斯る狀況の下に最遲鈍にして痴呆なるものと化せらるることあるを免れず。學校の課業は十三歳乃至十五歳の間に於ては宜しく大に輕減せられざるべからず、單に學校に在るすら既に以て身體の營養を妨げ、生長を止め、神經的傾向を誘致し、特に最後に發達の途に就くべき諸種の高等能力の發展を妨碍するに足る。されば此年齡に於ては少なくとも九時間の熟眠を與へ十分なる食慾を充しめたる上ならでは決して學校に登らしむべからずと。斯くて氏は更に進みて獨逸の少年が精神上、道德上及び身體上退化したることを論し、且つ十八歳以後に於ては特殊の少年に限り學校に入るを許可すべきを主張せるピルグル Pilger 氏と殆ど同樣なる議論を爲せり。

嗹馬國政府の學生の疾病に關する調査

ヘルテル氏の「嗹馬國の高等學校に於ける學課過重」と題する書の始めて出版せらるゝや、嗹馬國政府は千八百八十二年を以て特に調査委員を任命し、一萬六千八百八十九人の男生、一萬千二百二十五人の女生を試驗したるに其結果男生の二割九分、女生の四割一分は疾病者なることを發見せり。是れ實に十二歳及十三歳の男女生に關する諸調査中疾病者數の最高率を示すものなりき。然るに千八百八十五年キイ Key 氏が瑞典國政府の調査委員長として報告せるものは更に高き率を示したり。ヘルテル氏は其後此二種の報告の結果を比較して種々の實地に適切なる結論を爲したるが、其說に據れば通常以上に勉强したる生徒は通常以下に勉强せしものに比して其疾病者數七分だけ多しと云。

キイ氏の調査

シユミツト、モンナルド氏の調査

小兒病の專門家なるシユミツト、モンナルド Dr. Schmidt-Mounard 氏は貧血、萎黃病、頭痛、神經過敏、不眠、食慾缺損、消化不良、鼻出血、慢性角膜炎、水晶體屈折異常等の諸病に關し五千百人の小兒及三千二百人の少女の慢性疾患を研究せり。氏に據れば中學校生徒二千百人に就き調査したる結果は九歳及十二歳は最疾病者多き年齡にして、其數は各三割及三割五分に達し、且つ十二歳に於ては不眠症の者最多數なることを示せり。又同等級の女生千九百人に就き調査したる所に據れば、最疾病者多き年齡は十三歳にして疾病者數は凡そ五割に達し、就中頭痛は三割、鼻出血は八分を

占む、又不眠症は此年齢に於て其最高率に達せり。又實科學校及中學校に於て午前のみ課業を受くる學級の生徒は十七歳を最疾病多き年齢として疾病者數は四割に達し、午後のみ課業を有する學級の生徒に在ては十六歳を最疾病多き年齢として其疾病者數七割以上に達す。但し不眠症のみに就ては十八才、頭痛に就ては十七才を各其最高率に達する年齢とす。各年齢を通して夕刻の課業を有せざる生徒は之を有するものに比して健康上著しき好結果ありと云。

青年期の死亡率

ブレテアン Brethean 氏の始めて說明せるが如く、青年期は種々の疾患の襲擊を受くべき極めて危急の時期なるにも拘らず、此期に於ては病的勢力に對する身體の種々の部分の抵抗力は極めて不定にして、或は强く、或は弱く、或は又全く回復の望なきが如き際に於て能く持久の効を奏することあり。是故に概して之を論ずる時は其の死亡率亦最小なりといふべく、各種の死亡統計亦之を證明するに足るものゝ如し。左に千八百七十六年乃至八十一年間普國に於ける人口千人に對する體性年齢別に據る死亡統計表を掲げて一例とす。

死亡統計表

年齢	男 田舍	男 都市	女 田舍	女 都市
1—2	61,0	82,0	62,0	79,0
2—3	33,5	39,0	32,0	39,0
3—5	20,5	23,5	20,0	24,0
5–10	9,1	9,7	8,9	9,8
10–15	4,0	3,8	4,3	4,1
15–20	5,1	5,4	4,6	4,6
20–25	7,9	7,8	6,0	6,7
25–30	7,3	10,0	7,7	8,8
30–40	9,1	14,3	9,6	11,0
40–50	14,3	21,8	11,9	13,1
50–60	25,0	33,5	21,0	21,5
60–70	50,0	59,0	47,0	43,5
70–80	112,0	115,0	108,0	99,5

青年期特有の諸疾患

青年期特有の諸疾患。青年期の諸疾患中最著しきものを消化機病となす。青年期に於ては骨骼の迅速なる生長は石灰の多量を要し、血は鐵を要し、體質の變化發達の盛なるは發熱用として多量の酸素と脂肪とを要し、腦は更に多くの燐素を要し、筋肉は蛋白質を要し、筋の運動は「ィノーゲン」及「ミオジン」等の分解を要し、斯くの如くして身長體重の發達と共に體内に於ける化學的新陳代謝の作用は益盛にして、從て食

消化機病

物の増加を要するを以て消化機關は特に青年期に於て重要の關係を有するものたり。蓋し高等の意義に於て各種の器官は何れも之を消化機關と稱すべく、乃ち腦の如きに至るまで亦是れ一種の消化機關と稱するを得べく、思想の如きも恐くは亦消化的官能と稱するを得べき也。人間即ち食物也。「生くるの意志」は單に「食ふの意志」なりと見做すに於て確に一種の意義の存するあり。人體の顯勢力の殆四分の三は恐らくは凡て消化作用の爲に費さるゝものにして、生存競爭の半分は即ち食物競爭に外ならず。各種生活體の動作は多くは自己の食物を得んが爲にするか、否ずんば自己が他の食物となるを避けんが爲にするに過ぎず。生物第一の恐怖は實に他生物に呑食せらるゝに在り。生物第一の財産は實に其食物なりとす。斯く觀來れは青年期に於ける消化的變態は深遠なる意義を有するものにして、普通に想像せらるゝよりも遙に根本的なる順應作用を含蓄するものとす。凡ての事には必す食養的後景ありとの一般の原則は之を青年期に適用するに於て更に其切實なるを覺ゆるなり。凡そ食慾は自然の狀態に於ては吾人の身體上、必要の眞正の方向を指示するものなるも、青年期に於ては此指針は

人間即食物なり

屢動搖不定の狀態を呈す。從來の嗜好物は此期に至れば全く一變して種々の新嗜好物代り起る。此變化は特に甘味、酸味、果物、肉類及各種刺戟性飲食物に關して著し。又好みて新奇の物、特に嫌惡すへき物を試食せんとするの傾向生ずるを見る。少年の暴食を誇り、少女の選味を衒ひ、菓子、清凉性飲料等に於て極めて選味力の鋭敏なるを示すは實に此期に始まる。味覺は此期に至て一層内部的、獨立的となり、食味其自身一種の快樂として感せらるゝを以て偸食、間食、其他食事上の惡習生じ、飲食上の整齊を保持するは一層困難となり爲に健康上害毒を及ほす事あるが如き最も注意を要すべきものとす。又食慾偏傾の如きも青年期に見る所の消化的疾患なり。蓋し人間は多種食なるを要す、而も性的器官發達の後に於ては新種の食物に對して嗜好を起すことは次第に困難を感ずるものなるを以て、從て食慾偏傾に陷り生理上の要求に應ずるたけの食物の種類を攝取するを得ざるに至る。此事たる青年期に極めて普通なる營養不良に因る諸疾患等の原因となるのみならず、精神不安、意思薄弱の諸症候を誘起し刺戟物を愛用するの習癖を生じ、延いて飲酒の惡習を釀成し、更に汚行の之に伴ふあ

嗜好物及食慾の變化

るときは終に青年をして回復すべからざる墮落の境遇に沈淪せしむるを致すべし。

心臟作用の障害に因る疾病

心臟は春機發動期に於て殊に著しき發達を爲し殆と其太さを倍加す、而して心臟作用の障害に因する疾病の少年間に多きは頗る意料外に出づるものあり。ギヂー Guidi 氏に據れば十五歲乃至十八歲の學生間に動悸の疾著しく多しと云。而して少年等は其疾患を自覺するや、或は自ら脈搏を測り或は心臟の鼓動を數へなどして往々神經的に篤疾に至るものあり。是れ青年期の特有なる恐怖病と稱すべき者にして、其甚しきは數ヶ月間若は數年間常に其手指を手首の脈處に加へ、且つ他人の之を發見するを防ぐが爲に巧妙なる方策をさへ案出せるものあり。此第のものは、特に夜に入りて脈動稍遲くなれるを感する時は、以て自己生命の終焉に迫れるとなして突然非常の恐慌を生ずることあり。或は又竊に醫書を探りて治療の方法を講究し、而も他人の之を窺知るを嫌ひて秘して告げざるが爲に、却て其病をして重大に陷らしむることあり。

脊椎彎曲

脊椎彎曲も亦青年に普通なる疾患なり。オイレンベルヒ Eulenberg 氏に據れは三百人の患者中其大多數は六歲乃至十四歲間に此病を得たりと云。而して更に其中に就き五割三分は七歲と十歲の間、二割三分は六歲と七歲の間、一割二分は十歲と十四歲の間に疾に罹れりと云ふ。クルーグ Krug 氏に據れは百八十一人の患者に就き三割五分は十三歲と十三歲九ヶ月の間、二割八分は十一歲と十一歲九ヶ月の間、二割七分半は十二歲と十二歲九ヶ月の間に於て各此疾を得たりと云。此疾患は幼年の頃より徐々に生起し、最初は單に姿勢上の惡習として看過せられ、後に至りて其疾病なりしを知ること多し。

肺結核

アレキサンダージエームス Alexander James 氏に據れは肺結核の回復の見込なきものは大抵二十五歲乃至三十歲の間に發病せるものなりと云。今若しクラウストン Clouston 氏に從て該病の傳染は發病の五年前に在りたるものとするときは、必死の肺結核病は少なくとも二十五歲以下に於て始まるものといふを得べく、恰もジエームス氏の法則に結核の排泄物は生長の爲めに要せられたる過度の營養力が耗盡し始め又は耗盡し了りたる時期に於て種々の組織の間に排泄せらるゝものなりと云へるに合す。クラウストン氏に據れは、肺結核の多少發病するは、其一割四分迄は生殖力の生ずる初期

即ち十五歳頃を其時期とす。之に對して二十歳に於て發病する者の割合は三割四分、二十五歳は三割八分、三十歳は四割となる。即ち身體の發達最盛なる年齢に於て肺結核に侵さるゝこと最多く、身體發達の完成したる年齢に於て該病の爲に死するもの愈多きを見る也。

吃音及吶音

吃音及吶音は言語筋の痙攣性疾患の爲に其調整力に障害を生したるに因りて起れるものにして、就中吶音は兒童の羞耻及疲勞と、急激に言語を修得せしめんとする教師の過度なる熱心によりて助長せらるゝものとす。兩者共に甚だ傳染し易きも、又適當の練習に依りて著しく輕減せられ得べきものにして、第二生齒期に次ては春機發動期に於て最此病に罹るの虞多し。ハートウエル Hartwell 氏に據れは該疾患の最多き年齢は女子に在ては七、十二、及十六才とし、男子に在ては八、十三、及十六才とす。而して此年齢は恰も生活力最盛なる年齢にして、恐くは死亡に抵抗する爲め、消化力の活動强大となるに因りて神經的疾患の誘起せらるゝあるべく、此疾患も或は其一發表に過きざるものならんと云。

眼疾

青年期に特有なる眼疾はカルラック Callack 氏に據れは、多くは性的變化に原因するものにして、特に女子に於て然りとす。又コムベ Combe 氏に據れは女子は男子よりも眼疾に罹る傾向、一層大にして、凡そ二十一に對する二十七の割合を爲すと云。

近視眼

青年期に於ける近視眼の增加は、ゼッゲル Seggel 氏の十六年間獨逸國內諸學校に於て調査したる結果に基きて作りたる左表を以て其一斑を知るべし。此他諸家の研究に徵するに青年期を通じて性的成熟の確立せざる間は近視眼の增加する率は漸次大となるの傾あるが如し。ゼッゲル氏の表左の如し。

	年齢	學級	百分率 近視患者	數百分率 同上增加
國民學校	6	1	2,8	
	7	2	4,6	1,8
	8	3	7,8	3,2
	9	4	11,7	3,9
	10	5	12,1	0,4
	11	6	15,3	3,2
中學校	12		17,0	1,7
	13	II	22,5	4,5
	14	III	29,7	7,2
	15	IV	36,0	6,3
	16	V	31,7	5,7
	17	VI	47,7	6.0
	18	VII	51'5	3,8
	19	VIII/IX	68,0	16,5

チフス熱

「チフス」熱患者の増加も亦青年期に於ける病理的特徴の著しきものと爲すべし。チームゼン Ziemsen 氏の統計に據れば、該患者百人中十九人は十六乃至二十歳、五十八人は二十乃至三十才、十六人は三十一乃至四十才の割合なり。又諸種の回歸性熱病も亦春機發動期の初期に多しと云。

回歸性熱病

嚼爪病

ベリロン Berillon 氏に據れば、嚼爪病は手淫の惡習を得る危險最大なる年齢に於て最多く之を見ると云。

其他の疾患

アイルランド Ireland 氏及キンド Kind 氏に據れば、白痴患者を四五年間普通の學校に入るゝとせば、其最多く益を得るは、十二歳乃至十六歳の間に在るべしと云。或學者は此年齢を以て精神昏瞶の一種、疾病の擬佯、其他精神的傳染を受くる傾ある時期なりと爲せり。バートリッヂ氏の實驗によれば病的赤面 (Morbid blushing) は此年齢に於て起り、若は其度を強くすと云。又此頃の年齢に於て極めて瑣細と見做されたる疾患にして後年重大のものとなるもの少からず。恐らくは此期は慢性及遺傳性諸病の發芽期ならん。從て此期に於て從前の健康關係一轉して是迄身體薄弱なりしものが強壯に趨き、強壯なりしもの却て薄弱に傾く等の事あるを見る。

睡眠

睡眠に要する時間若は實際睡眠の時間は春機發動期に於ては少しく減少し、且其睡眠狀態も最初は不安定にして次第に睡眠佳良又は不良の狀態を固定す。是れ恰も此時期には體力の消耗及補償の關係に於て變化あり、更に一新關係を生ずるを示すものの如し。又睡眠中に於て性的器官が、新しき種類の夢の爲めに刺戟を受け、初めて新機能を發動すること少なからず。

夢と覺醒後の意識

青年期の初は其夢中生活が特に多大の感情的强度を有するを以て、其覺醒後の氣風と性向とに重大なる影響を及すこと最著大なる時期なりとす。睡遊病の如き往々此時に於て發生し、又睡眠と覺醒との中間狀態なる冥想沈思の失神的狀態の如きは此年齢に於て最多し。時としては夢の激烈なるがため青年期に普通なる早曉の疲勞を來すことあり。時としては少年は大半或は全部忘却せられたる夢より、名狀すべからざる悅樂の思に充されたる心を以て、又は從前注意せざりし異性の某人に對する新なる强烈の情を以て、覺醒することあり。而して此情念は數時間若は數日間消滅せずして存す

適當な

睡眠及作業の時間

ることあり。ワーナー Warner 氏に據れば睡眠及作業の時間は青年期に於ては左の如く制限するを可とすと云。

睡眠の不整齊

年齢	作業時間 毎週	睡眠時間 同上
8-9	15	12
9-10	20	11½
10-11	25	11
11-12	30	10½
12-14	35	10
14-15	40	9½
15-17	45	9
17-19	50	8½

諸家の報告に據れば、性的生活の初期に於ては睡眠に關して極めて不整齊の習慣あるものゝ如し。例へば往々深夜まで眠に就くを欲せず特に小説的又は冒險的空想を以て夜間戸外を遊行するるが如きは正常的青年の必ず經驗するが所にして、特に月夜の如きは一種の感興の爲に安息に堪へざるを常とす。此等の習癖の或ものは吾人祖先の放浪的生活の遺習と見るべきものあり。小兒の特に燈燭の光を喜ぶの傾向は青年に至れば一轉して自由と放任とを享受せん爲に暗黑を喜ぶの傾向となる。

神經的及精神的變調

神經的及精神的變調の青年期に於て特に著しき事實は、醫學の歴史に於ても、古代より夙に認められたりき。ヒポクラテース Hippocrates 氏の如きは既に青年女子が幻想に依て井中に投身し及び自ら縊死せんとしたりし事を記載せり。古代亞拉比亞の醫家は春機發動期に於て宗教的憂鬱的狂に罹るの傾向あるを注意せり。特に中世紀に於ては宗教的妙樂 (ecstatic) 及感激 (convulsionaires) の情は盛に宗教家の利用する所となり、之に關する一般の迷信及尊敬は極て大なるものありき。小兒十字軍、魔法師、特に「リバイバル」其他の宗教運動に於ける大幻想に於ては、春機發動期及青年期の特質の甚だ顯著なるを見る。此他近世に出でたる種々の有名なる魔術家、自稱豫言者の類は何れも青年期に通常見る所の傾向の誇大せられたるものとして見るを得べきものとす。

精神病

神經病及精神病は何れの年齢に於けるよりも春機發動期の初に於て最多く現はるゝものなり。從て此年齢に於ては感情の緊張を惹起す。或は之を以て一種狂疾の抑止せられたるものと爲すものありと雖、是れ實は此年齢に於ては正常的の顯象なりとす

青年精

又青年期に於て頗る多く見る所の精神薄弱の症候は大に近世醫家の研究する所となり

神病

所謂青年精神病（Helephrenia）の目さへ設けらるゝに至れり。カールバウム氏 Kahlbaum は始めて

緊張狂

緊張狂（Catatonia）と云へる精神病を研究し、其多くは春機發動期の始めより中年初期に現はるゝものにして、遺傳の影響は比較的に少なきことを云へり。

クラウストン氏の調査

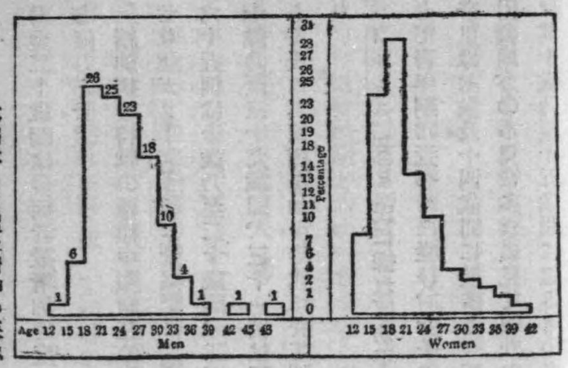
其他通常謂ふ所の精神病も亦青年期に多く生ずるものにして、クラウストン氏に據れば千八百人の患者中二百三十人は十四歳乃至二十五歳、四十九人は十八歳乃至二十一歳、百五十七人は二十一歳乃至二十五歳のものなりき。又フインク Fink 氏に據ればウルツブルグ病院に收容せる精神病者千八百九十二人中二百二十八人は二十九歳以下のものなりしと云。又佛國に於ける調査に據れば該國内精神病者全數に就き其四分强は十四歳乃至二十歳、八分强は、二十歳乃至二十五歳のものなりき。是等の統計は何れも春機發動期に於て著しく精神病者の增加するを示す。

フインク氏の調査

女子の精神病

精神病にして若し頭痛舞踏病、月經不調、心悸動等の病症に伴ふ時は特に重症に陷るの虞あり。概して女子は男子よりも此傾向一層多し。然れどもレギス Regis に據れば、青年期の危險の度は女子に於ては甚大ならず、即ち女子は月經一たび定立したる後は之によりて衛生上良好な

年齢と精神病に罹り易き程度



る結果を受くるものなれば也。ブロシウス Brocius 氏に據れば青年期に於ける精神病は往々却て精神發達の障害となるべきものを除去する機會を與ふることあり、結局精神に對して有利なる休息期を作るものなりと云。

男女兩性の年齢と精神病に罹り易き程度とに就いて、輓近アシャツフエンブルグ Aschaffenburg 氏は百十六人の男子と百七人の婦人とを調査し、左の加き圖表を作れり。

マーロー氏は千八百八十六年より千八百九十六年迄の間に於けるチューリン精神病院患者男千六百四十九人、女千二百五十七人に就き其最初發病の年齢を調査したり。氏に據れば十六歳

乃至二十歳間は發病者數增加の度最大なり、而して二十五歳以後に至れば發病の虞殆ど無しと云。

癲癇狂

精神病の特殊の種類中癲癇狂の如きは諸家皆以て青年期に於て特に著しきものと爲せり。ガワー Gower 氏の調査に據れば千四百五十例中、四百二十例は十歳以下、六百六十五例は十歳乃至二十歳間、二百二十四例は二十歳乃至二十九歳間、八十七例は三十歳乃至三十九歳間、三十一例は四十歳乃至四十九歳間に發病したるものなりき。而して氏は其原因を幼少時代に於て頻繁に恐怖、激昂、憂悶、等に苦しめられたるに歸せり。

ヒステリー

ブルンス Bruns 氏に據れば幼年時代には男女共に歇私帝里（ヒステリー）に罹ること少からず、而して青年期に近づくに從ひ、女子の方次第に此傾向を多くするものなり。小兒の歇私帝里は七歳及十四歳間に最多し、而して其原因の勉學過度にあらざることは該病者の田舍地方の小兒に多きに見て明かなりと云。或學者は此原因を遺傳に歸し、又或學者は其十歳乃至十五歳間に起るもの多きによりて之が原因を月經初發に歸せんとせり。

ジャネー氏の說

ジャネー Janet 氏に據れば春機發動期に於て往々腦の特種なる疲勞を起すことあり。氏は之を患者が觀念凝集力及同化力を缺くに依て起る所の道德的薄弱性として記載せり。氏は以爲へらく、春機發動期は此關係に於て特に危急なる時代なり。但し此に謂ふ所は生理的春機發動期にはあらず。是も重要なる影響を及ぼすものには相違なきも此に主として謂ふ所は之よりも少しく遲くれて來る所の時期にして、正に名づけて道德的春機發動期と云ふべきものとす。土地氣候其他周圍の關係によりて少しく差異あるべきも、此時期に於ては一切生活上の大同題、事業の選擇及生活方法に關する苦心、諸種の愛情の問題、人に依りては宗教上の問題等は同時に現前し來り、此等は早くも少年の心を侵し、其薄弱なる思想の力を吸收し盡すものとす。此等無數の勢力は少年を刺戟して從前困難の度小なりし時期に於ては潛伏して見るを得ざりし心理的缺點を發現せしむ。而して精神が遺傳的勢力の爲に豫めかゝる傾向を有する場合に於ては、此心理的缺點は愈發展して特種の形式を具ふるに至り、所謂歇私帝里なる一群の症候を呈し來るなり。青年期の精神的諸病症は大抵何等か性慾的原因を有するものにし

道德的春機發動期

性慾的

精神病

て、諸種の性慾的精神病は頗る著しく發生す。ダウン氏 Down に據れば春機發動期の近づくに從ひて往々不自然なる内省力及良心過敏等の症候を見る。氏は五人の善良にして勉强なる兒童を記載せり。彼等は十一歳乃至十三歳の間に於て憂鬱性となり、自己の動機に關して過度に謹愼し、決して斷定的の言語を用ふることなく、常に自己の語が自己の意志を誤なく傳ふるや否やに心配し、道德的標準に關し、迷亂し、憂悶し常に煩瑣なる研究を好みて而も何等の結果に到達するを得るに至らず。氏の說に據れば此等の精神的不安は若し性慾的偏曲あるときは更に其症候を增加すと云。精神病上の研究は憂悶狂 (Neurosis of Anxiety) とも稱すべき一種の新病症を區別するに至れるが如し。フロイド Freud 氏に據れば一切の病的憂慮は性欲的活力と密接に聯合し常に欲情の緊張せる場合に起るものとす。此症候は青年期に於ても亦往々見る所のものにして、性慾が其遂行せらるべき正當の時期の前後に於て、過度に抑止せられ若は異常の方法にて制止せられたる場合に起るを常とす。且つ此病症は男子よりも寧ろ女子に多し。

憂悶狂

青年期の鬱憂病

青年期に於ては快苦の識別は顚倒せられ易く、憂愁と歡喜とは各極端に走り、且つ常に平衡を保たざるの傾向あり其結果は即ち鬱憂病の著しく青年期に現はれ、自殺者の數多きを致すものとす。其原因は一部は外部的影響より來り、一部は遺傳的素因より來る。而して其來るや、往々極めて突然なる事あり、されど青年期に於ては其回復も亦甚速なること多し殊に遺傳的素因なきものに於て然り。「ニュー、ハンプシャイア」養育院に在りし青年の一患者は滿二十歳の僅か以前に鬱狂に罹り、十八ケ月後入院せしが、彼は父系に精神的遺傳あり、屢自殺を企てゝ成らず、入院後治療を受けて徐々其効驗現はれ、間もなく其回復は急激に進捗したり。左の寫眞中の一は病氣の頂點に在りし時則ち十一月一日、二は回復の始まりし時則ち十二月十六日、三は快癒の時、四は退院の時則ち一月三十一日の撮影なり。

神經衰弱

神經衰弱は文明と激烈なる生存競爭とに伴ふ所の病的疲勞の一種なり。此病症は青年期の稍後期に於て起るを常とすれども、其兆候は春機發動期に於て既に發生すること多し。ビンスワンゲル Binswanger 氏の如きは、春機發動期に特有なる神經衰弱症

さへあることを記載せり。

疑惑狂

疑惑狂も亦青年期の後期に於て特に多きものなり。然れども該病の春機發動期に起りたる例も亦往々之あり。

汎發性麻痺

近來の研究に據れば、癲狂の汎發性麻痺は其患者數の增加の著しきは、尙後の年齢に在りと雖、其初發期は十三歳乃至十六歳の年齢に在り、特に十五歳乃至十六歳を最多とすべきが如し。此恐るべき疾患は春機發動期なして危急の時期たらしむるものにして、特に梅毒又は花柳病毒の素質ある場合に於ては最危險なり。正常又は正常以上の知力を有する兒童も此病症に罹るときは、精神作用は漸々遲鈍を加へ、無感覺及精神昏瞶の狀態を生ず。

春機發動期と精神病

吾人は此にあらゆる精神疾患を擧說するを得ず。然れども精神作用の缺陷又は過敏を來すべき各種の精神病又は神經病は假令春機發動期前に現出せずとするも、此時期頃に於て漸く現出せんとし、若は少くとも現出の準備を爲しつゝありと云ふも大差なかるべし。但し此等精神病は初發狀態に於ては往々醫師の見逃がす所となるを以て統

計上其初發の時期は尙後の時期に置かるゝのみ。されば此時期に於て精神病の危害を受けざりしは適是安全無事に春機發動期を經過して成熟に達したる者なりとす。マーロー氏に據れば此時期に於ては生長の急激なるに依りて血液中の蛋白及鹽分は著しく減少し、性的器官と神經中樞とは最親密なる接合をなすに至り、精神の發達は感覺より感情を開展し性的官能の次第に發達するに從ひ、特に神經過敏に罹り易き傾向を生じ、僅少の原因の爲め全身の健康の容易に破壞さるゝ等の現象を見る。特に十六歳乃至二十歳の青年中期とも稱すべき時期に於ては心理的變動は極めて著しきものあり。此等は何れも此時期に於ける精神病的傾向の大なるを示すものにして、マーロー氏は之に據りて却て春機發動期に特有なる精神病なるものなきことを說けり。而して此時期に於ては道德的發達と體質的發達は特に著しく相提携するものにして、一方の障害は必ず他方の障害に伴ふを常とし、有機的體制の完成は道德性の堅固と決して分離せざるものとす。故にマーロー氏は訓練及社交を以て青年精神病の最適切なる療法となし、之に加ふるに繼續して仕事を爲すの力、豫定通りに行爲を果すの力を養ふべきを

マーロー氏の調査

青年精神病の療法

以てせり。蓋し青年期は活力の新波の湧起する時代なり。即ち此期に入ると同時に各の器官は殆ど皆變形し、興味・本能・習癖・食慾・好奇心等は更新し身體のあらゆる勢力は種々の方面に於て盛に消費せらる。加ふるに諸種の遺傳性の盛に發現せんとするあり、要するに青年期は第二の誕生なり。人格の種々なる要素、人生の種々なる內容の新に結合構成せらるゝ大變動の時期なり。則ち此期に於て諸種疾患の群集麕至する亦其故なきに非ざるを知るべき也。

以下吾人は青年期に特有なる心理的病癖に關して概說を試みんとす。

第一に沈思冥想は春機發動期に於て著しき心理的特色なり。何人と雖青年初期に於て現實世界を離れて空想界に遊ぶの經驗を有せざるものなかるべし。而して强壯健全の者は容易に復現實の世界に歸るを得べきも、虛弱なる青年は此の復歸力頗る遲鈍にして永く空想夢幻の間に彷徨し、延いて思考感情、感覺の外復實在性を有する世界なく、自己自身の實在すら疑ふべきものなるかの如き感想を有するに至るものなり。斯る心理的傾向を有するものには往々二重人格若は二重意識の現象を見、或は又初期の

青年期は第二の誕生なり

心理的病癖沈思冥想の時期

想像の産出期

癲狂の狀態を見ることあり。

春機發動期は又想像の産出期なり。冥想沈思の習は更に想像を生出す。而て少年時代に於ては一切の希望は想像の世界に於てのみ達し得らるゝものにして、少年に對しては想像世界は現實世界よりも一層親密に一層確實に感ぜらる。かゝる心理的傾向は普通に錯覺及幻覺を伴生するものとす。

自我意識の發達と精神的變化

少年自我の意識次第に發達するに從ひ、省察作用は漸く自己批評及病的意識過敏を生ずるの傾あり。何故に自己は此世に生れしか、何人が神を造りしか、精神・物質又は神とは何物なるか等、事物の終極に關する問題に對し頻に之が解答を要求す、かくて良心は其過敏となり、徒に正義を行ふの方法に關して苦慮し、却て之が爲に正義を行ふに用ふべき勢力を消耗するを顧みず、常に自ら絶對的完全の理想を有するを誇る色あり。瑣細の事をも重大らしく感じ、妄に正邪曲直に關する論議を爲すを喜び、而も自ら正邪を判斷するの力は鈍くなる。此類の少年には寫字を爲すに方りて一箇處にても訂正を要することあれば、往々全紙を改寫せずんば止まざるものあり。一莖の草の殘留するあるが爲に耕作を止め、一穗の麥の不足なりしが爲に收穫を止むるものあり。或少女は花を摘み取るに一々花に對して「難有」と云はざれば滿足せず。他人の顏色少しく惡しきを見れば自己の運命盡きたるかの如く感じて絶望に陷り、極めて無意味なる無邪氣なる事を爲したるをも無上の罪惡を犯したるかの如く思ひて苦悶するが如き亦此類の少年の心理的病癖なりとす。

過度の自信

少年が其從來の保護者の手を離れて將に獨立の境に入らんとするの時は是れ其意志の衝動性最盛にして其野心は炎々熾熱せるの時なり。從て其自己の力を信ずること太た過ぐるの傾向は必然に生ず。野蠻人としては此年齡に於ては首狩其他の冒險を夢想すべく、文明人としては或は王子となり、或は大富豪大勇者となり、天地間の偉大なる者と共に事業に從ふを夢むべし。此時に方りて彼等少年の全精神は擴張的となれり、而して實世界は未だ彼等の知る所にあらざるを以て、彼等に對しては可能界の外に復世界あるなし乃ち彼等は其可能世界に於て過度の自信を以て其精神の擴張を恣にせんとする也。健全なる人に在りては或時期の後は斯かる空想の瓦斯を燃盡し、又は放散

し去るを以て其空想は只自己一時の快夢たりしに過ぎずして終に他人の知る所となるに至らず、現實界の太陽の昇ると共に煙散霧消し、否らざれば詩歌小說の領域に移放せらるべし。然れども此覺醒力の乏しきか、然らざれば空想力の過大なる場合には、かの早熟性痴呆狂者に極めて多く見る如き誇大妄想を生ずべく、然らずんば、粗暴、反抗、更に甚しきは先天性犯罪者型の加害性をさへ形成するに至るべし。

模倣の時期

少年は凡ての關係に於て尙不確立の狀態にある時期なるを以て何物をも摸倣せんとする傾あり。且つ摸倣は實に社交的本能の基礎にして、少年期は即ち此本能の最旺盛なる時期なれば摸倣力は此期に於て亦極めて盛なり。かくて身體の姿勢に、顏面の表出に、動作步行の體樣に、若は精神上の諸特徵に於て盛に他人を模倣し、幼時に在ては其長上者、敎師又は朋友の習癖を模し、稍長じては自己の崇信する各種の人物を摸倣するの傾向あり。蓋し少年は一部分模倣的、一部分實際的の傾向を有するを以て演劇に於けるが如く實際を模倣して種々の人物に扮裝し、種々の動作を演出するは其頗る愛好する所とす。而してかゝる演劇的傾向は正常の場合に於ては少年をして徧く諸

演劇的傾向

種の感情及其表出法を經驗せしむるの便宜を爲すものなりと雖、又之が爲に少年の姿勢、動作等に一種特別の習癖を固定すること少からず。

痴愚の時代

少年は痴愚の時代なり。其動作言語等は常に人々の笑を招き、滑稽の資料とせらるるものなり。而して少年も亦之を以て自ら笑ひ興ずるを得るを喜びしなり。然るに一旦自己意識の發達し來るや、他人の批評に對する感受性は不思議といふべき程銳敏となり、常に自己の動作及言語が他の嘲笑の料とならんことを恐るゝものなり。從て一面は自己が他人に認めらるゝを恐るゝ痴愚を隱蔽紛亂せんが爲、一面は之と正反對に野卑の體樣を作さんとの傾向あるよりして此に青年の滑稽に往々喜んで爲す所の痴呆動作を生ず。是れ亦青年期に於ける心理的特徵を見るに足るべきものとす。

言語に對する新態度

青年の言語は春機發動期に於て新組織を成す。單語の數は增加し、語の意義は正確にせられ、各語には各異なりたる意義附せられ、言語に對する新意識生じて新語は常に興味を以て迎へらる。日記及書狀其他小說又は論文の如きものすら盛に製作せらることとあり。又往々言語と思想と逆比例を相爲し、何等の思想なきに文辭のみ滾々と

して湧出することあり、思想大に充實せるに文辭甚だ窮迫して毫も之を表出する能はざることあり。

社交と獨居

青年期は正常的には社交的年齡にして、友情、利害共通の念、及同情心は此時期に於て最强大ならざるべからず。然れども又此時期に於て羞耻の情盛にして他人の會見を避け獨居を喜ぶの傾向ある少年も少からず。又此時期は感情の理性に凌駕することを極めて著しき時期なり。

感情的宗教的時期

宗教上の動搖は始まり、激甚なる競爭心は生じ、從前殆と眼中に置かれざりし他性も、今は其極めて精好なる磁氣によりて牽引作用をなすことを感じ、美術文學科學に對する好尙は生じ、種々なる職業に對する興味起りて何れを選擇すべきかに苦しむ。新誘惑は情慾の放恣を來し、若は眞理、義務及健康に對する從來の定立關係を變ぜしむるに至る。

青年心身の發達に關する注意

以上は青年期に於ける心理的變化の特に著しきものなり。而して其中一種の病癖となれるものは其初に於て慢性的にして且つ輕易なる症候を呈するが爲に矯正を加へらるゝの機會なく、往々重大なる精神病と化し去り、若しくは道德上の大缺陷を生ずるに至ることなしとせず。是れ青年敎育に於て頗る戒心すべき所なるべし。青年期に於ける諸種の疾患の外部的原因の中には早熟の誘因となるべきあらゆる諸勢力を含めるは頗る注意すべきものとす、而して春機發動の時期を早からしめ、死亡率を大にし、知識をして愈汎く且淺薄のものならしめ、罪惡に關して見聞を廣くし、誘惑を長じ、安息を減じ、絕えず精神を攪亂し、多く不潔の空氣を呼吸せしめ、傳染病に罹るの機會を與へ、及び田舍生活に具はりたる衞生的諸勢力を奪ひ去る所の都市生活の如きは學校生活と共に其主要なるものと云ふべき也。斯る都市生活は少くとも少年時代特に春機發動期に於ては極めて有害なり此時期を田舍に於て過ごすことを得ざりし少年は實に其何物にも換へ難き特權を奪はれたるものといふべし。然れども文明の進むに從ひ、生存競爭は益激烈を加へ、都市生活及學校生活は愈其害毒を大にし、青年期に於ける疾患の種類は愈增加し、青年身心の發達は愈阻碍せられんとす。若し、モーレル Morel 氏の悲觀的豫言が眞にして吾人々類は再び退化すべきものとせば、此退化は吾人が今崇尊する學校智識の缺乏に因るにあらず、統計の示すが如く今日人類の壽命が

都市生活と春機發動期

人類の進化と青年身

心の發達

次第に短縮するてふ事實に因るにあらず。又成人の活動力が古代に比して漸次減少するの傾向あるに因るにもあらず。凡べて是等の事實は必ずしも問ふを要せず、唯今日に於て青年身心の發達の次第に妨害沮止せらるゝの傾向ある一事、正しく是れ人類退化の原因となるべきものなりとす。若し又之に反して人類が更に進化して一層高等なる段階を占むるに至るの期ありとせんか、此進化の主因は必ず之を青年の身心の發達に歸せざるべからず。青年期と諸疾患の關係宜しく深大なる注意を以て攻究すべきも也。

犯罪統計の示せる注意すべき事實

伊太利に於ける犯罪年齢の統計

第五章　年少者の過失背德及犯罪

文明國に於ける犯罪統計は二個の悲しむべき且つ意義深き事實を示す。第一は十二才より十四才迄の年齢に於てあらゆる種類の犯罪の增加し、而も此增加が數年間繼續するの事實なり。第二は少年犯罪者の數が到處に增加し且つ其犯罪が益早熟的となること是なり。犯罪は固より惡德に同じからず、且つ所謂犯罪者にして捕縛せられ宣告せられたるものは比較的小部分に過ぎずと雖何れの時代に於ても犯罪の數は其時代の一般の道德狀態を卜知すべき主要なる兆候たること亦疑ふべからず。然らば則ち近世文明諸國に於ける如上の事實は正に是れ倫理學、社會學、發生的心理學の研究に對し、並に教育、宗教及文明の効果に對して深遠複雜なる意義を有するものと云ふべき也。

伊太利に於ては犯罪の數極めて多く、其研究亦極めて進步せり。千八百八十六年同國に於ける男女犯罪年齢別統計表は此に模範的のものとして揭ぐるを得べし。

年齢	十四歳以下	十四歳ヨリ十八歳マデ	十八歳ヨリ廿一歳マデ	廿一歳ヨリ廿五歳マデ	廿五歳ヨリ五十歳マデ	五十歳ヨリ七十歳マデ	七十歳以上
性別 男	一、二九	六、〇四	一三、二九	四六、九一	二三、二九	八、四〇	〇、六八
性別 女	一、四一	六、〇二	一〇、〇五	三九、三八	三〇、九四	一一、六三	〇、五七

性別の下の數字は犯罪數百に對する各年齢犯罪の割合を示す

各國に於ける犯罪と年齢との關係

「伊國に於て男子犯罪の數最大なるは年齢二十五歳の時を推す。而して女子は此年齢に於て母としての作用最活潑なるの關係よりして其最大犯罪數の年齢は稍後れて三十五歳前後となれり。ロッシ Rossi 氏に據れば四十六人の犯罪者中、四十人は二十六歳以前に犯罪を始めたるものにして、何れも飲酒を放にし且つ性欲に於て早熟せりと云。印度に於ては年少兒童が最巧妙なる犯罪者たること珍らしからず。エヌ、デビッド N. David 氏に據れば獨乙に於ける四萬三千八百三十五人の罪人中四割一分は年齢二十一歳以下のものなりき。又コレー Corre 氏に據れば、佛國に於て千八百七十六年乃至千八百八十年間に十六歳乃至二十一歳の犯罪人數と二十一歳乃至四十歳の犯罪人數と相等しく、次の五年間に於ても略同樣の結果ありたり。同氏は犯罪と年齢との關係を示す爲、左表を作れり。

年齢	八歳以前	八歳ヨリ十歳マデ	十一歳ヨリ十二歳マデ	十二歳ヨリ十四歳マデ	十四歳ヨリ十六歳マデ	十六歳ヨリ十八歳マデ	十八歳ヨリ二十歳マデ	二十歳以上
男	一四	一五九	四二五	一二一四	一七三九	一七六五	七一四	三
女	六	三七	一一七	二六九	四〇九	三八五	二〇九	八
合計	二〇	一九六	五四二	一四八三	二一四八	二一五〇	九二三	一一

露國政府の命に依りて同國陸軍幼年學校に於ける成績不良の學生に就きシコルスキ Sikorski 氏の調査せる結果に據れば左の如し。

十一歳の生徒百人に對する不良學生數	二、五
十二歳同上	六、一
十三歳同上	二三、七
十四歳同上	二〇、〇
十五歳同上	二一、〇

十六歳同上　六、二
十七歳同上　一、二

合衆國に於ける統計

北米合衆國千八百九十年の統計に據れば、同年同國内に於ける五十八個の少年感化院に收容せる人數は一萬四千八百四十六人(内三千三百十一人は女子)にして、其平均年齢は一四、二三歳就中男子の平均年齢は一四、〇九歳、女子は一四、七一歳なり。又同國南部中央諸州に於ける外國人の父又は母を有する少年に關する統計は此關係に於て最低年齢を示すものにして、即ち男女平均年齢一二、四九歳なり。又同國南太西洋沿岸諸州に於ける父母國籍不詳の少年に關するものは其最高年齢を示すものにして即ち十六歳なり。米國内に於ける此等の感化院に收容せらるゝもの〻年齢は大抵五歳より二十五歳迄とす。次表は其中に就き七歳より二十一歳迄に限りて男女少年犯罪者の數を示すものなり。

年齢	七歳	八歳	九歳	十歳	十一歳	十二歳	十三歳	十四歳	十五歳	十六歳	十七歳	十八歳	十九歳	廿歳	廿一歳
男子	六三	一四三	二六〇	四六六	二六五	一八二	一四七八	一七六九	一七五一	一六六六	九二二	四一〇	二二三	一〇三一	二五
女子	二七	五九	七八	一二六	一二七	一八九	二九〇	三八〇	四六六	五四三	四八〇	二三四	九六	五七	一五

右表は年齢の進むに伴ひ犯罪數の減ずるを示すものと解すべからず。蓋し年長のものは感化院に入れられずして直に監獄に送らるべければなり。

少年犯罪者數調査の方法

ジョリー Jolly 氏は各國に於ける犯罪者の大多數は何れも青年期に於て初めて犯罪を行へるを述べて、斯の如き犯罪早熟の原因を以て近世生活上の種々の事情に由るものとせり。抑も犯罪早熟の問題を正確に決せんには犯罪者の年齢表と全體の人々の年齢表とを對比し、各年齢に於ける犯罪者數を相當年齢の人口總數を以て除するを要す而して斯る計算は合衆國に於ては未だ嘗て試みられざる也。露國に於ける調査に據れば十四歳乃至二十一歳の犯罪者數の增加は此年齢の人口總數の增加に比して其割合遙に大なり。

各國に於ける少年犯罪者の增加

獨國に於ては千八百七十一年より千八百九十年迄、農家の人口は總人口百人に對する六十三人より五十三人に減じ、大都市の人口は同じく四人九分より十人に激增す。此外小都市の人口の增加亦著しきものあり。而してシュルツ Schulz 氏に據れば此事實は少年犯罪の增加を伴生するものなりと云。獨乙帝國内に於て千八百九十

二年に於ける少年犯罪者數四萬六千四百九十六人にして千八百九十五年には其五割を增加せり。英國に於ては毎年に於ける犯罪者總數の凡そ四割は二十一歳以下のものなりと云。而して千八百八十六年に於て十八歳乃至二十一歳の犯罪者數は英國内犯罪者總數の一割六分、十五歳乃至十八歳のものは同じく六分、十二歳乃至十五歳のものは同じく三分を占めたりき。墺國にては千八百九十五年迄の十年間に於て十一歳乃至十四歳の犯罪者數は年々平均六百九十三人、十四歳乃至二十歳の犯罪者數は同じく五千七百二十九人にして犯罪者全體の數の二割二分弱に當る。米國に於ては各感化院に收容せる不良少年の平均年齢は一四、二三歳なり。ドレームス Drähms 氏に據れば英國に於て犯罪を行ふこと最多き年齢は十八歳乃至二十四歳なり而して十六歳乃至二十一歳に於て最大犯罪數を見ると云。米國に於ける最大犯罪數の年齢は之より後るゝと凡そ二年なり。フエリー Ferri 氏に據れば伊太利國に於ては早熟犯罪者の數次第に增加す。而して早熟者の犯罪の種類は往々先天的犯罪者に普通なるものと類を同じうすと云。有名なる佛國の一市吏員の説によれば過去五十年間に同國人口十萬に就き犯罪者數二百二十七人より、五百五十二人に增加せり、而して此增加は主として少年犯罪者數に於て著しと云。

少年の犯罪の性質

少年犯罪の一般の性質はマアロー Marro 氏に據れば身體に對する犯罪は十六歳乃至二十歳に起り、二十五、六歳に於て最高度に達し、財産に對するものは十五歳以下に起り、十六歳乃至二十歳に於て最高度に達す。獨國に於ては三萬九百二人の盜犯中、四割五分は二十一歳以下なりき。又人口各十萬に對し、十二歳以下の犯罪者二十九人、十二歳乃至十六歳の犯罪者二百六十一人、十六歳乃至二十一歳の犯罪者三百二十一人、二十一歳乃至三十歳の犯罪者二百四十六人なりと云。又十二歳乃至十五歳に於ては盜犯は他種の犯罪よりも多し。二十一歳乃至二十五歳に於ては身體に對する犯罪多く、公德に關する犯罪は二十歳に至れば其數頗る少し。性欲的衝動の急激に起りたる場合には時として　自殺又は犯罪を行ふに至ることなきにあらずと雖、最初に於ては性欲は只間接に犯罪に影響するに過きず。嫉妬に關する犯罪の如き、頗る後年に至りて初めて起るを常とすと云。

マアロー氏犯罪種類と年齢との統

計表き百分比例表を作れり。

犯罪種類／年齢	正常のもの	諸種犯罪者	殺人犯	身體に對する犯罪	財産に對する犯罪	竊盗犯	詐僞犯	狂疾
二十六歳以前	八、八	一〇、九	二、九	一三、五	二、七	一五、五	二、八	一七、〇
二十六歳ヨリ四十歳	六六、一	五六、七	四四、一	四五、九	六六、六	五七、二	六〇、〇	四七、〇
四十歳以上	二四、九	三二、二	五二、九	四〇、五	三〇、五	二七、一	三七、一	三六、〇

モリソン氏の調査

モリソン Morrison 氏に據れば、身體に對する犯罪數は十六才以下に於ては十六才乃至二十一才に於ては程多からず而して道德に對する犯罪の數は十六才乃至二十一才に於ては十六才以下に於けるに比して之に三倍又は四倍するを見る。浮浪、家屋侵害等の犯罪は十六才以下に於けるよりも十六才以後に於て多し。

米國少年感化院に於ける處罰の原因

千八百九十年の統計に據れば米國の少年感化院に於ける處罰の原因は左表の如し。

處罰の原因	謀殺及故殺	風儀違反	竊盗	虚言及浮浪	兩親に不從順	其他
犯罪男子の數	二三二	二一三	四一三六	一二六〇	一〇五五	一三八
犯罪女子の數	五八	一九三	七一一	三〇五	二七八	一一
合計	二九〇	四〇六	四八四七	一五六五	一三三三	一四八

同上犯罪の種類と其年齢

又同年の統計に基きて調査したる所に據れば、此等の少年が最初感化院に入れらるるに至りし原因は懶惰を最著しきものとして此犯者は最年少者に多く、特に十三才頃のもの最多數を占む。十四才は矯正不能、惡意の過失、闘入等の犯人多き年齢にして、十五才は小盗、浮浪、暴行等の多き年齢、十六才は窃盗、強盗、飲酒、十七才は私通の年齢とす。而して十二才より十五才の間又十五才より二十才の間に於ても財産に對する犯罪は頗る頻繁に發生す。之に反して身體に對する犯罪は強姦罪の外は二十一才乃至二十五才に於て其最高度に達す。

少年犯罪の原因

以上諸家研究の結果に徴するに、少年犯罪は少年が社會的境遇に順應するの困難甚大なるを表明するものにして、乃ち先づ其浮浪的本能と近世の學校束縛との觸接に於て犯罪の醸出せらるゝを致し、之に次で財産制度に對する反抗に依る犯罪生ず。而し

て身體に對する犯罪の如きは更に其後の年齢に於て發達するを常とするなり。

ロンブロソー氏の犯罪者の特質

犯罪の原因及其性質を詳細論究するは近世犯罪學の努むる所にして、此研究に於ては假令尙不備の點少からずとはいへ、ロムブロゾー Lombroso 氏は確に第一流の大家たるを失はず。氏が蠻人を以て本質上犯罪者なりとなせるは稍過酷にして事實に反すと雖、氏が通常の小兒は往々殘酷怠惰虛言及竊盜の諸段階を通過するものなることを暗示せるは參考に資すべき所少からず。氏の說に據れば、動物的本能が適度まで減殺せられて良心及理性の統御を受くるに至らざる時代の小兒の心を擴大すれば、是れ軈て犯罪てふ最恐怖すべき形相となること、恰も小兒の發育未だ完からざる身體を擴大すれば醜怪なる不具者の體相を生ずると一般なり。犯罪者の精神及身體上の特徵は又氏の學派に依りて精細に研究せらる。

ロムブロゾー氏の所說に據れば、一般に犯罪人は人體測定上、腦に於て小、顎に於て大、顏面表出に於て變化少く、充血、不均齊、突顎、耳の畸形等の傾向を有し心理上に於ても亦種々の點に於て變質の徵候を具有すと云。タルボット Talbot 氏に據れば

タルボットの變質者の特徵

變質したる小兒は神經質にして激し易し、虛榮心强く、氣力乏しく、氣質輕浮なり、强き制御を加ふるときは容易に常軌の外に逸せんとするの傾あり。發情期に於ては往往性的偏曲を生じ、或は極端に羞耻を感じ、或は極端に忌憚なき行爲を敢てし、或は又好んで他人を模倣し、又は容易に他の管理を受けず。發明創新の才、詩歌音樂及美術の趣味、博愛、熱誠の情は往々此等の少年中に於て最高度のものを見ることあり。然れども遊惰、半途挫折、精神不確、等の缺點は更に普通に見る所のものとす。彼等の多數には全力の集中を要し、且つ多時繼續するを要する仕事の如きは到底不可能なり。人生の種々の關係に對する常識的觀察力、實務的能力又は判斷力の如きは十分に達すること極めて少なし。記憶力は時として異常に發達せることあり。自覺的、主我的傾向大にして特に病的に意識過敏となるの傾あり。不眠症、神經衰弱症、依剝昆垤爾、神經病、歇私帝里、若は顚狂等の諸病に罹り易し。通常人に取りては左程にもあらざる原因の爲に人生の常道を破り又は罪惡を犯すを常とす云々。蓋し變質は生物界及人類界に於て隨處に見るを得べき事實にして異常なる性格及行爲は常に身體及精神上の變質者の形態的及精

神的特徴

の變質の兆候に伴ひ、精神上及道德上の變質は形態上に於て正常と異なりたる特徴に依りて表明せらる。顏面、顎、口、鼻、脚、軀幹、頸、頭、及其各部は各他の體部に對して或は過小或は過大なり。其他官能上に於ては特種の筋若は交感神經に異常の興奮を生じ、齒牙發生靜座及步行の習得、遺尿等に於て不規則なり。又癲癇及其他の疾患に罹り易く、年齡と外貌と相副はず。精神的特徴としては習慣、觀念及動作の異常、性的精神病、情熱的態度、主我心等を見る。ドウソン Dawson 氏に據れば感化院に於ける小兒は身長、體重、腕力共に愈小となり、苦痛感知力は過敏となり、頭部は小にして幅廣く、顏面廣く、顎又頭蓋骨は畸形となり、視官及聽官に缺陷あり、觸覺鈍く、注意、記憶及聯想の力劣等となるの傾向ありと云。又クラウストン Clouston 氏は身心上各種の發達停止狀態、及頭部及顏面部に於ける發育不整齊は道德上危險の徴候と認むべきものなりと說けり。

犯罪の種類は時代及國土により一定ならず

犯罪の種類は時代に依り國土に依りて一定ならず。從てゲーテ Goethe 氏の言へる如く各人は何れも犯罪を行へるものにあらざるなく、ソクラテースも、基督も其當時の國法に據れば何れも犯罪者なりし也。之に反して吾人の時代の大犯罪者の多數は他の何れかの時代に於ては卓越有用なる市民なるべきやも知るべからず。何人も古來犯罪の歷史を讀みて現今正當の行爲と認めらるゝものが他の時代に於ては犯罪と見られ古代に於て犯罪の重大なるものと認められしものが今日は賞讃すべき勳績と考へらるることの多きに驚かざるを得ざるべし。純粹なる犯罪の研究に於ても亦此等の廣き見地あることを忘るべからざる也。

犯罪行爲と正常行爲

所謂惡德及犯罪を以て之を通常正當の行爲と稱せらるゝものに比するに、其種類の饒多にして變化の大なる、其純正なる人間的興味の色彩を帶ぶるの多き、其人類變種の當に嚮往すべき新奇の領域を開拓するの廣きとに於て善良平凡なる市民生活は到底之と比すべくもあらず。犯罪の事實は小兒特に婦女子の注目を惹くの力多大なるべきは勿論、通常の成人に取りても犯罪の實史を讀むは假作小說を讀むに比して遙かに感興多く、所謂血湧き肉躍るを禁ずる能はざるものあるなり。されば公平なる讀書家は必ず當に言ふべし。近世兒童が古代に於ける血と鐵との豪壯雄大なる犯罪談を棄てゝ

刑事政策の必要

今世の猥瑣卑俗なる私人的德談を樂しみ讀むが如きは眞に悲しむべき事なりと。思ふに犯罪に於て之を敢行し、又之が露顯を避くるが爲に要する所の勇敢、敏捷の行爲は眞に少年の喝采を博せずんば止まざる底のものなり。吾人にして若し少年の爲に修身教授の理想的方案を立てんとせば、吾人は先づ如何にして犯罪學を倫理學よりも一層實行に適切なる者となすべきかを學ぶを要する也。文明進歩し社會政策發達せんか、國家社會は犯罪に消費せらるゝ勢力を轉用し犯罪の動機となれる本能に一層健全にして自然的なる發現を與ふるの方法を講ずるに至るべし。犯罪の多數は刑法の制定によりて滅却せられ得べからず、必ずや個人的及社會的境遇の改良に待たざるべからず。若し想理的貧困者を以て愚にして弱きものなりとせば、理想犯罪者は人生の全盛時に於ける最勇敢なるものなるべし。彼は大犯罪を計畫し實行し嘗に之が露顯を避くるを得たるのみならず、社會をして自己の正直にして且つ高尚なる人士なることを信ぜしむるを能くせしものなり。事實は斯の如し、曰く、犯罪と正直とは共に最大なる活力の線路を走行するものにして、其實質上に於ては犯罪の計畫者たる資質は正直なる事業に於ける成功者たる資質と同一のものなりと。例へば夜間竊盜の如きは其體軀强健にして冷靜なる頭腦と大膽と勇氣とを要するが如し。かゝる資質をして其活動の方向と範圍とを一新せしむるが如き方法を講ずるは個人的幷びに社會的に極めて緊要の事に屬す。輓近研究の途を開きたる教育病理學は少年犯罪の研究上、其幼芽たる幼兒の過失を研究するに於て重要なる貢獻を爲すものにして少年犯罪の研究は今後尙斯學に待つべき所多し。

教育病理學

教育病理學は千八百九十年ストリユンペル Strümpell 氏の著書に基を開き爾後クレペリン Kraepelin ウーフエル Üfer トリユーペル Trüper 等の諸學者に依りて盛に研究せらるゝに至れり。ストリユンペル氏は三百十四種の小兒過失を記載して以爲へらく、所謂犯罪は只是れ所謂過失の大書せられたるものに外ならず、所謂白痴は是れ愚鈍の極端なるものに過ぎずと。

學生年齡と操行との關係

マアロー氏は伊太利國に於ける「ギムナジウム」及「リシウム」の生徒三千十二人に對し教師が善、惡、無記の三等に分ちて附したる品行點の結果を調査したり。右生徒の年齡は十一歲より十八歲に亘る。氏の調査に據れば、十八歲に於ては七割四分、十一

歳に於ては七割、十七歳に於ては六割九分、十四歳に於ては五割八分の善行者あり。惡行に關しては十五歳のものに最多く、十三、十四歳稍少なく、十六、十七、十八歳に至れば又大に善行者を增すの傾あり。一般に言へば品行は十一歳に於て最も良く、十二、十三歳に於て下り十四歳に於て最惡となり、爾後少しづゝ改善せられて十七歳に至れば略十一歳と同じく、十八歳に至れば更に善良の度を加ふ。同氏は又伊太利國の學校に於ける春機發動期に近き男女學生に關し其受けたる處罰の原因に就き左表の如き百分比例を算出せり。

處罰の原因に關する調査

	男。	女。
處罰の原因。	五三、九〇	一七、四
爭論及毆打。	一、八〇	二一、三
怠惰不注意。	一〇、七〇	二四、七
不潔。	〇、四一	一四、六
不都合なる言語の使用。	一、〇〇	〇、二四
無禮なる言語及動作。		
作業嫌忌	〇、八二	一、二六
訓練違背。	一九、〇〇	一九、九
遊惰。	九、六〇	〇
逃走企圖。	一、七〇	〇
脫走。	〇、七二	〇

兒童處罰の種類と其人數の割合

シーヤス Sears 氏が兒童千人の受けたる各種の處罰數を百分比例を以て示せる表左の如し

不規律。	一七、三餘
不從順。	一六、〇
不注意。	一三、三餘
脫走。	一二、六餘
爭論。	一〇、〇
作業不敏速。	六、六餘

疎暴。	六、〇
爭鬪。	五、三餘
虛言。	四、〇
窃盜。	一、〇
其他	七、三餘

教師、兒童及父母の見たる兒童の過失

トリップレット Triplet 氏は教師の擧げたる兒童の過失に就き統計を作りたるが、之に據れば不注意は最多數を占めたりき。蓋し是れ過失として最教師の注目を惹くこと多きものなるに因るならん。又兒童自身の過失を統計したるものに據れば、爭鬪、毆打他童いぢめ等は最多數にして盜、不行儀、虛言、不從順、遊惰、動物虐待、不潔、貪欲等之に次ぐ。トリプレット氏に據れば父母の所見は亦其趣を異にせり。即ち强情、及我儘は最先頭に置かれ、他童いぢめ、喧嘩、用事を爲すを嫌ふこと等之に次ぐ。

兒童の行爲と天候

デキスター Dexter 氏は兒童の行爲と天候との關係に就き頗る暗示に富みたる研究を爲せり。氏に據れば過度に濕潤なる氣候は不品行を生ずるの傾最大なり。又氣溫の上昇、氣壓の變化、風の不規則なる變動も亦惡行を增加する傾あり。蓋し天氣の犯罪に及ぼす影響は、現に監督及感化院等の監理者に依りて一般に注意せらるゝ所にして、倫敦の銀行業者の如きは、大霧の日には重要なる帳簿の記入を差止むるを例とすと云。氣溫の犯罪殊に自殺及び遊惰に顯著なる影響を及ぼすは普ねく人の知る所なり。

遊惰及脫走

各種の少年犯罪中遊惰及脫走は發情期に於て著しく其數を增加す。而して此年齡は恐くは原始人民に於ては自然的成人期を示すものなるべし。學校を嫌ひ、戸外生活を好み、人類及自然に對して一層廣汎なる興味を感じ始むるは實に此年齡に在るを以て脫走の如きは自由の制限及不自然なる教育方法に對し、並に貧困なる家庭に對する本能的反抗として解釋せらるべきものとす。乃ち飢餓の如きは假令往々意識せられざるも而も其最有力なる原因の一となれるを見る。日常慣熟せる境遇は今や甚だ無味なるものと考へられ、制抑に堪へ難きの傾向は次第に增長す。時としては單に何處へか逃走し去りて遊牧的生活を樂まんとする一種の逃走狂を生ずることあり。善良なる人士も旅行中に在りては往々德義を蔑視したる行爲あるに至るが如く、是種の遊浪性は自

ら犯罪の增加を來すべし。水邊に赴き遊戯し若は游泳せんとするの情は不思議にも極めて著しきものあり。戸外は極めて面白きものと感ぜらる殊に春季に於て然り。從て發情期の少年少女は森林原野を渴望して學校の教室を脱せんと希ふの情恰も檻中の獸の如きものあり。彼等は常に一層粗樸むる生活に於ける絶對自由の狀態を憧憬し、特に著しきは往々其足部及頭部に屬する被覆物を除去せんとするの習慣にして、實に再び原始人類の狀態を實現せんとする旨目的本能より出づるものとす。此種の衝動の現出は若し嚴密に之を解釋する時は、以て小兒が其境遇に應じて其性質を順適せしむるの力なきを示すものとなすべき也。されば家庭に於ける管理にして一度破れんか、少年の各種の犯罪特に窃盗に陷る傾向は莫大なる增加を爲すべし。クライン Kline 氏に據れば遊浪少年は正常の者に比して其體格小なりと云。然れども彼等は其氣力に於ては一層大にして一般に戸外の職業に於ては最大の活動と實益とを爲す力あるものなり。

浮浪性衝動と犯罪

遊惰性の增加は又適法にして興味ある身體の運動の缺乏せる度合に應ずるものとす。所謂浮浪少年は身體及精神上の發達阻害又は變質の結果として仕事を嫌惡し職業を定めず遊浪生活を送るの徒なり、彼等は以爲らく、世界は自己を生活せしむるの義務ありと、かくて通常十代若は尙以前の年齡に於て其最初の遊牧生活を實際に經驗するなり。蓋し現在の境遇外に何處か他處を渴望し、之に對して特種の興味を感ずるは少年の慢性的幻想なりとす。直接現在の境遇に於ては一切の事物は平凡にして爛熟せり。此等の事物は往々其餘りに親近せるが故を以て少年をして嫌惡の念を生ずることさへあり、此に於てか必ず境遇の變化なかるべからず。而して彼等少年の生活が漂蕩的となると同時に定住生活に於ける一切の拘束と責任とは消滅す。竊盗を犯し而も人の爲に發見せられず、且つ嫌疑を受けず、而も又之を反復するが如き、此境遇に在ては不可能に非ず。かくて彼等は外部に表出せられたる良心とも稱すべき輿論の制裁を受けず、而も彼等は何等內部的良心を有することなきを以て其次第に有害の狀態を成すに至るは自然なりとす。

青年期は兩親の家庭より脫出して自己の新家庭を設立すべき正常的時期なり。而して人生の事情に習熟せんが爲には長年月間廣く四方に遊びて處世上に必要なる善良な

青年移住欲は正常の満足

る習慣を得ざるべからず。是れ實に移住欲の方に盛なるべき時期なり。而して若し之を爲し得べき資財あり、且つ之を爲すの希望あらんには、確固たる地位を得て定住する前廣く四方を游歴する事は人生の過程に於て何人にも缺如すべからざるの經驗なるべし。但し此游歴は必ず少年の獨立生活をして完全に發展せしむるに足り、且つ能く少年を滿足せしむるに足るべき定住地の選定に於て終局せざるべからず。かの慢性的游浪は單に此種の正常的段階に於ける移住欲の殘物の誤りて發展せられたる場合と見るべきものなり。

罪惡と虚言

罪惡は菌苦の如く隱處に於て繁榮す。而して罪惡を隱匿するが爲に虚僞を行ふは普に罪惡を促進するのみならず、或種の虚言は罪惡の原因となり更に又罪惡の結果として發生することあり。虚言を處分するに於て切要なる第一歩は善き虚言と惡しき虚言とを鑑別するに在り。著者自身三百人の正常的兒童に就き調査せる所に據れば虚言も亦種類多し。蓋し小兒が初めて自ら實際に無き事物を想像し、且つ叙述するを得ることを知るの時期に達するは極めて著しく之を認むるを得るものにして、此時期に於ては盛に想像を馳せて種々の荒唐無稽なる叙述を爲すを樂しむの風あり。此兆候は小兒の遊

小兒の遊戯と自己欺瞞

戯中自己欺瞞てふ事が興味の一要素となれるものに於て最善く之を認むるを得べし、即ち彼等は動物遊び、醫師遊び、食人鬼遊び、學校遊びを爲し、又死したる體を扮し、其他凡べて其見聞せる事物を模倣し以て自ら喜ぶものなり。時としては三四才の小兒にして突然に五耳を有する豚を見たりとか、櫻樹に生りたる林檎を見たりとか、其他極めて荒唐なる放言を爲すことあり。而して其實は必ずしも虚誕を以て人を欺かんとするにあらずして單に彼等が經驗とは離れて新に得たる想像を述ぶるに過ぎず。少年をして眼前粗大の現實以外最高の眞實の何たるを知らしめ、實物以上の或物としての思想を發展せしむるが爲には此等の傾向は宜しく適當の管理を加へらるべきものにして、

此等の傾向に對する注意

決して一概に除去せらるべき者にはあらず。特に想像的文學の發達の如きは後來此種の性質に待つこと多き也。二人の姉妹あり、常に自ら姉妹ごつこをして遊び、恰も斯くすることが益彼等の姉妹たることを確實にするものと思へる如くなりき。サアジエームス、マッキントッシュ Sir James Mackintosh は春機發動期の頃羅馬史を讀み、常

に自らコンスタンチノープルの皇帝なりと思ひたりき。有名なる詐欺術家カグリオストロ Cagliostro は青年期を以て瞞着の才を練習するに適せる時期と爲したりき。思ふに各種の夢幻的空想は青年期に於て其黄金時代に達するものにして、少年の爲に既知の現實界を補足し、吾人の諸能力を統合する所以のものなり。固より惡結果も亦多少之より産出すべきも、而も身體及精神の善良なる諸性質の之よりして生起することは遙に多大なるものある也。此等は實に後年詩歌美術及哲學の高尚なる虚僞となるべきものなり。但し之が教育上の處置は妄にすべからざるのみ。

眞實の觀念の個人的差異

小兒に於ては蠻人に於けると同じく個人的好惡の念によりて眞實てふ觀念に大なる異同あるものとす。彼等は眞實を以て單に其親好するものに對してのみ話すべきものとなし、其憎惡する敵に對して虚僞を話すは正當の事にして毫も尤むべからざるものとなせり。彼等は又其友に對しては往々虚言を以て相戲むることあるも、之を其母に話すべしと言はるゝときは容易に其虚言なるを白狀して母を欺くに至らざらんとを勉むるものなり。彼等は學校に於ても自己の感好する教師に對しては欺瞞を行ふを憚かれり。友情は信任と秘密とに依りて益鞏固にせらるゝ者なるが、友情の減衰するや秘密を守るの約は其有効の度を少くするを常とす。

最惡なる虚僞

最惡なる虚僞は恐らくは私慾の爲に行へる虚僞なるべし。此種の虚僞は種々の困難の際に於て利便を與へ、少年をして其弱點と罪惡とを隱蔽するを得易からしむるものにして、是れ實に少年の甚陷り易く而も矯正し易からざる惡事なりとす。一切の惡習慣は殊に人をして隱匿の虚僞に陷らしめ易きものなり。是れ不正の事を爲したるものは處罰を避くるが爲に必ず之を隱蔽せんとするに依る、かくして卑劣の念は次第に生ず。

義勇的虚僞

義勇的虚僞（ヒロイック）は往々高尚なる目的に達するの手段として是認せらるゝことあり。道德學者は自己の生命を助けんが爲めに虚僞を行ふを不德と爲すにも拘はらず、尚ほ好んで人に教ふるに其の母の生命に關する如き場合には其在宅せるを詐はりて不在なりといふは却て道德上の本務なりといふを以てす。醫師が全く回復の望なしと信ぜる患者に對して慰安の方便として尚其望あるを告ぐる如きも其場合少からず。是等の場合は

何れも其目的は高尚善良にして其虚構する所は瑣細の事に過ぎず、然れども卑劣なる目的の爲に更に悪しき虚僞を構ふるの弊、恐くは又此によりて生ぜずんばあらず。又此種の義勇的虚僞を要する場合は、嚴肅なる道德律の平凡にして一樣なる義務法則より脱出するを得るの機會を與ふるものとして往々少年の歡迎する所となるも、而もかゝる場合に於ては往々良心の激昂し易く、誤謬を生ずること多きを致すものにして、其弊亦從て生ずるなり。

虚言に對する一種の恐怖

青年往々過度に文字言語に拘泥するものあり。凡べて文字通の事實に違ふを以て一樣に悪事と思惟し、種々の方法に依りて以て虚僞に陷るを避けんとす。例へば談話の際頻に「あらず」「恐くは」又は「と思ふ」といふ類の語を低音に挿入し、時として此種の語句を用ゆること數十回に及ぶことありて、以て自己の言語より生ずる有意的若は無意的虚僞の有罪の度を緩和せんと勉むるが如きは吾人の往々實見する所なり。

詐欺狂

自衛の爲にする私利的詐虚僞に次ぎ且つ青年犯罪の研究上特種の心理學的興味を有するものを詐僞狂とも稱すべき種類の虚僞なりとす。此種の虚僞は特に十代の少女に於て病的に發見せらる。彼等は私慾心と矯飾の念とに充ち常に何かに假扮せんとし、又人の注目を惹かんとする等の欲望を有す。感應術及催眠術に關する近代の記錄には此種の症候の著しき例證多し。フエリアニ Ferriani 氏は虚言の悪習を有すると稱せられたる少年五百人を研究し、其虚僞の種類に下の如き九種あるとを發見せり。即ち四百七十二例は本能性及疾患性のもの、四百一例は自衛の爲のもの、三百六十例は他人に對して優先を占めんとする虚榮心よりせるもの、二百三十一例は模倣性のもの、三百八十七例は私欲に因るもの、百九十五例は嫉妬及復讐に因るもの、四百八十八例は想像に因るもの、三百七十例は懶惰に因るもの、二十九例は高慢心に因るもの是なり。右の結果に據れば想像に因る虚言は最多く、本能及疾患性のものと、自衛の爲のものも亦之に次で多きを見る。是れ蓋し小兒の活潑なる心は常に事物の驚異すべき方面に向ふに因り、又自ら弱點を有し及恐怖を懷くものは非難若は處罰を避けんが爲に常に之を隱蔽せんと企つるに因りて然るものならん。

フエリアニ氏の虚僞の種類

憤怒の

憤怒の情は心理上未だ多く研究せられ居らずと雖、英語に怒に關する幾多の語ある

情

に徴するも、其人間の性質に於て一種特異なる事實たるや明なりとす。人の一度怒るや、其顏色を或は赤く、或は青白く變じ、拳を握り、身體を硬くし、呼吸を荒くし、野獸の如く叫喚し、毛髮竪立し、身を悶へて種々奇怪の姿勢を爲し、頭を打ち付け、面相を變じ、往々嚙み付くことすらあり。爪を以て搔き抓り、引き、蹴り、抱き緊め、打ち、時として人を殺すに至るもの亦少からず。而して憤怒の情十分に發露し盡した

憤怒狂

る後は大抵甚しき悔恨の念之に次ぎ、決して再びかゝる我を忘れたる狀態を爲すまじとの決心を爲すものなり。憤怒は實に短期の癲狂なり、此間に於ては人間は他人に對して野獸となれるなり。法醫學並精神病學は共に易怒病に就きて研究する所少からず多くの學者に據れば、憤怒狂は抵抗すべからざる衝動を伴生するものにして、精神の自由は之が爲に滅失するものとす。フオイエルバツハ Feuerbach 氏は發怒の瞬間に於ては殺害の如きは最高尙なる性質の人にも有り得べき犯罪なりと云へり。怒は實に少年犯罪の重要なる一元素を爲すものとす。

憤怒の原因

憤怒は時としては何等の原因なくして發するが如く見ゆることありと雖、一般には自己の强烈なる意志に對する妨害、自我の秘密なる部分に對する攻擊、自由の抑制、自負心の傷害、嫉妬、個人的反感、習慣及自發運動に原因するを常とす。是等の諸原因は青年期に於ては特に銳敏に感知せらる、從て憤怒は凡ての他の感情と同じく青年期に於て特に其勢を加ふる者とす。然れども憤怒は正當の場合に於ては最初激烈に發生する時期ありて、之を經過したる以後は次第に抑止せられ易く、且つ內部的の者となるの傾あり。

青年期と憤怒

大抵の少年は春機發動期頃には爭鬪を爲すの傾著しく增加し、往々何等の原因なきに事每に憤怒と憎惡とを向くるとあるものなり。但し彼等は表面猛烈なる怒を發し何事をも顧みざるの風ありと雖、其衷心に於ては案外思慮分別の念を失はざること多し。特に此年頃よりして發怒の勢烈しきと共に、又次第に其害を悟り、種々の方法に依りて之を抑制せんと試むるものにして、特に女に於て最も著しく此變化あるを見る。蓋し此年齡に於ては自我を感知するの力著しく發達するを以てあらゆる苦悶は一層峻烈に感ぜらる。而して男女共に此時期に於ては恰も又新なる心理的張力の發生するありて一方感受性の增加するに對して一方克制力の增加を來す。斯くして憤

憤怒の情に對する注意

怒は防止せられ壓抑せらる、然れども斯の如き憤怒の一旦發するや、危害の度は遙かに大なるものあり、是れ其體力强大を加へたるが故のみならず、又其復讐實行の方法に關して久しく熟慮を經たるものなるが故なり。抑も憤怒は人生の競爭に活氣を與ふる廣大なる勢力たるべきものなり。乃ち宜しく發怒の目的物を選擇し、且つ其形式を改新し、之が養成に意を加へて以て正當なる憤怒たらしむべく、決して之を減除すべきに非ざる也。特に健康にして完全なる男子は決して全然平和なる動物たるに甘んぜざるべし。卑怯と勇氣の喪失とは常に或度に於ける心的去勢を意味するものとす。著者が前章に於て青年體育の必要なる部分として拳鬪を推稱せるも亦是意に外ならず。蓋し憤怒の迸發は腕力に現はるゝを最本能的となす。而して拳鬪に於ては發怒に依りて腕力を逞しうするも、常に對手の攻擊を防衛するに注意せざるべからざるに依り、憤怒の爲に精神の平衡を失ふに至るの虞なし。是れ實に發怒の方法として最健全なるものといふべき也。

嫉妬

嫉妬も亦少年犯罪の有力なる一要素なり。フェリアニ氏に據れば幼年者が嫉妬の情に驅られて行へる罪過九十七例中、男女共に侮辱行爲最多く、次は稍重き傷害又次は稍輕き傷害にして誣妄及誹毀、未遂又は既遂殺害等又之に次ぐと云ふ。マーロー氏に據れば嫉妬の本能は少年男子よりも女子に多く、其割合は凡そ一、五に對する十七の比なりと云。蓋し容色才智教育等の點に於て他人の自己に優されるを容認するは、女子に在りては頗る堪へ難き事にして、敵對競爭の心は自然之を驅て必死の行爲に出でしむるを致すべき也。さればロムブロゾー氏及フェレロ Ferrero 氏の如きは二人の青年女子の間に在りては如何なる堅固なる友情も嫉妬の勢力に抵抗する能はず、且常に之が爲に猜疑と不確實との狀態を免るゝ能はざるべきを主張せり。幾多高尙なる性格を有する人士乃至所謂大人物と稱せられたる人と雖、往々其最善の友人の不幸に對し悲哀を感ずると共に其心の深底に於ては自己勢力の範圍の擴張を來すものとして暗に欣喜の感を交ふるを禁じ得ざるは事實なり。思ふにかゝる情の由て來る所は甚だ古く、過去に於て吾人の祖先が極めて小なる社會を成し、生活の方法極めて限られたるに方りては組合人員の減少は即ち供給增加を意味するを以て、勢、他人の不幸を喜ばざる能は

女子の嫉妬

嫉妬の情最も激烈なる時期

ざる如き事情ありし時代に淵源するものならん。此情の最激烈の度に達するは之を春機發動期に於ける他性の愛情に對する競爭に見るべし。動物界に於ける戰爭、美飾、誇示其他種々複雜なる性的淘汰の方法は何れも嫉妬競爭の發現せるものに過ぎず、競爭の最盛なるは實に此範圍に在り、愛情の最初の發現と共に嫉妬心は著しく之に伴ひて增加するものとす。

作虐の本能

他人を揶揄し、挑發し、激昂せしめて恰も其發怒點、啼泣點を試みる如きの惡戯を爲すは何人も或年齢に於て、一度は經驗する所にして、一轉すれば屢犯罪に發展すべきものとす。パーク Burk 氏は此種の事實に關し種々の興味ある實例を採集せり。兒童往々自己より年少の者、若しくは力弱きものに對し、或は石を投じ、或は抓り、或は掌もて打ち、或は毛髮、衣服を引きて之を苦しめ、其苦痛に堪へざるを白狀し、若しくは仁惠を求むるに至る迄は之を止めず。少年殺害及少年苦虐犯にて有名なるジェッス

此本能に基づける犯罪

ポメロイ Jesse Pomeroy は自ら少女を殺害したる原因を述べて、單に喉を切られたるとき少女が如何なる動作を爲すかを觀んと欲せしに因ると云へり。若し少年にしてか

かる心理的傾向のまゝに生長するときは其多くは狂人となるべく、大多數は犯罪者となるべきや必せり。妄に爭鬪を構へ、暴力を揮ひて私利を計り、財物を强奪し、勞役を强要し、弱者を威嚇虐待し、他の最嫌惡するものを用ゐて之を苦しめ、例へば特に蛇、火等を嫌ふものに對して是等の物を示し通路を妨げ、椅子を奪ふ等、凡べて是等は斯る惡行を爲すべしとも思はれざる者、若しくは一般に性質溫良なる者に於てすら往々發現する不可思議なる作虐本能 (Teasing instinct) の實例とす。其他暴行を加へんと脅嚇し、又は實際に之を爲し、財物を取り、及ひ之を隱匿し、綽名を呼び、個人的性癖を尤め、事實を虛構して他人を失望せしめ、恥辱又は嫉妬の念を激せしむる等も亦同樣の動機に依るものとす。ロムブロゾー氏は犯罪的本能は小兒に普通のものと爲せり。是れ犯罪の事實に對する說明を容易ならしむるに足る一假說なり、然れども其意は固より直ちに小兒を罪するものとして解すべからざるなり。蓋し原始人類は自己の家族以外の一般人類に對しては常に敵意を有せしものなり。之を彼の原人に視るに、彼は父としては善き父なり、夫としても、又同種族の一人としても恐くは善良なる

少年苦虐と隔世遺傳

性質を有する人たるを失はず、而も彼の德性の作用は單に其親近者にのみ限られ、其外に對しては彼は猜疑、害心及烈しき敵意を示すのみ。彼の作虐者（Tormentor）は實に此親疎に對する情念の分界を混亂せるものにして、隣近者をも併せて未知の人及敵人と同一に待遇せんとするものなり。抑も愛情は初は只之れを少數にのみ及ぼし得るものにして愛情を多數人に及ぼし、延いて四海同胞の觀念に達する如きは、多くの修練を歷て後徐々に之れを能くすべきのみ。之れを要するに或型の少年苦虐者（Child Torturer）に見る所の悲しむべき事實は之を隔世的遺傳に歸する外、說明を得難かるべき也。

少年間に行はるゝ諸種の奪略的制度

シエルドン Sheldon 氏の興味ある統計の示す所に據れば、米國に於ける小兒の計畫に係る諸種の活動中、奪略的制度の數は十一乃至十五の多きに達し主として男兒の間に行はる。而して其中には盜賊隊、漁獵倶樂部、遊戲軍、異地方間の爭鬪の爲に特に組織せられたる集團、城砦建設協會等を含む。而して少年が斯る團體を組織するの時期は十二才の頃を最盛と爲し、以上の年齡の者に於ては次第に鞏固なる結合體を厭ひ稍自由なる運動競技上の倶樂部を成すに至る。シェルドン氏の少年男女が組織せる奪略團體數に關する統計左の如し。

シエルドン氏の統計

性＼年齡	八	九	十	十一	十二	十三	十四	十五	十六	十七	合計
女	四	五	三	〇	七	一	一	三	一	〇	二五
男	四	二	十七	三一	十八	二二	(一一)	七	一	〇	一一一

各國に於ける少年團體の狀況

此種の奪略的習慣は年少の兒童に在ては、無邪氣のものと看做すべく、正常の場合に於ては十代の初に至れば自然に此惡習は除去せられ、之に用ゐられたる氣力は運動競技上の團體の組織に轉用せらるゝものなりと雖　若し然らざる場合には甚危險なるものとなり、野武士、海賊主領及掠奪蠻民の如きものを以て其の模範と爲すに至る。其竊盜を事とせる團體は食料乃至彼等に取りて不用なる物品をも掠奪し、是を洞穴、森林等に隱匿す。中には專ら電鈴電線の類を盜むものあり、或は遊戲用の木竿等の類を窃むものあり。ニューヨーク東部には這種の種々の團體ありて時としては殺戮をさへ

も行ふことあり、團員は種々の相關によりて互ひに氣脉を通じ、集散を爲す。倫敦に於ても這種の團體は一層組織的にして其數も亦多く、團體相互の間に武器を用ゐて爭鬪を爲すことあり。伊太利に於ける「カモラ」(Camorra)及シシリーに於ける「マフィヤ」(mafia)の如きは此種の犯罪的秘密結社の最組織的なるものなり。

竊盜の最初の形式

竊盜の行爲は所有權の何なるを知らざるに起因す。原始人は種族制度の下に在りて多くの物は大抵其共有する所に係り、個人の所有物とては範圍至て少なく、自己の必要を充たすべき物件は隨意に之を取り且つ用ゆるを得たりし也。凡そ各種の物件は最多く之を需要し且最善く之を使用するの人に屬すべしとの考は極めて深き根柢を有する本能にして、個人的財産の神聖てふ精微なる觀念の如きは人間進化の後段に至て始めて發達したるものとす。小兒の盜を爲す如きも、通常其直接の需要と欲求とを滿足せしむるが爲に過ぎず、其食物若は之を買ふ爲の金錢を盜むこと最多きは特に注目に値すべき事ならん。

騙取又は竊取の行爲は盜てふ事に關し多少の觀念を有するに至れる後の事に屬す。

騙取及竊取

竊盜は又往々冒險的感情を滿足せしむるの手段として行はるゝことあり。强盜及刼賊は青年期の後期に至る迄は其數甚少し。是れ一部は腕力と自信の念との尙備はらざるに依るならん。然れども青年後期に至れば財産横奪に伴ひて人體に對する恐るべき犯罪も亦遂行せらる。

强盜及刼賊

少年盜犯の年齡

マアロー氏に據れば、家内の盜犯は十五歳以下の小兒に最盛なり。而て感覺と虛榮心を滿足せしむる爲に盜を行んとする念慮は十代の初に於て甚著しく增加するの事實あり。カララ Carrara 氏に據れば女子の盜癖は男子よりも更に矯正し難く且つ不思議にも月經期中に於て特に盛に現はるゝと云。フェリアニ氏は以爲らく、十四歳以下の小兒の容易に過失に陷るの傾あるは其省察力の乏しきが爲なり、其盜犯の如きも此時期にては皆瑣細なり、然れども十四歳以上に至れば數個の小盜を行ふ代りに一層大なる計畫を爲すものなり、且つ盜、數犯に涉ることは田舍よりも都會に多しと。

放火狂

放火犯人特に放火狂型のものは通常青年期に多し。凡そあらゆる化學的現象中人を魅するの力、火の如く大なるはあらず、拜火教徒の萠芽は何人も之を有するなるべし。

少年放火の重なる動機

蓋し好みて火を凝視し、其赫々として燃へ、炎々として焰を吐き、やがて燃料をして烟と灰とに化し去らしむるを見るを喜ぶは多くの人の有する強き本能にして、放火の情は實に此に兆するものとす。普通の成人に在ても往々、火を觀るに因りて想像力が一種麻睡的若しくは殆催眠的ともいふべき刺戟を受くることあり、乃ち花火の如き、歡樂と饗宴とを暗示し、其の夜に於て行はるゝや、暗黑を滅除する光耀壯大のものとして感ぜらる。幼年の或時期に達するや「マッチ」を擦り、若は物を火中に投じ、以て其燃燒を觀るを喜ぶの情著しく生ず、而して是れ實に最純粹なる放火性の萠芽ともいふべきものにして、正常的には之が發現は抑止せらると雖、小兒か火を好む性あるは尙ほ其の殘存せるものとして見るを得べし。此他、少年放火犯の動機となるものは、火災の際に於ける蒸汽機關の響、水の噴出、人命財產の救護、其他種々の危難、喧鬧、混雜より生ずる新奇の光景を觀んと欲するの情にあり。少年は此狀況を目擊して以て自己の力能く斯る大活劇を演出し得たるに滿足せんとす。斯く破壞を喜ぶの傾向は其由來する所遠く人類の祖先の奪略生活時代に在るべし。之を要するに、少年の放火は放火及其直接の結果より一種の快を買はんとするに起因するものにして、復讐及憎惡の念を發表するが爲の放火とは根本的に異なれり。

飲酒の心理

飲酒の心理は新奇にして且つ興味ある問題となり來れり。是れ吾人が節制の倫理を知るの前に方りて須らく先つ十分に研究すべき所のものたり。抑も飲酒の習慣は多樣の發生原因を有す。宗教上飲酒を必要とする儀式は文明國民にも野蠻人にも齊しく見る所にして、其理由とする所は、蓋し神經を興奮せしむるは精神を神靈と融合せしめ、幻覺を誘起し、疾病及惡靈を驅除するの効ありといふにあり。飲酒の心理に關して最完全なる論究を爲したるパートリッヂ Partridge 氏の所說に據れば、亞米利加印度土人の各種族に在ては元服式に於て飲酒を爲すは極めて普通にして其他一切の祭式乃至葬儀の際にも飲酒せざれば式を行ふ能はずと云。蓋し原始時代に在ては飲酒は一定の季節又は特殊の場合にのみ行はれ、所謂飲酒家の時を擇はず醉酩するが如きことなかりき。然れども如何なる種族も何等かの刺戟物又は麻醉料を有せざるものはなかりしなり。さればサミュールソン Samuelson 氏は何れの國も其文化の最高の段階に達す

る迄は飲酒は盛に行はれしものなりと說き、又スペンサア Spencer 氏は節制てふ事は其初は飲用の酒の一部を神に供するより起りしならんと說けり。抑も酩酊の快樂は感情の領域を擴大し、且つ其の强度を增加するに在り。酩酊に依りて吾人は活力の增大したるを感じ、悅喜の情、內に充溢し、小節を撤去し、自信を增加し、他人に接するに愛想好きを致す。此快樂の最普通に享受せらるるは春期及夏初に在り、秋、冬に於ては最少し。バートリッヂ氏の結論に據れば、飲酒は學校生活に於ては未だ始まらず大多數は學校を卒業したる後、社會に出て年長者と交際するに依りて始めて此習慣を得るものにして、其始は殆と常に社交的必要に原因すと云、飲酒家の多くは獨酌を喜ばずして衆人と共にするを好むも亦偶然にあらざるべし。飲酒の歡樂は古今の詩歌に於て盛に頌揚せられたりき。

精神發達と飲酒慾

人生の何れの時期に於ても、身心發達の度其最盛に達せる青年期に於ける程、感情の强烈、感覺の新奇を要永し、平凡、冗長、煩瑣を嫌惡すること甚しきはあらず、學生の校規を犯し、囚徒の獄則を破ること亦此時期に於て最多しとす。原始人類、特に男子に在りては、其活力が數日又は數週を一期として、或は著しく昂進し、或は著しく停滯するを常とせり。思ふに精神狀態に時々激動を見るは、恐くは人類の向上進步に於て有益の事にして、且つ性的衝動及張力と密接の關係を爲すものなるべし。されば青年期に在ては、强烈なる感覺を愛好するは益青年の能力を大にし心的發達に資する所以にして、酩酊の如きは人間の向上的衝動が一種の表出を爲したるものと看るべき也。或學者の如きは生命の變化作用を多樣ならしめ自我感情（セルフフィーリング）を保存し、苦痛を除去するの方法として刺戟物は到底缺べからざるものとさへ考へたり。實際上刺戟物の愛用は神經衰弱症の一表現なりとの見解と、バード Beard 氏の獨立と生產とに對して最大の欲望を有し、氣力旺盛にして自由を愛し且宗教に熱心なる人民は飲酒を好むこと最多きものなりとの意見とは何等矛盾あるなく、不節制は精神發達の副產物と云ふべきなり。

腦使用

「監獄及囚徒」の著者ホースリー Horsley 氏曰く、腦使用者の飲酒症は最矯正の望なきものに屬す、腦力の增大、從つて腦使用の增加從て、腦の疲勞の增加、從て刺戟物

の増加は飲酒癖を増加す

の必要の増加、又從て飲酒習慣の迅速なる増加、凡そ此等の段階は自己の父よりも多くの教育を受けたるものに於て甚だ多く見る所のものとす。酒精を消費するは各國中オウストラリヤを第一とす。該國に在りては初等教育は英國に於けるよりも更に一般に擴布せられたり。而も犯罪者數は人口數とは比例を取り難き程の多きに達するを見る。

飲酒の習慣を得る年齢

バートリッヂ氏に據れば最初飲酒の年齢は六十五例中四例を除きて他は凡て二十二歳以前に在り、就中十六歳は最著しと云。又氏が四百九十八例に就き調査せる所に據れば飲酒の習慣を得るの年齢は二十歳を最高とし、此以後は二十二歳に於て最多く、二十四歳及三十歳之に次ぐ。其以後の年齢に故ては飲酒を始むるもの〻數次第に減ず、而して二十歳以前に在りては十八歳及十五歳に於て最著しく多數なるを見る。

賣淫の原因

賣淫の心理は漸次學者の注意して研究する所となれり。フェリアニ氏は巴里市に於ける一萬四百二十二例を調査し賣淫の原因に關し略左の如き分類を爲せり。

一般の不德及惡風に因るもの……二、七五二

夫、兩親、若は其他一家の維持を爲す者を失ひたるに因り、及び貧困に因るもの……二、一三九

私通者の誘拐に因るもの……一、六五三

保護者、雇主、其他自己の從屬し居るもの〻爲に賣淫を爲すに至らしめられたるもの……九二七

夫、兩親等に遺棄せられたるに因るもの……七九四

贅澤の結果に因り又は奢侈を希ふに因るもの……六九八

家族外自己の愛好する人、又は其他の人の勸誘に因るもの……六六六

羞恥の情の喪失と賣淫

兩親、夫、其他家族の勸誘に因るもの……四〇〇

自己の子女、兩親、其他家族の貧困、又は疾病者を救ふが爲めのもの……三九三

デピン Despine 氏及フェリアニ氏は羞恥、即本能的謙遜の觀念を分析し、其喪失を以て賣淫の罪惡に陷るの主要なる原因の一と爲せり。家族一同に一室に群居すること、常に卑陋なる言語、說話、繪畫等を見聞すること等は何れも羞恥の念を破壞し、此

自尊の

念

觀念の春機發動期に於ける正常的增進を沮止し、かくて罪惡に對する最有力なる防砦を失はしむるものとす。自尊の念は羞恥に比すれば更に複雜なる觀念にして亦罪惡を豫防すべき主要なる勢力とす。苟も正當なる自愛の念及自己の權威を保持するの念にして減退せんか、德性の失墮は從て來るべし。豫め賣淫か如何なる惡結果を及ぼすものなるかを知るの力なき事、淺薄なる、過度なる且つ輕浮なる虛榮心、努力と勞働との嫌惡、家庭の無味、過度に發育し若は早熟したる感覺を有し、且つ之を滿足せしむべき方法に關する實地上の知識と思想とを有する事、感情に走せ、激し易き氣質、容易に虛言を爲す傾向、衣服及飲食に關する疎慢不潔なる習癖、及一般に身體保持の方法不良なること、凡そ是等は相因りて現に著しく增加しつゝある賣淫てふ大罪惡の心理上に於ける基礎と背景とをなすものとす。輓近諸學者の主張する所に據れば、誘拐者の犧牲となりて賣淫の罪惡を犯すものは其性質必ずしも不道德的ならず、往々却て純潔にして無邪氣なるものあり。されば是等の罪惡の全責任は惟り賣淫者之を負ふべきにあらず、社會も亦平生女子に對して常に苛酷を極め毫も其罪惡を爲すに至るべき

賣淫の心理的基礎と背景

賣淫に對する社會の

責任

事情を緩和するの方法を講ぜざりし罪あるを以て共に其責に任ぜざるべからず云々。

諸學者の說

或學者は以爲へらく、多くの社會に於ては一種の腐敗力を有する家族ありて、少年を誘導して賣淫の罪惡に陷らしむるなりと、或學者は以爲へらく、血統又は家庭の不良なる家の女子には熱烈にして且つ早熟せる情欲の發動する時期ありて、十代の幼年に於ては之か防止に關する知識の未だ具はらざるを以て特に危險に陷るの虞多し。但し是罪惡を樂むの情は幾もなくして嫌惡の念に變化すと。或學者は又情慾的要素を極めて輕視し、專ら重きを精神的怠惰に置き、是罪惡の主因を虛榮心、小說の耽讀等に歸するか、又は他の要素に歸せんとす。要するに是罪惡は一切の罪惡中、今尙最學者の理解する所となり居らざるものとす。例へば賣淫を行ふが如き女子が、其不實なる情人に熱烈なる愛着を爲し、其打擲惡罵を受けて之を忍ぶが如きは多數の學者の以て解し難しとする所なり。是等女子に見る所の極度の同情愛憐の念は只彼等の間に行はるのみならず、往々其小兒に對し、其動物に對し、加之其親族に對しても甚著しきものあるは其一般道德性の無感覺なるに對照して一大矛盾の觀を爲すものとす。彼等の

解釋に困難なる賣淫婦の心理

多數は僞善を粧ふに巧妙なりとは云へ、其未だ嘗て知らざる筈なる羞恥と謙遜とを粧ふを見るに單に之を虛僞とのみ觀るべからざるものあるが如し。彼等は又名譽の觀念を有し、其友人に對する正直と眞率とは往々極度に達し、賞讃を値するものあり。彼等の或者は又其熱烈なる宗教心を有し、其棄去りたる家庭、兩親に對し、及自己の幼時の回想に對して最優しき情緒を有するもの少からず。要するに此問題は決して單に婦人の性質又は其の現在狀態のみの研究にては解明するを得べからずして、必ず古昔の社會に關する進化論的研究に待たざるべからざるものなるが如し。

自殺統計

自殺の統計は社會動學の重要なる題目たり。如何なる犯罪と雖、斯の如く全く食物職業、氣候、年齢、性別等に從屬せるものあらず。即ち自殺統計は社會の健全不健全を卜すべき最鋭敏なる指針なりとす。古代の學者、特に「ストイック」派の學者は生活を好まざるが爲め自殺するは人間の權利なりと思惟せり。自殺を以て一般に罪惡と看做すに至れるは特に近世の事に屬す。自殺の動機は之を確認すること難しと雖、其心理學上の問題中最興味あるものゝ一たるや明なり。人が其自由意志の作用に依りて其

自殺の動機

生活意志を否定するの力ありとは一見逆理の觀なきにあらず。而も或學者は本務の觀念に依りて自殺に對する嫌惡の念を克制するは最勇氣ある行爲なりとし、此行爲は決して自己殺害と呼ぶべきものにあらざるを主張せり。生と死との間には一種の相殺作用あるものゝ如く、繁榮の時代、强盛の種族にありては現在の生存は極めて樂しきものなるべく、國家衰亡し、種族發展の望失はれたる際に在りては自殺は多く行はるゝものなるべし。誤りて惡名を受けたるもの、惡習に陷りて到底解脫の望なしと信ぜるもの、罪人にして死刑の宣告を受けたるもの等に在りては自殺は決して難事にあらず。天性虛弱なるもの、遺傳に依りて惡疾を有するもののの如きも亦其生命は神經の苦惱たるに過ぎざるを以て、自殺に對して多く躊躇することなかるべし。

自殺者の年齢

各國の統計を通覽するに、自殺の數最多きは普通四十歲乃至五十歲の間に在るが如し。而して最近十數年來各國に於て少年自殺者の漸次增加する傾向あるは諸學者の等しく認むる所にして、プロアール Proal 氏に據れば、佛國に於て少年自殺者の數千八百八十年には十六歲以下の者五十五人、二十一歲以下の者二百六十七人なりしが千

八百九十二年には各八十七人及四百七十五人に增加せり。ベエル Baer 氏も亦英、伊、獨、佛諸國に於て少年自殺の數の增加する傾あるを說き、其多くは兩親に依りて事實を隱蔽せらるゝを以て之に關する正確なる統計を作る能はずと雖、主要なる原因は春機發動の影響と精神異常とに在るべきを論ぜり。通常男子の自殺者數は女子に比して遙かに多し。然れども十五歲乃至二十歲の一期に於ては女子の自殺者數、比較的多きを見る。蓋し春機發動が女子に在ては其の時期短かく、從て男子よりも一層急激なる變動を感ずるに依るものなるべく、之を男女を通じて該時期に於て自殺の著しく增加する事實に照して、自殺と春機發動の事實と關係極めて密なるを推知するに足るものとす。

春機發動と自殺

少年自殺者の最普通なる心理的原因は死して他人を困しめ以て其怨を報ぜんとするに在り。他人の爲め怒からせられ、辱しめられ、然も復仇の力なき場合の如きは往々此手段に出づるものとす。此事は最年少者に多く、女に在りては年稍長したるものにも往々之を見る。

少年自殺者の心理的原因

其一、復仇

次に普通なる少年自殺の心理的原因を幻想解除と爲す。是種の自殺は年少の者には少なく青年期のものに多し。青年は大なる空想を抱くを常とするを以て、其達せられざるや、一轉して失望となり自殺となるは蓋し自然なり。此事たる青年をして社會上、高等なる地位に就かしむる爲の理想と方法とを有する教育が盛に行はれ而も該地位は容易に青年に與へられざる社會に在りて特に著しきを見る。蓋し斯る社會に在ては青年の空想は一層甚しく刺戟せられ、學校の課業は青年をして日々の食物を得る爲に勞働を爲すが如きとは全く不適當のものたらしむに依り、此等の青年が一旦學校を卒へ實社會の前に立たんとする時には必ず危急の場合に遭遇すべければなり。則ち彼等は其義務を果すの困難なるを想ひ、生活の單調にして望少なきを感じ、時としては其の鬱悶を慰せんがため、飲酒快樂に耽るに至る。此の時に當りて遺傳的若くは後天的に得たる健康上の缺點あらんか、彼等は愈憂鬱の境に陷るに至るべく、其知識のみ發達して意志の力之に伴はざるが爲めに一層絕望を强むるに至る、青年自殺者にして這般の事情を有するもの其の數極めて多し。愛情が自殺の原因となるは猶ほ後期の事に

其二、幻想解除

其三、愛情

其四、哲學的自殺

屬すと雖、之を成人以後に比すれば愛情と死との關係は青年期に於て特に著しきものあるを見る也。哲學的自殺と稱すべきものゝ青年間に行はるゝは極めて稀なりとす。

其五、其他の些細なる原因

少年自殺は又往々極めて些細なる事件に原因し、若しくは突然に起りたる盲目的衝動に依りて決行せらるゝことあり。例へば十四歳の少女は他人の叱責を受けたるために自殺し、同年の男子は罰せられたる爲に自殺し、十二歳の少女は他の少女と喧嘩の結果自殺せり。又十三歳乃至十六歳の少年にして厭世の氣風に感染したる結果、容易に自殺を行ひしもの獨逸に其實例多し。是等の少年中、雜誌にて讀みたる方法に依りて自殺せんとする摸倣作用のため、自殺を皷吹せられたるもの亦少からずと云ふ、獨逸國に於て千八百八十四年乃至九十八年間に十歳乃至十五歳の小兒自殺者九百六十三人あり、左に掲ぐる所は之が自殺の原因に關する統計にして是種の統計頗る珍奇なるものとす。

少年自殺の原因に關する統計

自殺の原因	男子自殺者數	女子自殺者數
悔恨、耻辱及良心苛責	二四〇	七五
憤怒、爭論	七二	一三
精神的疾患	五五	二一
感情激昂	一九	三
厭世	一三	三
身體の疾患	一四	四
悲哀	一一	二
罪惡	六	三
原因不明	二一七五	六二

少年自殺と都市生活

更に廣く少年自殺の原因となるべきものを觀察するに、都市生活の如きは全く平靜、穩和及自然の發達を缺如するものにして、其の家庭は貧困、虐待、飢餓、小兒勞役等悲しむべく憎むべき境遇にあらずんば、富有、奢侈、放逸の結果心身の早熟を來し、私欲を增長せしめ、共に自殺に好適なる機會を作るものとす。

少年自殺と學校生活

學校生活も亦其の過度の壓抑、心配、記憶力使用等に依りて小兒自殺に對して大なる責任あるものなり。普

漏西亞國に於て千八百八十四年より千八百八十八年迄五年間に二百八十九人の少年學生自殺者（內四十九人は女生）あり。其中二百十人は初等學校の生徒にして、內男生四十五人女生二十三人の自殺は學校の處罰を恐れたるに原因せり。又七十六人は高等學校の生徒にして、其自殺原因は、試驗及び原因不明各十五、名譽汚損及び精神異常各十一、其他の學校事故及び厭世各五、失戀四なりと云、但し學校兒童の自殺に關する統計は極めて乏しきを以て一二統計の示す所に依りて直ちに學校生活を非難するは稍早計に失すること勿論なるも、學校試驗が少年の身心に及ぼす惡影響に至ては頗る注意を要すべきものとす。イグナチエフ Dr. Ignatieff は生徒の七割九分は試驗の爲に體重を減ぜしことを實驗し、以爲へらく少年の身體に對して試驗の及ぼす所の惡影響は營養及組織、殊に腦に大害を加ふる疾病に罹れるに異らずと。又コシンツオフ Dr. Kosin. zoff 氏も多數の材料に基き、兒童の四分の三は試驗の際、體重を減じ、上級生に於ては是事の更に著るしきを發見せり

小兒自殺の一般的經路

小兒の時代は最生活を愛するの時代なり。小兒にして自殺を行ふが如きは一見極めて奇異なるもの、如き感を與ふ。されば或記者は小兒自殺を以て小兒が未だ正確に死の何たるかを知らざるに因るか、又は他界生活に關する想像の著しきに因るとなせり。思ふに迷信は往々人をして死を恐るゝの念を增さしむと雖、又死を望むに至らしむることも少からざるべし。然れども十代の初期に於ける小兒自殺者は死及自殺に關して多少の觀念を有するは普通の事實なるが如し。且つ之を小兒の日常行爲に觀るに彼等は往々自ら死狀を爲して他人が如何に自己の死を觀、又は之に對して如何樣に感ずるかを試みんとすることあり。義勇的に生命を棄つる如きは通常小兒が何等心情上深大なる原因あるにあらずして企つる所なり。又少年の模倣性は往々少年をして他の自殺者の暗示を受けて自殺するに至らしむることあり。盛榮心の滿足されざること、若くは活索又は短銃にて死せば如何なる氣持なるかを試みんとする如き一種の好奇心も亦少年自殺の原因たることあり。或統計に據れば、少年の時自殺を企てし經驗を有するものは凡そ六割を占め、又或調査に據れば、一回は十一人、一回は五十人の少年が悉く其の靑春期の初に於て自殺の念盛に起りし事ありしを自白せりと云ふ。蓋し從來專ら自

自殺に關する少年教育上の注意

我中心的なりし小兒の生活は此頃よりして次第に他人の爲に義務を行ふの生活に移らんとして自我を抑制せんとするの動機次第に起り來りしもの、更に一轉して極端に自我を滅却するの擧に出づるものならん。若し是の如きを通常の經路なりとせば、所謂小兒自殺は單に一般的傾向の偶事實に發現したるに過ぎず、必しも病的現象と見るを要せざるものとす。而して感情及意志又は知力の早熟は個人が未だ完成せざるに先つて個人完成の作用を制限する諸動機を發現せしむるものにして、爲に上述の一般傾向を強むること少からず。是等の早熟は少年教育上宜しく豫防せらるべきものとす。少年をして餘りに早くより內省に耽らしめ、又未だ十分なる克己力を有せざるに先ち早く慾情を起さしむべからず。他界を渴望するの情の如きも甚熱烈ならしむべからず。其他心配、黨派心、感覺過敏、虛榮心の如き凡べて整齊にして、調和したる多方面の發達を妨ぐべき特殊的發達は何れも防止せらるべき也。近來瑞西の或る醫師會は他人に暗示を與ふるの虞ある故を以て自殺の記事を公刊することを禁止する法律を發布せんことを建白せり。學校制度としても少年の熱烈なる希望、野心、煩悶に適度の抑制を加へんとはせずして寧ろ之を激起せんとする傾向あるものの如きは少年教育上有害なる機關にして學校其物の名稱及目的に反するの甚しきものといふべき也。

本邦の自殺の現象に就ては吳文聰氏の調査せられたるものあれば參考として左に掲ぐることとなせり。

統計集誌第三百十三號　　吳文聰述

自殺と年齡の關係

自殺は老壯少何れの級に多きやを考るに、云ふまでも無く老年に多しとす、卽ち三十一年乃至三十七年の數に從へば、五十歲以上に在ては百萬人に付男は五百五十四人二分、女は二百八十二人四分、之に亞ぐは男は四十歲乃至五十歲にして三百五十九人九分、女は二十歲乃至三十歲にして二百三十四人二分、又之に亞ぐは男は二十歲乃至三十歲にして三百九人六分、女は十六歲乃至二十歲にして二百四人七分、又之に亞ぐは男は三十歲乃至四十歲にして二百七十二人二分、女は四十歲乃至五十歲にして百七十二人六分、十一歲乃至十五歲は男女とも最少にして共に約四十四人なり、

之れより稍や多く而かも成年已上にて少きは男にて十六歳乃至二十歳にして百二十二人七分、女は三十歳乃至四十歳にして百五十三人二分なりとす、男子の十六歳乃至二十歳は尚獨立して生活の衝に當らず、且血氣充溢し而かも未だ社會の痛苦を嘗めざる青年なるを以て鬱憂悲感の境に有るもの尚ほ少きが爲なるべく、女子の三十歳乃至四十歳に少きは女子に在て最も安靜の地に立つもの多きと女子の同年級に比すれば生活の勞苦少きと、若少なる女子に比して考慮圓熟せし結果に因るなるべし。

要するに十五歳未滿の少年者と、三十歳乃至四十歳の男女と四十歳乃至五十歳の男子を除くの外は、總て年齡の加はるに從ひ自殺の歩合增加するは明瞭の事實なりとす。就中、男女とも三十歳乃至四十歳及男子の四十歳乃至五十歳は、思慮圓滿の生活上亦得意のもの多き爲め此慘狀に陷るもの少きが爲めなるべきか。

尚近年の自殺增加が何れの年齡級に多きかを尋究するに、增加度の最も疾急なるは十六歳乃至二十歳の男子にして、是れ毎百、二十八人、之に亞ぐもの四十歳乃至五十歳の女子にして毎百、十三人、比較的多からざるは十五歳未滿の男女及二十歳乃至三十歳の男女にして、其他は總て毎百、九人乃至十人の增加なり豈に驚くべきにあらずや、殊に青年男子の疾急なる增加は、世間所謂煩悶の結果なる勿らんや、四十歳乃至五十歳の女子の增加は社會の壓迫稍々此方面に現出するにあらざるか、志士仁人の深厚なる注意を希望せざるを得ず。

次に年齡別自殺者の生存者に對する割合を示すに先だちて我國年齡別人口を示し、以て余が計算の據る所を示さんとす。

上段は明治二十三年乃至三十年の自殺者に比例するの用に供し、下段は三十一年乃至三十七年の自殺者に比例するの用に供せし者とす。

年齡別	明治二十七年人口 男	明治二十七年人口 女	明治三十六年人口 男	明治三十六年人口 女
十歳未滿	四、七四七、九二七	四、六六六、二九七	五、六六六、八七一	五、四七四、四二〇
十一歳—十五歳	二、二二四、一八五	二、一七八、九〇八	二、三〇一、七二四	二、二四五、〇〇七
十六歳—二十歳	二、一三三、八六六	二、〇七九、四九三	二、一六六、八〇五	二、一一六、〇五八

二十一歳—三十歳	三、三五三、五四〇	三、二四九、四三六	四、〇九四、一七六	三、九八八、三八〇			
三十一歳—四十歳	二、七五五、七四九	二、六三二、一二三	三、〇六一、一三一	二、九六六、五三七			
四十一歳—五十歳	二、五二九、八五九	二、三五五、一七〇	二、四六五、四一九	二、三二七、四六〇			
五十歳以上	三、三八七、七六三	三、五七八、八八九	三、八八四、八〇六	四、〇五三、三五五			
計	二、一二二、八九九	二〇、六九〇、三二六	二三、六〇〇、九三一	二三、一三一、二〇七			
年齢別	二十三年乃至三十年八箇年自殺者總數		三十一年乃至三十七年七箇年自殺者總數				
	男	女	男	女			
	七二人	七六八人	七六人	六九〇人			
十六歳未滿	一、六三六	三、〇八三	一、八六一	三、〇三三			
十六歳—二十歳	七、七〇五	五、六五五	八、八七五	六、五五七			
二十歳—三十歳	六、一〇六	三、一九九	五、八三四	三、一三九			
三十歳—四十歳	六、六三一	二、八五八	六、二二一	二、八一三			
四十歳—五十歳	一三、七三一	七、三六一	一五、〇七二	八、〇一三			
五十歳以上	年齢不詳	七二	二二	四〇	一四		
計		三六、五八四	二二、九四七	三八、六二一	二四、二五九		

（備考　三十一年に男女不詳二人あるが故に月別表に符合せず）

年齢別	二十三年乃至三十年一箇年平均數		三十一年乃至三十七年一箇年平均數	
	男	女	男	女
十六歳未滿	八九・〇	九六・〇	一〇三・七	九八・五
十六歳—二十歳	二〇四・五	三八五・三	二六五・八	四三三・二
二十歳—三十歳	九六三・六	七〇六・八	一、二七三・七	九三六・七
三十歳—四十歳	七六三・二	三九九・八	八三三・四	四四八・四
四十歳—五十歳	八二七・七	三六〇・六	八八七・四	四〇一・八
五十歳以上	一、七一六・三	九二〇・二	二、一三三・二	一、一四四・七
計	四、五七三・〇	二、八六八・三	五、五一七・二	三、四六五・五

年齢別人口百萬に付自殺者比例

年齢別	二十三年乃至三十年 男	二十三年乃至三十年 女	三十一年乃至三十七年 男	三十一年乃至三十七年 女	人口毎百萬甲期より乙期の自殺増加實數 男	人口毎百萬甲期より乙期の自殺増加實數 女	自殺者増加百分率 男	自殺者増加百分率 女
十六歳未滿	四〇・三人	四四・〇人	四四・七人	四三・九人	四・五人	〇・一人	一・二歩	—
十六歳—二十歳	九五・八	一八五・三	一三三・七	二〇四・七	二六・九	一九・四	二八・〇八	一〇・四六
二十歳—三十歳	二八七・三	三一七・五	二〇九・六	二三四・三	三三・四	一六・七	七・七九	七・六七
三十歳—四十歳	二七六・九	一五二・四	二二二・三	一五三・三	四・七	〇・八	一・六九	〇・五〇
四十歳—五十歳	三三七・三	一五一・六	三五九・九	一七二・六	三一・七	二一・〇	九・九九	一三・八五
五十歳以上	五〇六・七	二五七・二	五五四・三	二八二・四	四七・五	二五・三	九・三七	九・七三
計	二六六・五	一三八・六	二三三・七	一四九・八	一七・二	一一・三	七・九四	九・〇八

右自殺者百分増加率を視るに、十六歳乃至二十歳のものゝ増加比較上最も多し、是れ何故なるか、實數に於ては四十歳乃至五十歳已上のもの甚だ多きに拘らず、割合上には十六歳乃至二十歳のもの男女とも最も急速の増加を爲せり、是れ近時所謂厭世煩悶の結果なるや如何、特に考査を要する所なるべし。

余は未だ一般自殺の原因の研究に及ばずして、獨り此年齢に就て討究するは少しく當らざるが如しと雖、甚だ重要にして特に奇異の感あるを以て、左に十六乃至二十歳の自殺者の原因別表を掲げ以て、之が搜索を試むべし、次表を視るに前期に比し後期に於て精神錯亂に於て男は三十五人七分、女は七人四分、病苦に因るもの男は八人五分、女は四人、痴情嫉妬に出づるもの男は四人、女は八人四分、其他の目にて男は五人四分、女は二人四分、不詳の目にて男は九人三分、女は三人七分、其他活計困難又は薄命を歎きて、前非を悔ひ又は慚愧に因り、將來の事を苦慮しての三科目に於ては、一般に女に在て罪の發覺を懼れ又は刑の免れ難きが爲め、男に在て戸主又は親夫等の懲戒譴責に因りの目にて少許の減少ありし外は、各自皆多少の増加を爲せり、唯だ活計の困難又は薄命を歎きて自殺するものゝ、男に在て一人六分女に在て四人七分を減じたるは、前期に於ける經濟上の壓迫後期より甚しかりしが爲めならずんばあらざるべし、要するに精神錯亂及病苦に因る自殺者の後期に至り

殊に男子に甚だ多かりしは此多大なる增加を致せし主因なるべく、其他各自共に增加せるは一つに社會の移遷に伴ふ結果なるべし、而して精神錯亂とは讀んで如字、別に註釋の道なしと雖、畢竟社會的壓迫の爲めなるは疑を容れざる所なり。

	十六歲乃至二十歲															
	男				女				前期		後期		前期		後期	
	廿三年廿一年		廿三年廿一年						一箇年平均				十箇年平均			
	三十年廿七年		三十年廿七年						男				女			
精神錯亂して	七三二	八九二	一、二二四	一、二七三	一四七	一二七	一七四	一二八	九一・五	二二七・二	一八・三	一六・七	二一・七	一五九・一	(一)	(一)
活計の困難又は薄命を歎て	一四〇	一八二	二〇六	二〇八	一七・五	二六・〇	二五・七	二九・七	六・二	六・四	二・四	二七・一	八五・一	七六・七	五・八	六・七
病苦に因り	一三七	一四三	六一四	五九六	一七・一	二一・一	一九・三	一八・五	(一)	(一)						
痴情嫉妬に因り	一六五	一三八	一五五	一三〇	二〇・六	一九・七	一八・五	二七・一								
前非を悔ひ又は慚愧に因り	一四〇	一一七	一七四	一一八	一七・五	一六・七	一六・八	一五九・一								
親族の不和に因り	七三二	八九二	一、二二四	一、二七三	九一・五	二二七・二	一六・八	一五九・一								
將來の事を苦慮して	二七	一六	五四	三五	三・三	(一) 二・四										

商業等の爲損失し又は負債の償却し難きを苦みて罪の發覺を恐れ又は刑の免がれ難きが爲め

鬱憂に因り	二〇	二二	三	五	二・三	三・〇		
夫又は子の不行狀を歎て	二五	二九	一五	八	三・一	四・一	一・八	(一) 一・一
親夫又は妻子の死去を歎きて	八	一三	一〇	二四	一・〇	一・七	二・五	三・〇
戶主又は親夫等の懲戒譴責に因り			八	一			一・〇	一・〇
離緣せられしを悲みて	二	二	二	一	二・二 (一)	一・七	四・八	六・三
私通姙娠を憂て			一三	二四			一・六	三・一
身體不具なるを歎て	三	八	六	四			七・三	八・五
婚姻を忌みて		一	二九	三六		一・一	三・六	五・一
其他	六七	七八	七四	八一	五・七	一一・一	九・二	一一・六
不詳	一一〇	一六一	一八七	一八四	一三・七	二三・七	二三・〇	二六・七

計	一、六三六	一、八六一	三、〇八三	三、〇三三	二四五・〇	六五・七	三八六・六	四三六・二

青年期に於ける浪費の習慣

前表に鑑みて大に世人の警戒となるべきは活計の困難又は薄命を歎くもの又は病苦に因るもの、身體の不具を歎くもの、如きは誠に止を得ざるが如きも、前非を悔ひ、慚愧に由り、罪の發覺を恐れ、又は刑の免れ難きが爲めの如きは從前非行の責罰なれば世人は平生其行を謹み、斯る境遇に陷らざるを勉むべく、痴情嫉妬の爲には身を誤り親族不和が高ずれば不測の事變を生ずべく、緣談に無理のことあらば之が爲めに命を棄つるものを生ずべく、各種の心配々慮度に過ぐれば多くの自殺者を出し、譴責も其度を過せば人命を失はしむるに至るべし、是等は社會に立て行動するもの、深く注意すべき所にあらずや、誠に好き教訓と云ふべきなり。

バートレイ Bartley 氏に據れば、學校時代と結婚期との中間の年齢は獨立の欲望著しく盛にして、他人の指導監督を受くるを嫌ふの時期なり。而して此年齢に在つては、特別非常なるものを除きて、普の通善良強壯なる青年は、單に其直接需要する衣食の外何事をも考慮する所なきを以て、勢、浪費の惡習に陷り、其所得悉く之を衣食に消費し、適當の指導の下に未來の獨立と安樂との基礎を設くべき重要なる青年期を徒らに經過するに至るを免れず。是種の少年は決して自己の前途に顧慮することなし。其父母の奉養の如き亦念とする所にあらず、偶止むを得ずして其扶養に任ずることあるも常に嫌惡の念を懷くを免れず、其祖父母の如きに至ては殆ど顧みる所あらざる也。甚しきは其父母か教會區の養育院に收容せられ居るをも看過して尙浪費に耽るものあり。

貧窮と犯罪

バートレイ氏はかゝる浪費の惡習を以て貧困の主要なる原因となして以爲らく、英國に於ける幾百萬の貧困者は大抵少年の時金錢に關して全然放縱不謹愼なりしにありて此に至れるものと云ひて可なりと。されは少年をして節儉の習慣を獲得せしむることは父母及教師の最も努むべき所なるべし。金錢を浪費し貧困者となりて他人の施與に衣食するは之を犯罪に比すれば一般に氣力と活力とに於て劣れるを示すと雖、其罪惡の性質上一層固定的、遺傳的の傾あるものとす。犯罪は知慮不明なるに因て生ずること多く、訓練に依りて矯正するの望ありと雖、浪費貧困に至ては全く矯正の望なく、

少年犯罪增加の原因

且つ往々之が爲に疾病に罹れるものあり。又此惡習は女子よりも男子に於て一層强固にして一家の最年少なる子息に於て之を見ること最多し。

少年犯罪の增加に關して諸家の說一ならず。コレー Corre 氏は以爲らく、少年は其本性に於て幾多の惡性を具ふるものにして現代の青年は特に此等惡質の發現を制止するの力を缺くもの也と。又ボンヂャン Bonjean 氏は以爲らく、佛國に於て少年犯罪の多きは主として從來の家族制が社會進步の影響の爲に破壞せられ、而も其の再造不十分なるに原因するものにして其責、主として兩親に在りと。又シゲール Sighele 氏は各種の道德的傳染に重きを置き、群衆の中に在りては善種よりも惡種の傳染に便なる事情あり、從て益犯罪の多く輩出するを致すと爲せり。其他小說の愛讀の如きも少年情慾の發展上强大なる勢力を有するものにして、其犯罪の增加を助成する一原因となる場合、蓋少なからざるべし。急激なる衝動性の爲に犯罪を爲すが如きは甚だ稀にして、且此種の犯罪は多くは身體に對するものなるを常とす。

近事刑

近時の刑事學の趨勢は單に刑罰を以て復讐の手段と見ずして、社會の保護を圖る方法なりと思惟するに至り、監獄の如きも昔時の如く、罪惡を傳染する場所たらしめずして、犯人の改良を圖る道德的病院たらしめんとし、又犯罪人を裁判するに當りても、犯罪其物の性質よりも犯罪人の身心の狀態に注意を拂ふに至れり。此の如くにして、少年犯罪者は改善的影響を受け易きものにして、犯罪者保護上特別の注意を要するものと思惟せらるゝに至れり。

事學の趨勢と少年犯罪

獨國及佛國に於ける少年感化に關する新設備

千八百三十三年中ウイッヘルン Wichern 氏は其母の助を得てハムブルグに近く「ラウヘハウス」(Rauhe Haus) を建設し、貧困無家の兒童を收容せり。爾後、他國に於ても之に倣ふもの多く、佛國に於てはデメッツ Demetz 氏の設立せるメットレー貧民農業教習所を初めとして、種々の類似の設備を生ぜり、此等は少年感化の方法に一期を劃せるものとす。

少年犯罪に關する獨國諸家の方案

現時獨國に於ては道德的墮落の危險ありと認められたる場合には、小兒が犯罪をなすと否とに關せず、國家が兩親に代りて之を敎育するの權利を行ふべしとの說一般に主張せらる。リイランド Ryland 氏の如きは、遺傳的惡傾向が發達する前、若は惡し

き例が他に感化を及ぼすの前に、犯罪的萠芽を除去するの方法は唯一あるのみ、即ち國家が街頭に遺棄せられたる兒童を凡て其絶對的支配の下に收むること是なり、苟も國家にして此事件に干渉せんとする以上は此方法は論理上決して缺くべからざるものとすと論ずるに至れり。又レッデルゼン Reddersen 氏は以爲らく、一切の惡兒童及び愚鈍の兒童並に特に教師の勞苦を多くするが如き兒童は其全級の精神を毒する以前に直ちに校外へ放逐せられざるべからず、是れ犯罪の減少及道德と文明との進捗を計る上に於て缺くべからざるの事なりと。氏は又以爲へらく、小兒の道德的教育は啻に兩親の主觀的、個人的權利なるに止まらずして、實に小兒に對し社會及國家に對する兩親の最高の道德的義務なり、若し兩親にして失敗せば社會及國家は之に干渉せざるべからざるなりと。アッペリウス Appelius 氏は更に進みて少年犯罪處罰に關する新法律を立案し、地方政廳をして十六才以下の兒童に就き兩親又は保護者立會の上專門家をして檢定を行はしめ、必要と認められたるものを特設の教育所に收容して之に强制的教育を加へしめんとせり。

少年犯罪者は特別の取扱を要す

凡そ少年犯罪者は之を全體として觀るときは、身體及精神に於て正常的少年よりも劣等にして、寧ろ不具者又は異常者と目すべきものに屬し、其社會的境遇も亦著しく劣等なるものなり。彼等の處分は之を如何にすべきか。モリソン Morrison 氏は以爲らく、彼等の性質は從來多く世人の理解する所とならざりしが爲に、其の裁判所に於て不當なる處分を受くること成人の場合に比して甚だ多し、社會は宜しく個々の實例に就き詳細の事情を調査し、之を裁判官の前に明にして彼等の爲に法律上の保護を爲すべき也と。米國ミシガン其他に於ては既に是目的の爲に特別の公署の設あり。英國に於ては千八百四十七年に至る迄、少年の犯罪者は最頑强なる犯罪人と同樣に嚴罰に處せられ、其刑罰の餘りに嚴格なる、往々却て裁判官をして其執行を免ずるに至らしめたる程なりき。然れども青年初期の犯罪に對して嚴罰を加ふるは、既に舊習に屬す。

條件附宣告

白耳義國に於ける條件附宣告の制の如きは少年に法律上の處分を加ふる前、一應之に警告を與へ以て往々少年をして刑徒たるに至るを免れしむるものにして、頗る吾人の意を得たるものとす。一度犯罪を爲したるものに對し、一定期間再び犯罪を爲さゞる

罰金

を條件として執行猶豫を免ずるは是れ條件附宣告にして、統計上其の犯罪豫防の効あることは直接投獄に比して遙かに大なりとす。罰金も亦多くの場合に於ては少年犯罪者に對する最良の刑罰なり、且つ錯誤ありたる場合には容易に處分を取消すことを得る點は罰金刑の特長にして、國家は又罰金に依りて收入を増加するの益あり、旁、此刑は次第に禁獄の刑に代へられんとするの傾あり。勿論兩親は罰金を納付するの責に任ぜざるべからずと雖、月賦納付等の方法に依り其負擔の痛苦を輕減するを得べし。又罰金の代りに都市に於ける工事營作の勞働に服せしむることも地方に依り、若は工業學校等に在りては頗る便宜なることあり。

笞刑

少年犯罪人に對する體罰に關しては尚之が存置を贊するの議論少からず。近世死刑其他の嚴罰は次第に廢除せらるゝの傾ありと雖、笞刑は英國、蘇國、諾威、瑞馬及數多の殖民地に於て尚刑法の一部を成せり。通常笞刑を行ふには醫師の檢査を要し、笞の大小、形狀、打擊の數を規定する法律あり、又友人及親戚を立會す等の規定あり。大英國の外は一般人の感情は笞刑の存置に反對するものゝ如しと雖、十代初期及其以下の年齢の兒童に對して或種の犯罪により之を課することは尚全く棄つべからざるの理由あるものとす。皮膚面に痛苦を與ふるは感情的にして且つ神經的なる人々の考ふるが如く、爾く慘酷なる事にあらず。犯罪人に對し若は通常の家庭に於て巧みに笞刑を用ふるは勿論、他の全く異なりたる勢力の補助を借るを要すべきも、頗る有効なるものにして決して全廢すべきものにあらざるべし。禁獄は一般に少年に對して最嚴重なる刑罰といふべし。運動の自由を奪ひ、外界との接觸を禁ずるは嚴酷も亦既に足る。而も此年齢に於ては之が爲に却て特殊の罪惡に陷るの恐あり。且つ牢獄に在ては同囚間に於ける犯罪傳染あり。其他一旦囚徒となりたるが爲に永久世人の排斥を受くるにより

禁獄

牢獄の改良と是に伴ふ弊害

て勢、同種の經歴を有する惡徒の間に交際を求むるに至り、益惡事の増長を來すべし。

近世牢獄の改良は囚徒の愉快と自由とを増加し、之をして古代の牢獄に於ける如く、永久の沈默と暗黑との間に在て愈身心改善の途なからしむるの患を脱せしめたるも、一方には其結果として懲治の効愈擧がらず、往々數犯を歴て屢牢獄と裁判所の間に往來するもの多きを致せり。モリソン氏の論ぜる如く、牢獄に於ては囚徒は其必要物一

少年犯罪の投獄には特別の設備を要す

切を給せらる、而も彼等が犯罪を行ふに至りし所以は正に此等必需品の缺乏に原因せしに外ならず、則ち必需品の缺乏なき牢獄に在りて獄則を遵奉して違はざる良囚徒も、社會に出づるに及びては終に惡市民たらざるを得ざるべし。果して然らば社會の安寧といへる點より觀るときは、牢獄の制は決して左程有効のものにあらず、特に青年犯罪者に對しては効力甚薄きものなりとす。されば責任年齢及處罰年齢は成るべく之を遲くして以て少年犯罪の增加を防ぐべきは諸大家の論既に一致する所なり。

抑も小兒に取りてはあらゆる罪過は單に禁制違反たるに外ならず。不正行爲若は禁制せられたる行爲と有罪の行爲との間の區別、及各種犯罪の差違を知るの力は後年に至りて始めて發達するのみ。加之、德性上の成熟期は知力上の成熟期に比して更に後るゝものなり。且つ夫れ兒童にして年尙ほ少なる時、監獄に投ぜられ學校に入るの期に後れたるものは他の學生の注目を惹き易く、彼等をして少年に特に盛なる摸倣性よりして往々惡例を學ぶの危險に陷らしむるの虞あり。又少年犯罪者は通常其體制薄弱營養不良なるを以て監獄に於ては特に之に注意し出獄の際能く職業の勞苦に堪ふるの

不良少年の感化に關するヨーダー教授の意見

體力と精神を有せしむるを勉めざるべからず。要するに少年犯罪者を監獄に投ずとするも種々の點に於て之が爲に特別の設備あるを要すべき也。

ヨーダー Yoder 教授は不良兒童と雖、決して改善感化するを得ざるものにあらざるを主張せり。氏は思へらく、所謂不良少年男女の感化學校に初めて收容せらるゝの時期は十五才頃を最多數とす。而して其の感化學校を去るに至れる事情は果して感化の効なかりしに由るか、若は自家の都合に依りしものか、精査するの便なきは遺憾なりと雖、兎に角、中學校より高等學校に移らんとするの時期が偶青年期の諸特徴の最强盛に發動せんとするの時期に遭遇せるを以て、種々の惡德の發生は蓋し止むを得ざるものありて存す、之を以て偏に感化の無効を尤むるを得ざるなり。一般に健全なる少年が或時期に於て半犯罪的兆候を有するは却て正常的の事なり、但周圍の事情不良なるものは此時期に於て犯罪的狀態を脫却するを得ずして終に眞の犯罪者となるに至るべく、周圍の事情宜を得たる者は成熟に近づくに隨ひ、全く犯罪的狀態より離脫するに至るものとす。不良少年は往々他の兒童を集めて自己の支配の下に皈せしめんとすの傾あ

り。是れ蓋し他人の首領たらんとする新欲望の崩生したるに依るものにして、此本能は善く之を看別し、善く之を誘導するを要すべし。又時としては學校の平凡苛細なる制度は健全强壯なる精神をして反抗せずんば止まざらしむることあり。かゝる事情の下に不良兒童として放逐せられたる者は偶其不良なるによりて自ら助けたるものと云ふべき也。且つベル Bell 氏の研究せし如く、兒童の最も能く教師の感化を受川するは其十六才の時に在りとの事實は特に此際に於て注目するを要す。彼は此時に於て自己の世界の愈到來せるを知り、男子は其男子となり、女子は其女子となりつゝあるを自覺する也。群棲動物は容易に馴養するを得、結黨本能其自身は實に他によりて感化せられんことを望むの叫聲に外ならず。此本能の正に盛なる少年豈感化せられざるの理あらんや。否此時期に於てこそ少年は實に善にも惡にも導びくがまゝに赴かんとするものなり

少年犯罪の原因

犯罪發生の原因としては、一に遺傳、出產前の惡境遇、惡家庭、幼少時の健康不良狀態及ひ亂雜汚穢にして殆ど無法律の域に近き狹巷等を擧げざるべからず。少年犯罪者の凡そ一割は放浪無家の徒にして、其兩親の離婚と不正結婚とは其子の犯罪原因を構成するに於て殆ど同等の勢力あるものとす、若し生理上不正なるものは道德上にも不正にして、生理上正なるものは道德上にも亦正なりとせば吾人は體質上の條件より して倫理上重要なる暗示を得べき也。智力が意識的發達を爲す初期に在りては本能的過程は其力と正確さとを減ずるは疑もなき事實なり。從て教育は常に到處に遺傳的及生理的傾向と相交涉するの危險を冒さゞるべからず。此等の傾向を道德化するは實に教育の最上の目的たるべし。然れども無知を除くは即ち貧困又は罪惡を減する所以なりと爲すべきにあらず。倫敦に於て貧民學校の設ありて以來、少年犯罪者は却て增加せるは事實なり。小盜、醉漢、掏摸は減少せしも、文書僞造、大盜及詐欺の如き新犯罪は倍加したりと云ふにあらずや。多數の兒童を集め之に嗾はすに同一の不熟なる知識を以てするは果して教育と稱すべきか。否、吾人は寧ろ少年犯罪は教育上の失敗の一表現なることを曰狀せざるべからざる也。今日の教育者は徒に三個の R（讀書、習字、算術を云ふ）の効力を過重して道德的性格は座して得らるべしとなせり。殊に知らず、性格とは即ち幼時に於ける本能の謂にして、少年期に於て習慣となり、青年期

學校教育は犯罪を減却する力なし

に於て理想の模型を通じて鑄冶せられて此に性格を完成するものなるを。統計に據るに十三才乃至十六才に於ては不良少年の數他の年齢に於けるよりも二倍又は三倍の多を示す。而して此時期に於て責任の念に乏しく、道德的神經衰弱に罹れるもの多きは殆んど意料の外に在り是れ果して誰の罪ぞや。今日の犯罪學者は一人として近世の學校制度に滿足するものなく、甚しきは之に對して猛烈なる攻擊を加ふるものさへある亦宜ならずや。

少年犯罪者の研究は個人的特殊的なるを要す

制度の萬能を信じ、之を以て近世に於ける犯罪增加の大勢を防止し、之が根本的掃蕩を爲さんとするが如きは決して少年犯罪の問題を解決するに足らず。少年犯罪問題研究の第一歩は極めて注意して之を觀察し、彼等少年と同棲し、彼等の心情を熟知すること必ず米國に於けるギューリック氏 Gulick ジョンソン Johnson 氏フォーアブッシュ Forbush 氏、及ヨーダー Yoder 氏等の如くにして方に多少の關鍵を得るに庶幾かるべし。蓋し少年犯罪者は普通者よりも一層複雜なる分化を爲せり。是れ罪惡は德義の如く整齊的、單調的のものならざる也。則ち少年犯罪者の研究は宜しく個人的特殊的なるべくして、一般的、概括的なるべからず。其の研究の困難亦以て知るべき也。

少年罪惡防止の方法

予の信ずる所に據れば、多數の幼年兒童は各種の血腥き物語を讀むも毫も何等の害を受くることなく、却て有益なる結果を得るもの、如し。是れ蓋しアリストール氏の所謂「カタルシス」の法に依り、精神の惡中樞を抑止し、其活動を禁ずべき高等能力を發現せしむるに因るものならん。予は之が罪惡防止の一法たるを疑はざる也。少年に對する叱責は道德的强壯劑として用ゐらるべし。但し叱責は常に明白なる判斷に本づけるものなるを要す。道德的觀念を養成するに勉め、特に正義の觀念を助長するに勉むべし。是れ一切の道德的觀念の始なれば也。次には慈惠の念、及之に伴ふ衝動として朋友に對して正義以上の事を爲し、隣人に對して快樂を與へて苦痛を與へざるの心懸は直ちに養成せらるゝを要す。眞實を語る事の習慣は特に養成に困難なりと雖、價値の大は更に之に數倍するものあり。卑怯なる虛言に對しては專心之が撲滅に勉め、眞實を語るの勇氣、結果に任ずるの勇氣は必ず養成せられざるべからず。現今學校に

て用ふる如き方法により金錢に關する觀念を與ふるは其効多かるべし。學校の課業は其內容は何等價値なきものなるにも拘らず、其形式、其規則正しきこと、及勤勉を勸むることは等は亦大に道德的感化力を有するものとす。

少年犯罪處理の方法

少年犯罪の處理の方法は一般の犯罪に於けるとは異なりたる原則に基きたるものならざるべからず。即ち少年犯罪の處置に際しては啻に社會の防衛のみを以て目的とすべきにあらずして、犯罪者本人を改善矯正するの目的も亦失はるべからざるものとす。されば此場合に於ては處罰の値は罪過の度合に準ずるやうにし、成るべく自然的の方法を用ふるを可とす。善行に對する褒賞は之に反して多少强く注目を惹くやうに行ふことを要す。學校に於ける犯罪の場合に在ては特に宣告とか、判決とかいふ忌はしき聯想を生ずる用語を避け、須らく後悔、恐怖、改心、賠償を處罰の主義と爲すべき也。更に進んで二三特種の場合を考ふるときは、青年犯罪の概念及び之が實際の處置は更に一層の根本的改造を要するものあり。偶然の事情に依りて行ひたる過失の爲、將來甚だ有望なる好個の青年をして一轉して憎むべき犯罪者の名を被らしめ、公衆をして只此の偶然に發見せられたる惡行の側のみよりして是人を判斷せしめんとするが如き、眞に悲慘の事にして、犯罪心理學の必要は則ち此に生ず。

倫理の教授及研究と犯罪的事實

終に臨みて予は今日米國諸大學に於ける倫理の教授及研究の方法を單に論辨的、歷史的、抽象的のものとなすの學風に對し、最熱心なる反對を表せんとす。見よ、吾人の目前に犯罪てふ顯著なる實物のあるあり。苟も倫理の研究に從事せんとするものは宜しく先づ此所に此出發點を求め、其研究をして罪惡と道德との熱烈なる戰線に密接せしめて、之に一層多くの血と肉とを附與するを要す。而して後に方に能く豐富なる事實の石もて鋪き詰められたる平坦堅固、砥の如き大道の上に徐々として研究の歩を進め以て行爲の哲學てふ一層高大なる階段に到達するを得べき也。斯くして發展せる倫理學は決して今日吾人の學校に於て敎へらるゝ影の如く、幻の如くなる兒戲的論辯に同じきものにあらずして、必ず之と根本的に性質を異にしたる物なるべきは予の深く信ずる所なり。

第六章　性的發達及び之に伴ふ危險と其救治法

性的機能發達の影響

性的機能の發達は青年期に於ける最顯著なる現象なり。所謂春機發動は實に青年期の端を啓くものにして、其生理上の事實は主として性的器官に於ける複雜なる變化として現はるゝに過ぎずと雖、其結果は心身兩面に亘りて廣大なる影響を及ぼし、身體及精神の動亂を來し、種々の危險と惡習とを生ずるの虞あるものなり。此事は、特に性的器官に於ける各種の發達上の障害が青年犯罪及精神的不具者に對して少らざる關係を有するを見るに於て一層明白に理解せらるべし。マロー氏の調査に據れば、犯罪者五百七人中百分の十以上は性的器官に異常あるものなり、而して通常人に於て此割合は僅に百分の二に過ぎずと云ふ。又ブルヌヴィーユ Bourneville 氏及ソリエー Sollier 氏の調査に據れば、七百二十八人の癲癇患者及白痴の少年中二百六十二人は性的器官に障害を有したりき、其百分比例は之を二九九二七〇人の兵役在籍者に就き調査したる際に得たる結果に比して遙に大なりとす。

性的器官の異常と犯罪及精神不具

性的器官の精神及身體上に於ける密接なる關係は又之を去勢の事實に徴して知ることを得。動物界に於て去勢が其身體及性質に著しき變化を及ぼすものなることは早くより動物飼養者の利用する所なりき。而して此事實が人體に於ても亦甚著しきものなることは諸研究者の一致する所にして、一般に言ふときは去勢を行ふの年齢早ければ精神及體制上に及ぼす變化愈深大なりと云。近時米國に於て精神病の治療法として去勢を行ふの可否盛に討議せられしことあり。而して大體上去勢が癲癇の發作を輕減するの事實は疑なきものゝ如し。

手淫

性的發達に關連して生ずる諸種の惡習中、其最も盛に行はれ、最重大なる惡結果を生ずるものを手淫となす。是れ實に人類のあらゆる弱點中最悲しむべきものなり。此事實は古來醫家の研究する所となりたりしも、其科學的に研究せられて廣く一般の常識に訴へらるゝに至りしはプイレー氏 Pouillet の二大著書に始まる。而して千八百九十四年ブダペストに於ける第五回萬國衛生會議に於て、教授ヘルマン、コーン Hermann Cohn 氏の讀みたる「學校は小兒の手淫に對して如何なる方法を執るべきか」と題

する論文出づるに及び、此事實に對する一般醫學界の注意は大に喚起せられ、爾後續續諸大家の之に關する研究を見るに至れり。

此習慣擴布の範圍

手淫の惡習の擴布の範圍極めて廣大なるは、コーン氏か獨逸國内の有名なる醫師二萬一千人、醫學生八千人に質問條項書を送りて其記憶と觀察とに基づける無記名回答を求めたるによりて始めて明白にせられたり。今日多數の研究者の信ずる所によれば、此惡習は實に人類の一切の惡習中最廣く行はるゝ所のものなりと云。此惡習は又人類に特有なるものにあらずして猿、犬、馬、象、七面鳥等にも往々之を見ることあり。人類中に在ても極めて幼少なる年齢の者に尙此惡習の行はるゝは眞に悲慘と云はざるべからず。是等の幼童は大抵他人の教唆若くは模倣に出づと雖も亦自發的に是を行ふに至るものあり。而して此惡習の最盛に行はるゝ時期は十二歲より十四歲迄とするは多數の研究家の一致する所なり。

習慣の行はるゝ時期

手淫の原因は種々なりと雖、精神早熟と精神を使用すること過度に多くして身體を使用すること過度に少なきことの如きは、蓋し少年をして此惡習に向はしむるの原因

として最著しきものなるべし。皮膚の疾患は又此惡習に陷るの機會を作ることあり。肺結核は性的官能の早熟と活動とを促がすの傾あるものにして、從て頗る此惡習を助長するの傾あり。其他遺傳性、怠惰、意志薄弱、痔疾、便秘、尿中に刺戟物の沈澱すること、生殖器の異常、長時日を要する病氣恢復期、等は何れも此惡習を生ずる內部的原因の主要なるものとす。又外部的原因として、春季溫暖なる氣候、衣服の襲着、美食、不消化、心的過勞、不潔、長時間の靜坐又は起立、過度に單調なる步行を繼續すること、胡座、晏起、過度の愛寵を受け贅澤を肆にする等はローレーデル Rohleder 氏其他諸家によりて詳細に研究せられたり。戀愛に關する書物、繪畫、及演劇等も亦此惡習の誘因となるものにして、コーン氏の如きは更に一步を進めて、聖書及字書中より此惡習の誘因となるべき不潔文字を除去せんことを主張するに至れり。燐、「コカイン」、阿片、「カンフル」及吸入酸素の如き藥品も此惡習を刺戟するのものと信ぜらる。飲酒の如きは勿論此惡習に對して危險なる誘因となるものとす。小兒用「ヅボン」に附けたる衣囊、羽蒲團の如き亦此惡習を誘發するものとして排斥せられ、乘馬、自轉車

も亦往々此虞あるものとせらる。

身體健康にして其境遇も亦佳良なる少年は以上諸原因の多數を拒斥し得べしと雖、羸弱にして神經質なる兒童は必ず多少微細なる是等の影響を被るべく、甚しきは其最微細なるものをも感受するを免れざるべし。殊に青年期の初に於ては苟も性に關する各種の事柄は、其關係甚薄きものに至る迄、兒童の知覺を惹くこと極めて易し。是事こそ科學も未だ認知せず、世の兩親達は偏に樂天的にして與り知らず、少年自身も未だ之を理解し始むるに至らずと雖、原來極めて感染し易き手淫の惡習に對して十分周到なる處置を爲さんとするに方りて大に注意すべきことなるべし。

手淫の身體上に及ぼす惡影響

手淫の身體上に及ぼす惡影響は其實頗る重大なるものあるにも拘らず、外面上左程に明白に認められず、從て知らず識らずの間に此惡習の增長するを致す。手淫の結果として第一に精液は多く消耗せらる。而して此精液の成分即ち（$C_9H_{14}N_2$）は睾丸、卵巣、攝護腺、胸腺、脾臓及血液中に含有せられ、身體組織の新陳代謝作用を營むに於て大なる關係あり、體質分解より生ずる不用物を排泄するに與かつて力あるものなれば之が過度に消耗せらるゝことは必ず體質上大なる惡影響を生ずべし。此他手淫の惡結果として痙攣、癲癇、動悸等より神經衰弱、癲狂等の重大なる精神及神經的疾患を惹起することは、既に諸學者の研究によりて一般に熟知せられたる事實なり。道德上に於て直接に此惡習より生ずる惡結果は虛言なり。蓋し手淫の惡行は秘密を要し、秘密は虛飾、僞善の習癖を誘起するは必然なり。斯くて又卑屈、怯懦、我欲の念は其度を加へ、博愛、慈善等の念は全く空となり、意志力、自制力亦減退するに至る。手淫者の精神に關して諸家の攻究せし所に據れば其精神は其音聲と同じく、甚だ薄弱なるを特色とす。又一度此惡習に耽けりしものは學問上社交上宗教上共に過度に激烈崇高なるものを希求し、軈て一轉して何物をも賞美せず何物にも無感覺なるの狀態となる。是れ少年に於て最怖るべき發達停止の症狀にして、實に手淫の惡結果を受けて身心共に早衰せるものなり。手淫が一種の狂疾を作成するものなりや否やに就ては諸家の說ありと雖、未だ一定せざるが如し。手淫者の子孫は其身心發達の停止又は早熟を生ずる傾向あり、甚だしきに至れば全く繁殖力を缺乏すと云。

手淫と自殺

手淫の惡習に浸染するの久しき到底之を克制する能はずと覺悟するの結果、往々自暴自棄となり、絶望となりて、死によりて此苦境を脱せんと試むるに至る青年其數少からず、シーヤリー Seerley 氏の如き此種の實例、百個を記載せり。

純潔の德は少年に示すべき最高の理想

手淫は恐くは個人的罪惡のあらゆる要素を具備せる最完全なる模型なるべし。此處に生活の高尚なる部分を犧牲として唯感覺上の快樂を恣にするの實例は見らるべく、此處に此世界に於て最重要のものと云ふべき善良なる遺傳力を破壞して顧みざる無上の私欲の實例は見らるべく、此處にあらゆる自己抑制的道德中、人生に最急要なるものに對して道德的自制を忘れる最甚しき背德不法の實例は見らるべし。抑も少年に敎示すべき最高の理想は純潔の德に在り。是れ吾人が完全なる成熟に到達する爲に如何なる高價を拂ひても必ず購はざるべからざる所のもの也。然らば則ち吾人の成熟を妨げ、發達を害すること斯の如く大なる惡習の如き、宜しく又如何なる高價を拂ひても掃蕩せざるべからざるものにあらずや。手淫の惡習は若し詳細に之を叙する時は眞に人をして人間種族に對する尊敬の念を減ぜしめ、人類の將來に關して期待する所のものを拋たしむるものあり。然りと雖、人類の生長力の最強盛に發動する時期は性的成熟の期に先だつといふの一事實は幸にして儼存せり。萬一此中間の時期にして延長する代りに短縮し、從て人間種族は只性的官能の發達にのみ是れ急にして、正常的生長の度愈減少するの傾向生ずるあらんか、是れ確に人種的退化を意味するものにして、吾人々類の發達上實に危急存亡の秋なりとす。否らざる限り、吾人は今に及びて宜しく力を盡くして此惡習を掃蕩し、性的發達を正常的ならしめ、以て人類發達上の障害を去るを勉むべき也。

生長力强盛の時期は性的成熟期に先だつ

治療法豫防法

手淫の治療に關し醫家の處方種々ありと雖、かゝる特殊の療法は左程の効を奏せざるものにして寧ろ一般的の處置を取るを可とす。即ち常に身體の運動及早起を勉め、高尚なる音樂を聽く如きは此惡癖を矯正し精神を强壯にするの効あり。之に反して精神を過勞せしめ猥褻の談話を爲す如きは何れも有害とす。牛乳、麵麭、穀物、蛋白及燐酸を多く含有する野菜及小量の肉類はマロー氏に據れば、此惡習に罹り易き時期の青年の常食として適當なるものとす。入浴及水泳も亦有益なり。股引は餘り高く吊りて

窮屈ならしむべからず、腰卷の類も寛にして且餘り厚からざるを可とす。ヅボンの衣襲は成るべく兩側に偏せしむべく、且つ其内面は深からざるを可とす。多く衣服を襲ぬるは一般に有害なり、帽子、手套、頸卷の如きは特に然り。臥床は宜しく硬なるべく、衾褥は宜しく輕かるべし。柔軟なる臥床は寢心地良きを以て早起に便ならず。睡既に覺めて後永く臥床中に横はるは惡習に陷るの危險最大なるものとす。又睡眠中は最もよく熟睡し得るやうの方法を取らざるべからず。既に臥床に入りて後容易に眠に就き難きが如きも亦惡習に陷るの危險甚大なるものとす。

教育上適當なる方策の必要

性的發達に伴ひて手淫の如き惡習生じ、其擴布範圍の廣き其害毒の大なる眞に青年教育上痛心すべき事に屬す。而して豫め之を防止するの方法として前に述べたる外教育上又適當の方法を講ぜざるべからず。從來かゝる性的事實は教育上に於ては之を說示するを避くるの傾あり。身體の衞生、道德の修養等は絶へず教師と兩親とに由りて訓誨せられ警告せらるゝと雖、青年期の深奥なる部分に伏在せる根本的惡習に至ては何等警戒の加へらるなく默々として看過せらる、此惡習の蔓延して底止する所を知らざるの勢ある亦宜ならずや。近來教育上性的事實を敎示するの可否は討論せられ、諸家頗る異論なきに非ず。然れども青年が性的事實に於て殆ど全く無知なるより生ずる結果は啻に手淫の如き惡癖に陷るの端を啓くことあるのみならず、往々青年をして身體上及精神上の恐慌を生ぜしむることある也。女子に於ける月經及男子に於ける漏精に關連せる事實の如き以て徵するに足る。

月經

月經は女子の性的成熟に達せるを示すものにして、其開始の年齢及時期は各人種により各個人によりて一定ならず。而して月經開始の事實は極めて顯著異常なるを以て多少女子を震駭せしむるの結果あるを免れず。故にヒポクラテース Hippocrates 氏以來之を以て女子に於ける神經系統發育上の一大危機と爲せり。女子にして若し豫め此事實に關し何等の敎示をも與られたることなくして初めて月經の開始に接したるものは其驚怪怖畏の情眞に憐むべきものあり。特に神經質の女子に於て甚しと爲す。此現象は其始に於ては甚だ急激に現出すれども、爾後女子の生涯に於て永久に且つ規則正しく繰返さるゝものなるにも拘らず、之に關する知識の缺乏よりして不思議にも全く

正常的又は生理的なる現象として認められざることあり。古代の國民または野蠻人の間に於て、月經が女子の男子より劣等にして男子の有する特權及地位等より除外せらるべきものたるを示すものとして考へられたるは眞に其謂なき事なり。而して女子も亦之が隱蔽を勉め、爲に偶然にも月經期に最必要なる安靜休息を爲すの好結果を生ぜしも、其他の關係に於て衞生上の危險を冒せしこと蓋し少からざるべし。抑も月經は正常的に女子の成熟を證するものなり、女子は毫も之を以て耻辱となすを須ゐず。若し人類以上の生物よりして之を觀る、月經期は實に女子の開花期にして即ち其最美なるものとして觀賞せらるべきの時期なり。女子は宜しく自重自尊の念を以て此時期を經過すべき也。

漏精

漏精の未婚青年男子に於けるは恰も月經の處女に於ける如く體制上殆ど正常的に必然のものなりとす。何等豫備的知識を有することなくして始めて此事實に接したる青年の疑惧は、往々最初月經時に於ける處女と相似たるものあり。且つ手淫の惡習は恰も此時期に於て生ずるを以て其惡結果は漏精と混同し、一層疑惧不安の念を生ぜしむることあり。青年が手淫の惡習を除去するの不可能なるに絶望し、恐るべき結果に陷ることあるは此混同に原因すること少からず。此際に於ける青年の苦悶往々名狀すべからざるものあり。

性的教育

性的衞生に關する教示の從來極めて閑却せられしは眞に一の罪惡とも云ふべき也。少年子弟の之が爲に受けたる不幸幾何ぞや。予は「ウィリヤムス、カレッチ」「ハーヴァード」「ジョンス、ホプキンス」及「クラーク」等の諸大學に於て常に性的事實に關して青年學生の爲に說示せり。而して予は之が學生等を益すること多大なりしことを信ずと雖、其實、予に取りては一の苦痛多き義務なりし也。近來性的事實教示の必要を論ずる教育家少からずと雖、其教示の方法に就ては何れも頗る當惑するの體なきに非ず、或は之を植物の開化結實の事實に關連して教示せんとし、或は何等かの全く表徵的なる方法にて教示せんとし、其說一ならず。然れども予の考ふる所に據れば、斯種の事實は全く個人的に教示せらるべきものにして、例へば子は父より、娘は母より、教示を受くべきものなるべし。而して其際には周到なる用意の下に雅正なる言語を用

るて野卑露骨に陥らざるやうの方法を取るべきものとす。是の如くして性的教示を爲すは殆ど兩親の特別なる義務なるべしと信ず。

第七章　感官及聲音の變化

普通の發達的心理學

前章に於て身體の發達及び青年期に伴隨せる精神上及び道德上の病的狀態を論じたれば、以下進んで普通の發達的心理學に移り、感覺より始めて感情、意志及び知力に及ぶべし。而して後章に採用せる材料は比較的新らしくて困難に、從うて一層不完全なるものにして、蒐集せられたる事實は夥多なるに係らず、吾人の知れる範圍にては是等を統一し、總括して、是れより科學的又は實際的推論を演繹せるものを見ず。然れども多數の研究を綜合して考ふれば明瞭なる概念を得ざるにはあらず。思ふに此種の研究は必要にして趣味多く、近き將來に於て吾人の智識に多大なる貢献を爲さんこと疑を容れざるなり。

青年期に特有なる感官の變化

青年期に於て各感官は其組織又は作用に於て、此時期に特有なる變化を受くるものにして趣味の變化すると共に注意の對象と爲るべきものも亦變化す。此變化に就て、精神的變化に歸因せるものと、感官及是と直接に關係せる中樞の變化によりて生ずる

ものとを明白に區別せんことは甚難し。されど後者が其重なる部分を占むるは信ずべきが如し。就中最肝要にして且廣大なる變化の一は從來、多くの感官的刺戟が反射運動を惹起する傾向を有せしに反し、此時期に於ては反射運動は遲滯するか、或は其組織一層整然たるに至る傾向を有す。是によりて聯想則ち中樞の作用著るしく增加せるを想見するに足る。從來は求心的作用は直ちに遠心的則ち運動的通路に出でしも、今は大腦の作用是に代りて思考、熟慮及び反省の作用を其中間に挿むに至る。此事は又感官に反射して觀察を善良ならしめ、各感官も獨立の價値を有するに至り、感覺は從前に比して容觀視せらるゝこと多く、其快、不快の影響も一層强大に感ぜらるゝに至る。而して感官の有機感覺及感情を基礎として相聯合する事も從前に比して增加す。

第一觸覺皮膚の辨別力

一、觸覺。ウエーバー Weber 氏によれば「コンパス」の尖端の距離によりて測らるゝ觸覺の鋭敏の程度は其發達と共に減少す。例へば十二歳の兒童にては唇の紅色の部は三、九粍。掌、頰にては六、八粍。上膊及腿の中央部にては三一、六粍なれども成人にては順次四、五。一一、三。六七、七。に增加するが如し。ウエーバー氏は又軀幹及四肢の縱に發達するにつれて、感覺圈（譯者云、感覺圈とはコンパスの兩尖端を皮膚に接觸したる場合に、是を一箇の點として感ずる皮膚の範圍を云ふ）は横の長さより縱の長さの增加大なるがため、漸次縱長くなることを證明せり。此事實は尙其他の學者の研究によりても證明せらる。よりて思ふに皮膚の距離の辨別は觸覺器官の間隙增加するため、發達と共に却て減少するものなり。

痛覺

カルマン Carman 氏は苦痛に對する感覺は男女とも十二歳を除く外は年齢の增加と共に減少せる事、左顳顬部は右顳顬部よりも感覺鋭敏となる事、少女は一般に男子よりも感覺鋭敏なることを發見せり。ギルバート Gilbert 氏は亦壓に對する苦痛の感覺は十六歳より十九歳に至る迄の間に漸次減少し、一般に男兒は女兒よりも感覺力の乏しきことを發見せり。然れどもかゝる結果は苦痛に對する感覺力乏しきが爲めか、或は苦痛に堪ふる力の增加せるがためなるかは是等の研究によりて決定すること能はず。

觸覺の重要なる所以

皮膚及神經系統は共に外胚葉より發達せるものにして、凡ての高等感覺は感官の母とも云ふべき觸覺の徐々に分化し、特殊化したるものなり。此に於て哲學者が往々「カントに還れ」「プラトーに還れ」と叫ぶが如く、心理學者も亦感官知覺の終極的、

殊に發生的問題を論ずる場合には「觸覺に還れ」を以て其教訓と爲さざるべからず。智識論が外界の眞相を充分吾人に示すこと能はざるは、實在は觸覺に根據を有せるものにして、高等感官の發達は却て吾人をして實在より遙かに遠ざからしめしによるなり。心理學中起源の問題に興味を有するものに取りては、觸覺の研究ばかり趣味多く希望多き部門はあらず。著者の學生の一人は蘇國の常識哲學者殊に、レイド、Reid スチュワート Stuart 及びブラウン Brown 等によりて代表せらるゝ學派の研究は畢竟するに、實在の基礎を觸覺に求めんとする意識的努力なりと解釋し、極めて巧妙なる研究を爲せり。

皮膚の異常感覺

青年期には皮膚に異常の感覺を生ずること多し。即ち屢疱瘡の類を生じ、其瘡痕生ずる頃は頻りに是を除かんとし、幾時間も皮膚を搔き、又は抓む習慣を生ずることあり。時としては故意に針を以て皮膚を刺し、或は擦り削りて皮膚を粗糙にし、以て是を除去する愉快を得んとするものあり。或る少年は蠟燭より滴り落つる脂を手に受けたる後、是を取り去るを以て一種の快樂と爲せしものあり。逆爪、齲、水胞、瘡痕の類は非常に堪へ難き苦痛を忍んで是を除去せんとす。或は又自己の頭、眉毛、手等より毛髮を拔き去るものあり。其原因に就ては盲目者が眼に於て光線に對する一種の飢渴を感ずるが如く、特殊の皮膚の感覺を要求せるによれるか、或は皮膚が幾分無感覺と成り刺戟の相當量を要求するがためか、或は又戀人同志が握手、撫擦等に於て感ずるが如き一種の軟滑なる感覺を得んとする欲望より生ずるかは、決定すること能はず。思ふに是等の中、孰れも多少與りて其要素を爲せるが如し。此問題に就ての研究は、進化論の立脚地よりは、肝要且つ趣味多きものにして、彼の極めて少量の觸覺が却て痙攣的の反動を惹起すとの說と密接に關係せるなり。這種の擽はゆき感覺が增加することも亦此時期の特徵にして、殊に疲勞せる際、又は禁止力缺乏せる時、其反動一層强く、かの精神物理的法則は殆んど轉例せられたる觀を生ずることあり。何んとなれば觸接微弱なるに從つて、却つて是がために生ずる感覺は一層激烈なればなり。

擽はゆき感覺

脂肪の分泌發汗等の

此時期に於て皮膚の脂肪の分泌、顯著となり表面光滑となるも事實なり。汗の分泌も亦夥多となるが如し。此期の半頃には寒熱に對する一般の感覺力增加す。是れが爲

變化

め病症の素因を作り、又は身體の虚弱を來すことあり。婦人が握手によりて咄嗟の間に一種の好惡を感ずるも此時期に在り。吾人に送られたる回答書によれば、此時期に於て握手を嫌惡し、殆ど是を爲し能はざるものあり。此種の嫌惡の極まる所、遂に一種の精神病を生ずることあり。ある貴女は余に書を送りて曰く「招待會にて敷多の人々と握手するを要する場合には、時々殆んど戰慄するが如き惡感を覺ゆる人に遭遇することあり。其手は別に濕潤、若くは寒冷なる手にはあらず。故に此惡感は一種の名狀し難き感なり。反對に又或る人の手は一種の快感を與ふ。此快感は人物に對する好惡とは何等關係あることなし。余は常に謂へらく、余は如何に人を愛せしとも、其人の手に觸るゝを好まざりせば決して結婚することなかるべし云々」と。

二味覺

營養の肉體的及精神的生活に對する關係

二、味覺。飢渴は生活意志の最初の發現にして戀愛と共に生物界を支配するものなり。吾人が身體に就て知る所愈多ければ、單に其發達のみならず、一切の官能は營養を基礎とせることを一層明白に知了すべし。又一切の器官は複雜なる化學的收入と支出との關係より云へば、ある意味に於て一種の消化機關なること、肉體は勢力の保存、分配及傳達の機關なること、並に人間は物質的に考察すれば、畢竟其食物及其食物に對する作用によりて或は寧、其消化する所のものによりて規定せらるゝことをも悟るべし。食物は慾望の第一の目的にして、動物の鰭、脚、及羽翼、尾等は食物を得んがため、若しくは他の動物の食餌とならざらんがために發達したるものなり。下等動物の世界は實に其食物にして、彼等は食物の供給に從うて蟄伏し、住居し若しくは移住す。食物は世界に於ける生存競爭の主なる目的にして、「他物を食餌とするか、然らざれば其の食餌となる」と云へる法則は實に命令的性質を帶ぶるものなり。人體勢力の約三分の二は消化作用の爲めに費さる。人は火を利用し、料理を爲すに至りて消化の經濟行なはれ、勢力の一層高等なる使用を爲すに至りしのみならず、庖厨、家庭及食事の時刻をも發展せしむるに至れり。高等なる同化作用の立脚地よりすれば、各細胞並びに組織は其特別なる飢渴を有す。吾人の飢渴と稱するものは凡ての組織及細胞の特別なる飢渴の總計に外ならず。血液の含有せる食物の供給に就ては各種器官の間に生存競爭行なはるゝものにして、感覺並びに思考も或る意味に於ては營養の作用にして、快不快も

亦饜飽及び飢渴と密に關係す。分解作用の結果乃ち老排物除去せらるゝ時は一の器官の食物は他の器官に對して有毒物と爲り、是等の副產物堆積するがため、顯微鏡的生物の感染を受け易し。或る意味にて病症は細胞の飢渴の累進によるものなりと云ふべし。故に中年及中年以後の病氣は概ね避け得べき食事の失策に起因するものにして、營養完全なれば身體若しくは精神、或は兩者の發達を促し、愉快の範圍も亦擴張せらる。是に反して營養の不完全は發達を阻止す。されば食物の權衡宜しきを得るは食慾の範圍擴大せる青年期に於て必要にして、質に於て、量に於て、惡しき食物の習慣は畢竟學生的生活を破壞し、不節制の重なる原因の一を形成するものなり。かくして身體の各部分は絕えず化學的有機的變化を受くるものにして、勞作を爲せる成人の一日に攝取する食物及飲料の六磅中、乳糜管によりて血液中に入るものゝ中より各器官は所要の營養を攝取するなり。

青年期の營養に關する注意

青年期に於ける食慾

青年期の始めには所要の食物の量に著しき變化あり。此量は發達の速力又は運動と比例して變化するものにあらず。されば多くの事實によりて推察すれば、身體が恒久的の發達を始むる前、二三ヶ月間、破壞作用は急激なる變化を受くるが如き秘密の原因又は作用存在せるものゝ如し。一般に食物に對する關係に變化を生じ、食慾は屢々不規則にして變化し易く、新なる平衡と變化とを求むるに至り、一定せる食物間の關係も亦殆んど變化す。時としては味の濃厚なるを喜び、或は非常に熱きものを好み、又茶、咖啡、葡萄酒、麥酒等の刺戟性の飲料を好み、食事の時も亦屢〻甚不規則となる傾向あり。

の變化し易きこと

食物の質及量の變化

微細の點に就ては多少の相違あれども、大要、身體に入る固形物及ひ水の分量は九歲より成人に達する迄非常に增加し殆んど其二倍となる。されど其體量一瓩に對する割合は絕えず減少するものにして、固形物は一四、四より九、一に、水は六〇より四四、八に減ず。他の最近の事實によれば類似蛋白質及含水炭素は比較的分量に於て餘り變化なけれども脂肪の分量は多少減少し、食物の成分中砂糖の量增加す。カメラー Camerer 氏は十一歲より八歲に至る間の食物の質及量の變化に關して苦心の結果、左の如き表を作れり。

	少女	男兒
年齡	一一—一四	一五—一八
平均體量（瓩）	三一、九〇	五二、八
平均總量（瓩）	一、七二三	二、三七八
蛋白質	、〇六八	、一〇二
脂肪	、〇四四	、八三
含水炭素	、二七〇	、五〇三
水	一、五二三	一、八五〇

	一一—一四	一五—一八
平均體量（瓩）	、三四	五九、四
平均總量（瓩）	一、六一二	二、三一四
蛋白質	、〇六〇	、一〇二
脂肪	、〇三五	、七三
含水炭素	、二一九	、二八七
水	一、二七三	一、八一〇

	一一—一四	一五—一六	一七—一八
平均體量（瓩）	、四一	五二、八	五九、四
平均總量（瓩）	一、九〇九	二、三一四	二、三七八
蛋白質	、〇八六	、一〇二	、一
脂肪	、〇三四	、七三	、八三
含水炭素	、二六二	、二八七	、五〇三
水	一、五一〇	一、八一〇	一、八五〇

味覺の變化

味覺は化學的感官にして、一生涯の間發達進步するものゝ如く、時としては老年に至り、非常に感覺鋭敏となる事あり。元來味覺は食道の門衛にして本來食物の搜索者たる鼻及眼を含める顏面、並びに食物の搗碎者たる頤は其附屬物として發達したるものなり。味は實驗的方法によりて研究を爲すこと香よりも難し。青年期に於て味覺の範圍、辨別力、識域の高下、反動時間等の點に於て如何なる變化を受くるかは明瞭ならず。されど質問書に對する回答によりて考ふるに、次の如き變化生ずるものゝ如し。第一、屢此時代に特有なる食慾の變化あり。例へば牛乳の如きは以前には非常に嗜みしも、此際不快を感ずるに至り、固形の食物に對する要求增加するが如し。又頤骨强固となり、頤突出し、咀嚼筋も發達し、顏面の形容一般に變化す。是と關聯して咀嚼のため顎の一層强大なる作用を要する堅き食物を取らんとする慾望生ず。又護謨を食する習慣も屢此時期に特有なり。回答書を寄せたる人の殆んど凡ては此時代に於て食物の嗜好に變動生ずる事を述べたり。多數の人は以前よりも一層植物性のものを好み、若くは好まざるに至る。動物性のものも亦同し。甘味に對する嗜好も、前よりも或は減じ、或は增加す。稀薄なる酸類に對する嗜好は一般に增加し、曹達類、「アルカリ」類に於て殊に然るが如し。苦き味を好むことも亦著るしく增加す。此時代に最、著しき傾向の一は心理的の動機より食慾を制御する點に在り、則ち最初不快を覺えし新嗜好が、社會一般の風習を摸倣するか、又は衞生的と考ふるがため、漸次習慣によりて養はれ、

食物に對する嗜好の變化

食物の嗜好に關する注意

却て愉快を生ずるに至る場合多し。

以上の事實は此時期に於て食物の習慣に就て特別なる注意を要することを證明せるものなり。凡て異常の嗜好、食物に對する嫌惡の如きは可成、是を制止し、食物の權衡を保ち、其範圍を廣くする樣爲さゞるべからず。加之、茶、珈琲其他刺戟性の食物、菓子、果物等を嗜むが如きも是を抑制し、是に代ふるに平淡にして健康的の滋養物を以てせざるべからず。然らざれば勢力の成熟を妨害すべし。

三嗅覺

三　嗅覺。成人に於ても嗅覺は充分發達せず。故に其一々の種類に對する名稱なし。此感覺は種族發達史上、最早く性と關聯するに至りしものにして、又、恐らく一般の感覺性より第一に分化せしものにして、かゝる狀態は今日に於ても腦髓皮質の主として嗅官的なる爬蟲類、及水陸兩棲類に於て見ることを得べし。小兒に於ては嗅官は最早く發達せる感官の一にしてスーリー Soury 氏の如きは思考は這裏に始まると云へり。

嗅覺と生殖作用

人間にては嗅覺本來の職分則ち、食物を求め敵を避くるに當りて助力を爲す働は殆んど皆無なりと雖、生殖作用とは甚密接なる關係を有す。アルサウス Althaus 氏は久しき以前に嗅官の第一の職分は生殖作用を補助するに在りとなし、例證として多くの動物が遠距離にある雌を嗅付くる事實を擧げたり。シッフ Schiff 氏は犬の嗅覺中樞を除去したるに、生長の後、雌雄を區別する事能はざるに至れるを發見せり。身體の香、殊に其一局部の香は屢甚强力なる催淫劑となるものにして、エーゲル Jaeger 氏の如きは是を以て精神の本質、此處に存在すと云へり。マンテガツァー Mantegazza 氏はある貴女の、花の香を嗅ぐに當りて一種の罪惡を犯せりと思惟する程に特別の愉快を感じたることを記せり。フェレー Feré 氏の言によれば、ある青年は色情興奮せる際、必ず噴嚏せりと。多數の事實は健康の時にも病氣の時にも鼻と生殖器との間には密接なる關係存することを證せり。マーロー Marro 氏は、嗅覺は春機發動期の始、婦人に於て最も能く發達せる事を發見せり。古き諺に妙齡の男女鼻より出血する時は戀愛に陷れるなりとあり。鼻腔より出血する事は春機發動期並に青年期に普通なる事にして怪しむに足らず。兩者の關係の密接なるは月經時の際、鼻腔內に充血を生じ、鼻の呼吸を妨げ、頭痛を生ずるによりても知らるべし。噴嚏は時として色情の興奮を伴ふも。

年齢と嗅覺の發達

のにして、鼻加答兒及鼻潰瘍に於て殊に然り。月經中止の際には屢、鼻の煩衝を生ずることあり。月經痛は屢「コカイン」を鼻の中隔上に存する生殖點、或は勃起組織に注射することによりて除去し得ることあり。此關係は又幼き動物の去勢が此組織の發達を害するによりても知らるべし。

各年齢に於ける嗅覺の發達に就ては充分精緻なる研究なし。但マーロー氏がツワルデマーカー Zwardemaker 氏の嗅覺計を用ひて同一の面積と强さとを有する發香體を嗅ぎ得る最大の距離を測りたるものは稍、適當なる實驗にして、其結果左の如し。距離の單位は孰れも粍なり。

刺戟の種類		女子		男子	
		十四歲以下 十九回の實驗	十四—十八歲 十五回の實驗	十八歲以上 十三回の實驗	十四歲以下 十回の實驗	十四—十八歲 十五回の實驗	十八歲以上 十五回の實驗	十四歲以下 十回の實驗	十四—十八歲 十五回の實驗	十八歲以上 五歲の實驗
甘草の糖	右	一六、二九	九、五〇	一七、六〇	一二、六〇	一五、五五	八、四〇	一五、〇五	一一、七三	一四、八〇	一一、六〇	一五、四〇	八、二〇
	左												
彈性護謨	右	二九、二九	一八、五三	二二、四四	二四、九六	二八、二二	一九、二〇						
	左	二六、八一	一九、九三	一七、一六	二〇、八三	二七、〇	一七、八〇						
ゾニヲ	右	一一、三一	七、七〇	一三、四一	一四、七九	一三、〇五	八、二五						
	左	一〇、九二	七、四六	一一、三三	一五、〇	一三、一八	八、二五						
麝香	右	四、二九	六、一三	四、〇七	七、〇	五、八三	七、五〇						
	左	四、一五	五、四八	三、三〇	五、八五	四、八〇	七、〇						

マーロー氏研究結果による推論

氏の用ひたる香氣ある物質は其數僅少にして、未だ充分廣き範圍の研究にはあらざれども、其結果によりて得たる推論は略、是を首肯せざるべからず。即ち婦人は男子に比較し一般に嗅覺銳敏にして、殊に春機發動期の際に然りとす。而してこは麝香に就て最も然るが如し。男子は麝香を除くの外、十四歲より十八歲に至る間、凡ての物質に就ては其前後よりも比較的銳敏なるが如し。

回答書によりて推測する處によれば、吾人は下の如き結果に就ては確實なりと信じ

青年期の嗅覺

芳香に對する感覺

得べきか如し。第一。花卉の芳香は青年期の始め頃、其以前に比較して一層注意を惹き一層多くの愉快を吾人に與ふるが如し。則ち一般に芳香は青年期以後に於て、殊に妙齡の女子に取りては非常なる愉快を供給するものなり。第二。多くの回答は一般に植物の香氣又は薫香に對する趣味の此時期に於て、特に著るしき事を記るせり。此時少女は毛髮、呼吸、衣服、紙、石鹼等に就て特に其香氣を愛するものにして、且つ嗅覺の鋭鈍、香氣に對する好惡の人々によりて異なること此時を最も甚しとす。而して嗅覺は聯想を喚起する力强く、しかも其聯想は奥底深く副意識中に潜在せるなり。薫香の宗教的情操を暗示し、花香の日當りよき草原の心像を惹起せしめ、假漆の葬式を、船の香の航海又は船暈を聯想せしむるが如きは、屢、起り來る所にして、然かも勢强く情操を變化せしめ、暗示に感ずる力を高むるものなり、第三。身體の臭氣は此期に於て特に顯著なるに至る。蓋新陳代謝の作用速にして發汗も亦饒多なるを以てなり。此際其臭氣は人々によりて各其質を異にして、呼吸の香を感ずること又鋭敏なり。病氣のため身體に一種の臭氣を帶び、又は汗臭きが如きは社交上大なる影響を有す。單に

嗅覺と聯想

身體の臭氣

實際上のみならず、空想上の香氣も亦堪へ難き感覺を惹起せしむ。空氣の流通不良なるがため、發生せる臭氣を特に感ずる人少なからず。實に此個人的の臭氣は意識的又は無意識的に、他人に對する好惡を定むるものにして、此臭氣は性的臭味及味覺とを連結せるもの、並に酒又は煙草の香氣も算入せらるべきものなり。

嗅覺鋭敏なる時期

幼稚なる兒童は香氣に對しては比較的感覺力薄弱なれども、青年期に至り非常に其力を增加するものにして、殆んど吾人をして驚嘆せしむるに足る事實あり。ジュリア・ブレース Julia Brace と云へる人が盲人養育院に於て多數人の洗濯したる着衣を一々區別したるが如きも此時期なり。ヒステリー患者の臭氣によりて人又は物を辨別して誤らざるが如きも多くは此時期にして、惡臭の殆んど痙攣せしめん許りに堪へがたき强さを有するも此時期に屬するものなり。

赤面

赤面も亦青年期に於て、著しく增加するものにして、皮膚と精神との間に存する密接なる關係を暗示するものなり。或人は是を以て殊に女子に顯著なる古代の性的恐怖の殘存せるものと解せり。思ふに、赤面は過去に於ては身體の大部分に亘りしものな

るやも知るべからず。而して其方法は必ずしも一樣ならず、或は其始まる範圍の廣きことあり、狹きことあり、或は種々なる部分に起りて漸次上下、周圍に傳播することあり。時としては其强度甚大にして戰慄、壓迫、眩暈、精神混亂等を伴ふことあり。皮膚は是によりて新らしき意味にて精神の器官となり、內部の狀態を反映す。皮膚は又是によりて屢、詩歌文學の讃美せる所にして、人工の能く企及し得ざる一種の美觀を帶ぶるに至るなり。反對に皮膚殊に顏面の蒼白と爲るも青年期に起るものなり。是によりて見れば皮膚の表面時々充血し、寒冷を感じ、若くは濕冷を覺ゆるは青年期に特有なる徵候なるが如し。

四聽覺

四　聽覺。耳は情操と密接に關係せるものにして、俗言に、普通の言語は知力の言語にして、音樂は感情の言語なりと云へるは眞理也。幼稚なる兒童は成人よりも高き音調を聽き得るものにして、又青年期に於ては言語の發達、さ迄急速ならずして簡單なる語に異常なる强調を附することあり。隱語又は鄙言の特性の一は簡單なる語により て深長なる意義を顯はすにあり、從つて言辭往々野鄙に傾くこと多く、言語の抑揚屈曲、音色等に對しても特に注意するに至るは此時期の特色とす。

自然及音樂に於ける音響に對する新嗜好

情緒の大部分は此時期に發生すと云ふことを得べし。而して凡ての情緒は此際其强度を加へ、一層廣大に、一層複雜に、且つ一層深くなりゆくなり。音色を味ふに至るも此時なり。又音の抑揚、發音の正確を加ふるも此時なり。音聲の質によりて友情の影響せらるゝも此時なり。感情的の少女が音聲のみを聞きて見ず知らずの人を戀ふるに至るといふ說話も、此時期の事と考ふれば必らずしも有り得べからざる事にはあらず。レイク Reik 氏は樂音の最高音を聞き得る力は青年期の始めに最大にして、年と共に漸次小となると云へり。聽覺及視覺の此時期に於て一時、非常に鋭敏なる事ありと考ふるは多少の理由存するなり。氏は又、人の外耳は二十歲頃迄、若しくは其少し後迄徐々に其長と幅とを增加するものにして、其發達最速かなるは幼時にして、十四歲以後は年々の增加甚僅少なり。左右兩耳に大小ある場合には右耳の方、大なるを普通とすと云へり。自然に於ける音響も亦、從前よりは深く人の胸奧に響き、小川の流るゝ音、草木の戰き、鳥の歌ふ聲、嵐の響等一層人心に近接し、一層人間的の性質を

帶ぶるに至り、何等か一種の言語を傳ふるが如く感ぜらる。且つ聽覺的意識の範圍も亦擴張せられ、音調、雜音、殊に言語の連續が統一せられ、一團となりて把捉せらるるに至る。是れ聯想の爲めに然るにあらず、又音響の心像長く心に殘留するがためにもあらず、多くの要素を集めて一團となす統一作用强大となりしが爲なり。簡單なる音律、押韻の如きは勿論以前に比して喜ばるると雖、今は一種華麗なる感情的散文却て全體として音樂的に感ぜられ、長き複雜なる詩歌も亦玩味せられ、音樂に對して趣味を覺ゆるに至り、屢不諧音に對し非常なる苦痛を感ずる事あり。

音樂に對する嗜好

ランカスター Lancaster 氏は五百五十六人の少年に就て四百六十四人は音樂に對し大なる趣味を有し、時には殆んど熱情に近き興味を發するものあり、されどかゝる熱情は忽にして消失することを發見せり。音樂に對する嗜好の曲線は十五歲の時其頂點に達し、十六歲以後は速かに下降するものなり。多くの場合に於て一年或は二年間は殆んど身を音樂に委ね、間もなく是を放棄するなり。或者は自己を以て非常なる音樂家と信じ、一時是に熱注すれども其天才にあらざる事を知ると共に其熱心も亦減少す。

音樂は他の藝術と比較すれば、純粹なる感覺と關係せる事一層密接なり。音樂は詩歌の如く必然的並びに、直接的に心像を惹起することなく、繪畫彫刻の如く形式に於ける愉快を與ふるものにあらず。其起源は舞蹈と密接なる關係を有せるなり。シアース Sears 氏が調査したる處によれば、音樂に對する趣味の增加したりと稱せらるゝ三百五十六人に就て少女の平均年齡は十二歲、男子のは十三歲なり。而して舞蹈に對する特別の趣味は大抵十三歲より十四歲の頃にして、男子は女子よりも少しく遲し。時としては餘り音樂を好まざりしものが急に激烈なる嗜好を生じ、青年期中暫時の間一身を是に委ぬる事あり。かゝる熱注はさしたる天才なきものにても數年間繼續することあり。如何なる天才も音樂上の天才の如く早熟なるはあらざるべし。而して眞に其才能を有する場合には青年期の始めに於ける發達は實に驚嘆すべきものあり。普通、少年に對し、神を慕ひ、自然を愛し、故國を思ふの情を養ひ、彼等の感情性を陶冶するものは音樂を措て別に存せざるが故に、此時期に於て其教育を怠り、若くは誤るが如きは教育の一大慘事と云ふべし。

五聲音

動物に於ける音響と性慾

五　聲音。

聲音は聾啞の事實が吾人に示すが如く、聽官の保護の下に發達し來りしものなり。昆虫世界に於ける最初の音響は性慾的なるが如し。其音響は雄性のみの發する所にして、しかも成熟期に於てのみ起るの事實是を證す。「キーキー」然たる鋭き音は種々の方法によりて發せらるゝものなれども、大抵は翼、腿、又は脚を交互に摩擦するがために、鋸齒狀又は櫛狀の邊緣相觸れて生ずるものなり。蟬の或種類は其音聲一里の距離に聞え、希臘人又は支那人の如きは其聲を聞かんがため是を籠中に養へり。他の昆虫は雌を呼ぶの目的を以て腹部を共鳴體とし、其呼吸孔より空氣を壓出し、以て音聲に近き音を發するものあり。かゝる動物にては其身體の半以上は樂器たるなり。是等の樂器の調子は蜂の場合の如く、感情に激せらるゝときは變化す。魚類のあるものは數尋の距離に聞え得べき音聲を發するとあり。雄蛙の春期に閣々たる鳴聲を發するは人の知る所にして、大抵の動物の鳴聲は普通戀愛の叫聲なり。鳥の善く歌ふものは普通美なる羽毛を有せず、其聲音を以て雌を誘引するなり。鳥の鳴くは繁殖期に限らざるも、此時期に於て其鳴聲の變化を見るは又屢起る事實なり。ある動物の喉頭は色情の起れる時擴大し、他の動物は繁殖期の外は何等の音をも發せず。動物界たると人間界たるとを問はず、音響は戀愛に對し有力なる働きを爲せるものにして、吾人はダーウヰン Darwin 氏の唱ふるが如く、音樂は雌雄陶汰に其起原を有し、言語は寧、是より派生したるものと考ふるか、或は又ワイスマン Weismann 氏の如く、音樂の感覺は雌雄生活とは何等の關係なきものにして、單に聽覺器官の補足的產物に過ぎずと考ふるかは、別問題として此處に是を論ぜざるべきも、音色の、性慾の情を惹起し、若くは抑止する力を有するものにして、戀愛と音樂との間に密接なる關係の存することは是を承認せざるべからず。

性の區別と音聲

言語の起源及動物に於ける聲音に關する近時の研究によれば、雌雄の兩性の區別が音聲の上に從來承認せらるゝよりも、遙かに肝要なる作用を爲しつゝある事を信ぜざるべからず。去勢又は生殖力の障礙の爲めに聲音の變化する事、發情期及老年に伴ふ音聲の變化、繁殖期に於ける動物の叫鳴の盛なる事等は假令聲音が雌雄間の誘惑として生じ來りし事を充分證明するに足らざれども、性慾の問題が其發達に巨大なる影響

を有することを暗示せるものなり。月經の際、歌妓の音聲は平時の如く美なることを得ず、平板に失し、殊に月經困難の際は屢鋭し。春機發動期前は男女の咽喉はさしたる差異なけれども此時期に至り喉口急に擴大し、男子にては殆んど二倍となり、女子にては五より七の割合に增大す。されど其横徑は男女共に格別の差異なし。

春機發動期と音聲の變化

春機發動期に於ける喉頭の解剖は甚複雜なれども、其變化は解し難からず。乃ち喉頭の骨骼前方に突出し、結喉其隆起を加ふ。此結喉は聲帶の前方が甲狀軟骨に入れる所なり。女子の喉頭にも同一の變化生ずれ共、さ程著るしからず、且又男子の如く急激ならず。此變化の第一の徵候は喉頭の僅かに充血する事にして是れ聲の嗄るゝ所以なり。されどこは數日ならずして消失し、吾聲の稍低調となれるを認むべし。屢聲帶及甲狀軟骨の發達を伴はざるがため、反對に小兒の如く極めて甲張りたる聲となるとあり。或人は音の調子は生殖器の發達と相伴ふものにして、音調低下するに從ひ、吾人は人としての成熟完成すと云へども、こは餘りに言過ぎたる說なり。デラウネー Delauney 氏によれば、發情期前、宦官となりしものゝ聲は、常に「テノル」と「ソプラノ」との間に位せり。是れ喉頭發達せずして小兒の儘なるに由るなり。卵巢切開の聲音に及ぼす影響は未だ明かならず。されど其結果は音調に變化を及ぼす事なくして稍男聲に接近せしむるものゝ如し。マシニー Masini 氏は娼妓の聲は尙一層男性的なることを證せり。

男女年齡による音聲の變化

年齡による聲音の變化に就ての研究はパウルゼン Paulsen 氏の研究を最とすべし。氏はキール學校にて各學級の生徒各二百五十人即ち六歲以上十五歲以下の二千六百八十五人の男兒と、六歲以上十四歲迄の女兒二千二百五十九人に就て調査したるが、其五十%は十二歲の時、七十%は十四歲の時、八十%は十五歲の時、震聲を爲し始むることを發見せり。而して變化の際には咽喉は膨脹すれども聲帶には變化なきを認めたり。聲音の範圍に就ては個人によりて非常に差異あり、女兒十歲の時五、六%は僅かに一「オクテーブ」又は夫より以下を歌ふに過ぎず。八五、六%は一乃至二「オクテーブ」八、八%は二「オクテーブ」以上なり。然るに男兒に就て云はゞ、十歲の時、一二、五%は二「オクテーブ」を超ゆること能はず。八三、七%は一乃至二「オクテーブ」にして、二

「オクテーブ」以上なるは僅かに三、九%に過ぎず。概して女子は十三歳の時其範圍最廣く、男子は十四歳の時最廣しと云ふ。

聲變り

聲變りは徐々に起る場合多し。少し嗄れたる聲を發する事、數日又は數週に渡り、其後は永久に低音となる。時としては聲は恰かも文字通りに破碎して、三個又は三個以上の部分となり、其間に間隙存し、此間隙漸次充實することあり。或る男兒は十九歳の時尚「トレブル」(最高音部)を歌へり。或る人の聲音は嗄れて多少の刺衝を覺え、又制御の力を失ひ、五年或は七年の後に至り漸やく聲音の調ひし例あり。是に反して屢聲變りの際、何等の著るしき損傷を受けずして歌唱を續け得るものあり。かゝる場合は男兒よりも女子に多きが如し。要するに、聲音は此際男女とも力強く且つ豐富となり、其高低と併せて其音色をも變ずるなり。

聲音の模倣

春機發動期の兒童は殊に叫號し、激烈なる音聲を發することを好むものなり。而して屢動物、異性、樂器、機關車、其他自然の聲を摸倣するに巧みなるものあり。嫉妬憤怒等の如き激烈なる情緒も聲音を以て之を摸倣することあり。聲變はりの時期に於ては聲音は他の時期に比較して一層身體狀態によりて影響せらるゝこと多し。即ち聲音は氣分、感情又は健康狀態等を反映す。陰鬱なる蒸暑き天氣又は飢餓の際は、兒童の聲は容易に濁聲となり、神經興奮せる時は鋭き音聲となる。故に食物、衣服、睡眠等は此點より肝要なる注意を要すべし。又此時期ばかり聲音の質に影響せられて、知らず識らず人の好惡を生ずることはあらず。異性に於ては殆んど唯一の誘惑物となる事あり。

聲音に影響するもの

歌唱

歌唱は感情の言語なるが故に最も普汎なる言語と云ふべし。敬虔の情、愛國の情、並びに凡ての人種的、家庭的の情、及自然に對する愛の如きも實に歌唱によりて養成することを得べし。是等の感情の養成は實に歌唱の目的にして、ルーテルが「歌唱のあらざる所、惡魔侵入す、余は歌ふこと能はざる教師を見ることを欲せず」と云ひしは一理あり。歌唱は下劣なる慾情を去り、憂慮、疲勞等を驅逐する事あり。支那人の如きも音樂を以て政治と密接なる關係ありと爲せり。プレトー Plato は音樂に於ける改革は政治上に於ける革命なりと云ひ、メランヒトン Melanchton は是を心の神學なり

と呼べり。歌唱は又呼吸を助け、肺臓を強くし、消化を良くするものにして、十一歳より發情期に至る間に聲音の練習を爲す事は音樂上最有効なり。

六視覺

六、視覺。眼は形狀、色彩、光線、及陰影の感覺のある所にして、多くの人にとりては心に最接近せる感官なりと云ふことを得べし。年少の兒童は暗中漠然たる形體を發見し微細なる空間知覺を爲し得る點に於て成人に優れり。充分なる實驗的の證據なしと雖も、兒童は色彩の知覺未だ發達せざる以前に於て光線及陰影に就て精細なる區別を爲し得るものゝ如し。網膜の邊緣は成人に於けるが如き延長を有せざれども、物體の直視せらるゝに至る迄、反射的に眼球を廻轉する力は却つて成人に優れり。

形狀及距離の知覺

形狀の判斷は十歳以後に於ては一層正確なり。而して大にして複雜なる形體を全體として把捉する力は以前よりも增加せり。ギルバート Gilbert 氏は六十二粍の長さを記るし、小兒に、眼によりて得たる印象を筋覺に移して同一と思はるゝ距離だけ腕を運動せしめたるに、常に其長さの過長視せられたる事なきを發見せり。氏は謂へらく吾人は視覺より筋覺に移る際に距離を過小視する傾向ありと。男兒は六歳乃至十歳迄は女兒よりも正確にして其以後に至れば反對となる。最正確なる年齢は十五歳なり。氏は又六歳より十八歳に至る兒童に、二十吋を離れたる二個の點の距離を測らしめたるに、十五歳に至る迄は皆短かく是を判斷したり。十五歳より十六歳の時は判斷最正確にして其以後の兒童は是を過長視せり。グリッフ井ング Griffing 氏は、同時に來る網膜上の印象を受納し且つ是を把持する力は漸次增加するものにして、充分成熟せる時最充分に發達することを證明せり。瞬間に目擊し得る文字の數も亦春機發動期の時急に增加し、形狀の知覺も亦此時に至りて著しく正確となる。

趣味の變化

物を見るに當りて新しき趣味を感ずるに至るも此時期なり。例へば同一の連續せる視的印象即ち道路にある煉瓦、杙の類を見るも、是を適當に彙類して觀察し、或は文字を見るも一々の形狀に注意せずして其大體を概括して讀過し、均齊、釣合の美を解するに至り、凡て種々の事物を統括し、綜合し、分類し、解析して觀察するを喜び、又風景の如き、星辰の如き、遠距離の物に對して愉快を感ずるに至る。

色覺も亦此時に至り發達す。兒童は最能く光線陰影を觀察し、青年は寧色彩世界に

色覺の發達

對する反應に於て兒童に優れり。花又は雲の色、蒼空、綠野等今は新なる滿足を與へ色彩は各其象徴的意義を有し、種々の聯想を伴ふに至るべし。例せば赤色によりて鮮血を思ひ、黃色によりて黃金を想ふの類是なり。加ふるに色彩の調和と對照とによりて美的快樂又は不快を感じ、ゲーテ Goethe の始めて唱道せる色彩の吾人を興奮し、又は沈靜せしむる力も此時に於て最顯著なるを致すなり。

兒童の色彩を辨別せる力に就ては、ウォルフ Wolfe 氏は最初急激なる進歩を爲し、十七歳に至る迄其發達を續け、殊に菫、橙黃、及石竹色を區別するに非常なる發達を爲すことを發見せり、されど女兒は十一歳以後は其進歩緩漫なりと云ふ。ギルバート氏に據れば、各の兒童に殆んど同一なる十個の色彩を示し、同一と知覺する色彩の多少によりて色彩に對する感覺の鋭鈍を計りしに、十歳若くは十二歳の頃急に發達し、女兒にては其以後徐々に發達し十六歳に至りて頂點に達すと云ふ。

青年期に於ては視覺は强大なる刺戟を希ひ、色彩の濃厚にして光線の强烈なるもの、若くは極めて鮮明なる對比を喜ぶものにして、穩和なる色彩を好み、雅醇なる色調を愛するが如きは後の事なり。又色彩の濃淡若くは光線陰影の强弱に就て以前よりも精密なる差別を爲し得るは事實なるが如し。衣服の色若しくは、花卉、雲、空等の自然の色彩も單に明らかに是を知覺するのみならず、又是に對し一種の感情を伴ふなり。己れが好める色の如きも、種々複雜なる聯想を伴ふに至り、時としては急に是を嫌忌するに至ることあり。或は反對に嫌忌せし色を突然好むに至ることあり。而して一時色彩に注意を惹く餘りに、輪廓、形狀に對し不注意なることあり。

七、一般の欲求

七、一般の欲求。以上の如き客觀世界に對する感覺的反應の變化に就ては、前にも述べたる如く、其新趣味に歸因せるもの、則ち、腦細胞の勢力增加に因るもの幾許なりや、又末梢機官に於ける變化に因るもの幾何なるかは說明し難し。キュルペ Külpe 氏は一萬四千種の感覺を區別し得べしと云へるが、其中多くは徐々に消失し、他のものは注意によりて漸々發達し、一定の習慣となるなり。要するに此時期に於て種々の感官其勢力を增加し、新しき情緒、趣味若くは無感情を伴ふことは疑ふべからず。則ち此時期は感官の黃金時代とも云ふべく、若し是れに相當の制御を加へざれば放縱に流

れんとする傾向あり。譬へて云はば、精神は世界に對し、其大部分の表面を露出せり。門戸の役目を勤むる眼、又は耳は其入口を廣くし、加ふるに感情の勢力も亦一般に其頂點に達せるが故に、外界を知り、經驗を得ること多きと共に、又放縱なる生活に傾き易きなり。

感官の發達は、感官より腦髓に達する印象を增加し、ために腦髓の感覺的中樞を混亂せしめ、充分なる理解を妨ぐべし。加之、生殖器及其作用の發達は內部に解釋することを能はざる、若くは其位置を知るに難き一種混亂せる印象を送るに至る。こは女子の場合に於ては、其機官の內部に潛みて其形狀及機能の比較的大なるため一層顯著にして、是がため一種名狀し難き憧憬の情、目的なき不安を生じ、非常に喜悅すと思へば、又憂鬱悲哀に陷りて、しかも其何故なるかを解せず、感情に激することも屢にして、一種神秘的なる運命の神ありて吾人の靈魂を捕へ、其意の如くに振舞ふにあらざるかを疑はしむ。當時の狀態は詩歌、小說、藝術等是を取りて其材料となし、想像を混じて其千態萬狀を描寫せり。故に此時代の特徵は一言にして、感官の時代と云はゞ

感官の時代

足りぬべく、從つて單に趣味又は性慾の點に於て感官的なるのみならず、凡ての點に於て然るものにして、一切の求心性神經は新生命を輸入し、新印象を以て充たさるゝなり。當時の精神は彼の感官を通過せざるもの一も知性中に存することなしと云へる哲學上の語を以て、忠實に描寫することを得べし。

第八章　進化と青年期に特有なる感情及本能

成熟期に於ける普通の精神的變化を考察する前に、簡單に青年期及小兒期の研究の基礎となるべき心の一般概念を述べ置く必要あり。蓋し吾人の立脚地は他の心理學者及び哲學者の立脚地と異なり、其中には科學的及び實際的に極めて必要なる新概念を含有すと信ずればなり。

吾人の立脚地

吾人の立脚地は概括して或る意味に於て新らしく且つ高尚なる一元論、及一層發展せる進化論にして、未だ到達せられざるも、既に有望なる結果を生ぜる方法と、將來爲さる可き多くの事業の計畫とを含有せるものと云ふ可し。此立脚地より云へば、從來心の未來の狀態を重視し、其過去に對して非科學的にして殆ど病的とも云ふ可き厭忌の情を抱きしより起れる心に就ての思想、及其の實際的訓練の方法は非常なる誤謬を含めるものと云はざる可からず。此の如く心の發達的方面を閑却する弊は意識的に、將、無意識的に、古代及現時の哲學的、神學的思想に流通せるものにして、眞正なる科學的心理學の爲めには最大なる障礙の一となれるなり。かゝる謬見は、其他の人間の心に關する誤解と等しく、淵源する處遠くソクラテース、プレトーの時代に始まれりと云ふ可し。則ち彼等は人間を研究するに當りて、人間の心中に存する朴素的、無意識的要素を輕視し、知識的ならざる德の中には何等の善をも含有せずと思惟せり。

發生的心理學の遭遇する障碍　其一

プレトー、アリストートルの說

第一。 プレトーの回憶說は始めて心の過去に重きを置きたる說なれども、其心の諸種の觀念を有せしは超絕的世界に在りし時の事にして、教育の要は是等の觀念を回復するに在りと爲せり。輪廻の說も亦精神の過去に執着する說にして、前世の所業に對して應報ありと思惟するものなり。而して古昔の希臘時代より範疇或は先天的觀念の說あり。多くの哲學說は是を基礎となし、アリストートルの十範疇說よりカントの十二範疇說に至る迄、是等は學徒に取りて神聖にして動かす可からざるものと思惟せられたり。然るにスペンサー氏は是等の觀念は個人的に云はゞ先天的なれども、種族の上より云はゞ漸次經驗によりて得られたるものなりと爲すに至れり。

基督教の如きも心の過去には餘り重きを置かず、其個人的永世を重んじたる結果、

基督教の說

心の威嚴を發揮したる處少しとせざるも尙、又未來に注意と努力とを集注せり。タートリアン氏 Tertullian は心も遺傳的にしてアダム以來連綿として形體上の連續を有すと說しきが、此說は罪惡の秘密を說明するに都合よき說なりしも、一般の使用する所とならずして異端視せられたり。歷の或る時期に於て一個の新奇に作られたる心、外界より來りて是に結合せりとの一種の創造說、一般に行はれ、人の心は生來汚れたるものにして人生の最高事業は此永久の苦痛より心を脫却せしむるにありと爲せり。遁世主義は現世の生活を以て未來の準備となし、心を重んずるに反して、身體の衞生の如きは殆んど棄てゝ顧みざりき。教會は靈魂の生前存在說のあらゆる形式を非難したるが爲め、死後の生活に對する有力なる辯護を失ふに至り、ために人の形體は一部は其兩親より來れども、其精神は何處より來るかを知らず、本來の性質上、精神は遺傳の潮流以外に位し、醜汚なる形體と接觸するに至りて墮落するものにして、報償的勞作により て是を救濟せざるべからず。かくして精神に對する興味の中心は如何にして是を救濟し得るやに存する事となれり。

精神研究會

未來に關する秘密を探らんとする慾望の著るしき例證は英國に於ける精神研究會なり。此會は覺醒と睡眠、不狂者と狂者等の限界に橫はれる貴重にしてしかも閑却されたる現象、不隨意運動、催眠現象、錯覺等の事實を蒐集し、所謂「人生の最も切實なる要求則死後の生活如何」と云へる問題を解決せんとせるなり。形體を離れたる靈魂ありや、是等の靈魂と人との間に交通は可能なりや、否や、幽靈、怪物、傳心術等に就て講究し、一般に死後靈魂の存在に關し、歸納的證明を爲さんとすることは此會の事業の目的たるなり。然れどもかゝる事業の愚にして憐むに堪へたる所以は、其信賴せる事實の寧直接に個人又は種族の過去にのみ關して證明を與へ、毫も其未來に關係せざる點にあり。普通以上の事にあらずして普通以下の平凡なる事實、又は普通以外とも云ふべき背理の事實に關係せる點に在り。尙一歩を進めて曰はゝ、其事實は精神よりは寧ろ肉體に關係せる點に在りと云ふべし。吾人は此會の研究によりて裨益したる事、少なからざれども、要するに、這種の研究はかの鍊金學者、若しくは占星術者の爲す所と異なる所あらず、よろしく、純正なる科學の場裡より驅逐せらる可きもの

とす。

學者の謬見

現今學識ある一流の心理學者哲學者にして如何許、這種の偏見の爲めに意識的又は無意識的に誤まられ、其研究の方法又は結論に影響を受け居るかは到る處に是を認むる事を得べし。ある博學にして聰明なる教授は靈界に於ける親戚より來れるものと信ぜる、昏瞶狀態に入れるメヂウム Medium の陳述に就て長く研究を爲し、ある他の哲學者にして又亞米利加に於ける純正哲學の一方の首領たる教授は、數多の元子的精神より成れる永世の世界を信じ、是則ち神の王國にして、其中の會員は自然世界を支配するものにして、凡ての法則の原因となるものなり。此世界に於ける終極の事實は個人の永遠的實在なり、創造は實際上の事件にあらずして畢竟一種の記號なりと云へり。又他の學者は哲學の目的は現在吾人に現はるゝ人格よりも一層深遠に、一層永久的なる、一層確實なる個性を證明するに在り。蓋し知識と愛とは生命よりも强ければなり。吾故友の實在は感覺を超越せる虛僞にはあらずと。此類擧げて數ふ可からず。多數の人は其俗人たると學者たるとを問はず、靈魂と云へる語には未來の意味を含ませて考へ若しくは語るものにして、此語によりて過去に關する內容を示唆せらるゝものは甚稀なりとす。

其二

第二。學者の間には肉體と精神との間に密接なる關係あるとを認めざるもの多し。デカルトの如きは兩者は全く正反對のものとなし、何等共通的のものを有せずと思惟す。元來近代の人々は當時の人の如く感覺鋭敏ならず、其筋肉又軟弱にして外界より受くる刺戟直ちに運動となりて反射せらるゝこと少なく、視覺有力なる働きを爲すに至ると共に、實在を把捉するに最も適當せる觸覺の作用は甚だしく衰退し、單に事物の表面のみを知覺して滿足するに至る。視覺的典型の人は實際的即運動的典型の人々よりも唯心論に傾き易しと云ふ可く、盲人の如きは外界の實在に就ては却て誤りなき認識を爲すべし。書齋にのみ籠居して實際社會に遠ざかれる學者、殊に其人生及自然に對する知識は單に書册のみより得來るが如き人々に取りては、實際の世界は消失し去りて、思想の內界のみに心を奪はるゝに至るも理なきにあらず。

知識論

かくして物質は非有なり、世界は一種の迷妄に過ぎず、時間及空間の如きも亦主觀

者の態度

的形式に過ぎずとの確信を得るときは、其結果として心は無上のものにして極めて尊きものなりと思惟するに至り、遂にヒューム Hume 氏の如きに至れば、吾人は唯吾人の心の狀態を知り得るのみとなし、物質の存在、動物及人間に於ける精神の存在の如きをも疑ふに至り、其論理的推論の極はゴルヂアス Gorgias の虛無論に陷り、一切の物は存在せず、よし存在すとも吾人は是を知ること能はず、知る事を得るも、是を告ぐること能はず、吾人は吾人の疑ふことすらも疑はざるべからずして、完全なる懷疑論及不可知論に陷るべし。而してかゝる論者は何等の科學をも熱心に研究すること能はず、中には客觀的、歸納的研究を爲すものなきにあらざれども、多くは道樂半分に是を試みるのみにして、然らざれば純粹に思辨的に陷り、其方法に於て大に缺くる所あるべし。殊に心理學の研究に就ては自然科學としての心理學と、哲學としての心理學との間に區別を爲さず、發達的研究の如きは彼等知識論者の最も嫌忌するものたるなり。

第三。發生的心理學の遭遇する第三の障礙は「ダーキニズム」に反對して生物の研究

其三

「イズム」に囚はれたる見解

は單に種及屬を定義し、分類するに存するものにして、是等の種屬は一定不變のものなりと爲せる見解と略同一のものなり。哲學者は先づ定義を下すことなくしては何事をも爲すこと能はず。是に反し、心理學者は最初は定義を下すことなくして、單に事實を記載するを以て滿足し、定義の如きは是を終局の結果に得んとす。哲學者は型に入れたる一定の「イズム」(論若くは說)を數多所有し、唯心論、實在論、唯物論、獨斷論、懷疑說、經驗說、直覺說等によりて凡ての學者思索家を一々分類すべし。而して分類を爲すに當りては、大抵其著るしき一部分の點を認めて是を擴大し、顯著にし、以て其特徵と爲すなり。然れども、かくの如きは歸納法の屢警戒せる誤謬にして、自然、人生及精神の複雜極りなきを忘れたるものなり。神學者は人は基督教徒にあらざれば偶像禮拜者、佛教徒「マホメット」教信徒又は儒教信者となすべし。されど宗教心理學の示す所によれば、普通の人は此等種々の宗教の信徒たり得るものにして、交互に若くは同時にすらも然るを得るものなり。哲學に於ても年齡、氣分、時代、男女によりて夫々「イズム」を異にすべく、例へば幼年時代には感覺的、唯物論的、二元論

的にして青年の時代には理想的、樂天的に、壯年時代には實在論的、實驗的、老年は厭世的にして知識論を好むに至るが如し。哲學史上には始より一定の思想を有し、生涯一貫せる系統を以て終れる人あれども、こは早く思想を纒め、後に至りて頑固に是を固執して移ることを欲せざるか、若くは境遇の奴隷となりて偏屈にして極端なる思想に傾きしなり。由來發達は非論理的のものにして、絶えず自家撞着を經驗しつゝあるものなり。普通形式的論理學は事實の後に來るものにして、成業又は發見の後に起りて其誤れるを戒め、多少は過去に如何にして心意が其事を成遂ぐるに至りしかを說明する事あらんも、新しき行路に就きては何等の指導をも與ふることなかるべし。ブレトー及カントの說は其理路極めて嚴密にして棄れざれども、漸次發展し來りたるものにして、ロッチエ Lotze 及 フヒッテ Fichte の如きも亦然り。セリング Schelling に至りては順次其思想の系統を變更せし點に於て、發達を重んずる論者には一層有益なり。將來何時かは哲學史の粗雜淺薄なる叙述を爲し、又は單に抽象的なる組織を示すことを止め、心理學によりて諸種の哲學系統を利用すること、恰も吾人が今日質問に對する兒童の回答書を利用するが如くにして、人間思想の發達の普通の段階に關し、眞正なる發達的歷史を得るに至るべしと考ふるは强ち空想にあらざるべし。

第四。以上三種の傾向は明白なる或る意味にては發生的心理學に對する第四の障礙に貢獻するものなりと云ひ得べし。第四の障礙とは何ぞや。動物、不具者、野蠻人、兒童等の生活は普通開化せる成人の生活を距ること遠く、是等の研究によりて成熟せる精神の研究にさしたる光明を與ふることなしと考ふること是なり。

其四　(甲)野蠻人に關する研究の偏見

(甲)種々の除去し難き偏見のため、原人と吾人との間には鴻溝横れるあり、充分に彼等の眞價を理解せるもの甚稀なり。野蠻人を解するには彼等を愛し、彼等を尊敬せざるべからず、こは多年の交際によりて得たる經驗なり。彼等は文明の汚風に染まざる場合には要するに年齡のみ長ぜる小兒にして、强健なる體軀を有し、吾人よりも遙に純潔なる生活を送れる小兒なり。彼等を理解せざれば小兒、宗教若くは教育を理解すること能はず、又吾人の古代史を理解すること能はず。吾人は從來神話、風俗、信仰等の人類學的研究を重んぜず、哲學的心理學者も亦是れを顧みざれども、實は誤れり。

精神を研究せんとするものは先づ人間を研究せざる可からず。今日亞米利加の心理學が人類學的性質を帶びざるは哲學上甚不自然なる事と云ふべし。

(乙)不具者、犯罪人、及び發狂者に就きての研究も亦同じく輕視せらる。眞正なる歸納的心理學者は一個人に於て退化的現象を現はせる些細なる事實をも等閑視せず、是により て人間の人間たるに至る階段と其困難とを知らんと欲す。余の知る所にては亞米利加の大學に於て病的心理學又は臨床的研究を正課とせるものは僅かに一二校に過ぎず、普通心理學者は此種の研究を輕侮し、若くは冷淡に看過して寧ろ實在、範疇等の研究に熱注せるなり。

(丙)動物心理學は現今憎惡又は輕侮の對象となれること稍減少せるは喜ぶ可し。デカルト Descartes の如きは此方面の研究は其思辨的系統と相容れざるを發見し、高等動物の如きも無智にして感覺すらなき一種の機械に過ぎずと爲せり。近來本能を研究するに思辨的方法を以てせずして科學的方法に據らんとする傾向勃興し來りしに係はらずデカルトの如き思想は尙勢力を有し、且吾人は充分に他人の心意若しくは物質を研究すること能はず、況して動物界を理解するは一層困難なりと云へる見解によりて援助せらる。故に唯心論は此方面に於て何等の貢獻をも爲さず、反て這種の研究に趣味を有する人を失望せしむるなり。かくして一方にはロイブ Loeb 氏の如きツロピズム(傾動)を贊し、他方に於てベーテ Bethe 氏の如きは機械論に與みせり。思ふに動物には全く知覺力なしとなし、人間と類似の點を盡く除去するが如き者と、又動物の知力を極端に過重する者とは共に兩極端に偏せるものなり。

高等なる動物は吾人と同じく快樂と苦痛とを感じ、吾人と等しく五官を有し、記憶、注意及反射運動の大部分は吾人と共通に是を有せり、彼等は睡眠し、覺醒し、飢渴を感ずること吾人と異なる所なく、其行動の大部分は人間と同じく彼等の慾望を滿足せしめんが爲めなり。彼等は生殖の感覺及欲望を有し、求婚、粧飾をなし、配偶を求むるためには鳴聲を出し、歌曲を歌ひ、競爭嫉妬の情を有し、戰鬪をもなす。其住居を作るや、其構造甚緻密にして是によりて雨露を凌ぎ、敵を防衛し、以て其子孫を養育す。怒怖は憤怒と共に其行動中、重なる要素にして、美的鑑賞力を有し、色彩形狀を

選擇する力を具ふ。游戯を爲し、家族を作り、團體的生活を送り、時としては發達せる社會的結合を爲す者あり。或は弱者を殺し、奴隷を貯へ、模倣の力に富み、化粧をなし、教育を施し得べきものあり。彼等は吾人と同じ病症に罹ることあり、發狂する事あり、退化を爲すことあり、又老衰の徴候をも呈す。移住、竊盜、强奪を爲し、敵を擒にし、死を伴る等人間と異なる所を見ず、却て彼等の多くは人間の爲し能はざる事をも爲すなり。彼等は自己の住居を發見する本能に於て、感覺の鋭敏の度、及其數に於て人間に優り、速力、力量及び輕捷なることも亦人間を凌駕し、且つ方向及天候を知るの能力を有す。

動物の精神と人間の精神との差異多き中にて普通、機械及衣服を製作し、是を使用すること、言語の發明、類似聯想、良心と道德とを有すること、其他、宗教の進歩等を擧げ、是を以て人類に特有なるものと爲すを例とすれども、動物の精神を熟知せる人は、動物も亦是等の少なくも微細なる端緒を有することを否定せざるなり。要するに人間と動物との間には單に數量上の差異あるのみにして、絶對的差異を劃することは能はざるなり。

（丁）兒童心理に就て

感情及本能の心理と發生的研究

（丁）幼年期及少年期の研究に就ても略前述せる所と同一なることを云ひ得べし。

以上四箇條は發生的研究の必要なる重なる理由なるが、尚特に感情を研究する爲めには這種の研究は一層其必要を認めざるべからず。感情に關する諸種の問題を解釋せんには、單に論理的若くは內省的研究によるのみにては甚不可なり。よろしく種々の方面より其材料を得來らざる可からず。加之、感情的生活は文明の進歩と共に却て衰頽するものにして、知識こそ增進すれ、感情の强度は知力の發達と反比例して減少する傾向あり。愛情と云ひ、恐怖と云ひ、憤怒と云ひ、吾人は到底原人の如く激烈なる感情を感ずること能はず。吾人は文明の發達と共に外界事物に對する辨別力を增進し、感情も亦從つて精緻となる傾向あれども、外物の爲めに其情を動かすことは比較的減退するが如し。然るに、小兒及少年は喜怒哀樂のため動かさるゝこと甚活潑に、感情の表現も亦天眞爛漫にして、成人の如く隱蔽すること稀なり。動物は小兒と同じく、感情又は本能のために支配せられて其行動を爲すものにして、動物の種類に應じ、其

特殊なる性質を發揮すること多し。例へば肉食獸の殘酷なる、兎の臆病なる、孔雀の虛飾的なる類是なり。動物の性質は其特殊なる心理的傾向が生存競爭の必要上、陶冶せられて其極端に迄發展したるものにして、人間の性質本能の如き、遠く其祖先なる動物より遺傳し來りて複雜なるものと爲りし者なれば、吾人は吾人の性格を研究する上にも動物のそれを調査すること必要にして又有益なるなり。

動物の感情及本能は遺傳によりて吾人に傳はり、其或物は常に識域下に潛在し、あるものは習慣となりて意志の方向を定む。吾人は是等を研究するには須らく其眼界を廣うし、其歷史的發達を研究せざる可からず、即精神の古物學を研究し、意識に先つて存在せる種々の地層を研究する必要あり。知力は如何に發達すとも、到底心の一部を示すに過ぎず。尙不定にして且偶然的のものあり。其發達の程度と方向とは年齡、男女、境遇によりて異なり、各個性的特色を有すれども、各個人に於ける本能、感情は比較的廣く且深くして、全人類に共通なる要素を包含せるなり。此本能、感情の上より見れば、人は小宇宙なりとも云ふことを得べく、實に人類經驗の殆全部を包括せるなり。人間精神生活の根本のあるものは既に廢頹して用ゐるに堪へざれども、其多くは根ざせる發達史的地層の深淺に從つて緊要の程度を異にせるものにして、苦痛快樂は固より、飢渴、戀愛、自負及其他の本能的感情は有脊及無脊動物の生活を通過し、遙かに遠き古昔に至る迄、是を追跡することを得べし。

精神の古物學

故に是等を研究するには客觀的に緻密なる觀察的方法によらざるべからず。而して發達的研究を重んずる心理學者は一方に於て內省法を用ゐ、又實驗的方法より補助を受くると共に、又其研究の根本的たるに從つて下等動物及兒童の比較研究によりて經驗的に其材料を蒐集し、自己以外の精神に就て其外的及內的經驗を對照せざるべからず。即將來の心理學者は眼を過去に向け、過去に於ける發達の階段を上下し、以て數多の事實を手にせざる可からず。元來ある事實の最も完全なる知識は愈益發達史的たることを理想とせるものにして、吾人は凡て最初より其成熟の極點に達して衰頹するに至る迄の發達を熟知するに及んで、初めて眞正なる知識を得るものと云ふことを得べく、下等なる精神は吾人の起原と其本質の神秘とを解釋することを得べき關鍵たる

理想的知識は發達史的たるを要す

なり。

以上述べたる精神上の研究法の革命は恰かも身體上に於けるベール Baer 及ダーウ井ン氏の革命と相類して、しかも是を凌駕せるものなり。則ち二氏の以前には分類、命名は一切のものにして、種は不變化なりと思惟せしこと、恰も精神の發生的研究を初むる以前には、能力と作用、分解と範疇は一切のものにして、成人の精神は一定不變のものと思惟せしに似たり。然るに新しき立脚地より云はゞ、人間の精神は世界に於ける種々の形式を有せる精神の一種に過ぎずして、下等の階級より將來一層高等なる階級に達せる中間に位せるものなり。既に進化の一階級に過ぎずとせば、吾人が是に就て眞正なる知識を得んが爲めには其根本に溯りて其發達を研め、其變遷進化の跡を尋ぬる必要あるなり。

精神研究に關する新立脚地

科學的心理學

尙一層概括的に是を云はゞ、心の觀念は其下等なる階級のものに就ては殆んど生活と區別すること能はず。故に眞正なる科學的心理學は先づ生物學的ならざるべからざるを主張せんとす。心は殆んど生活、少なくも動物の生活と同一にして、其最も根本的の發現はショッペンハウエル氏の所謂「生活意志」に在りと云ふべし。されば心は畢竟動物界全體を通じて一樣に且連續せるものにして、唯其割合を異にせるに過ぎず。身體に種々の形狀あると同じく精神にも種々の形式あり。吾人は身體を通じて初めて精神を知ることを得べく、又精神を通じて初めて身體を知ることを得べし。心なき腦は腦髓なき心と同じく不可能にして、身心孰れにか變化あれば必ず其他方に影響を及ぼすものなり。心は如何なるものより成るにもせよ、そは現在の刺戟に對して常に反應を爲すのみならず、又限なく遙遠なる過去より反響を受けつゝあるものにして、ヘラクライタス Heraclitus が「精神の根源は極めて深き所に潛在せるものにして、何人も是を知ること能はず」と云へるは眞なり。

生物學的なる要素

然るに其過ぎ去りたるものは既に吾人の意識より消失したるものも多ければ、是を研究するには運動性の反應又は副意識的(サブコンシアス)現象に就て、客觀的、實驗的、歸納的研究を爲さざるべからず。內省にのみ依賴する時は偏狹となり、獨斷となり、固陋となるを免れず。意識的成人は宇宙を反映せる原子にはあらずして、精神の大世界より離れて

特殊の制限を蒙れる一個の斷片に過ぎざるなり。

精神に關する進化論的概念

心を樹木に譬ふれば、其根幹は慨ね地下に埋もれ、其頂上の枝葉のみ吾人の眼前に顯はれ居るなり。而して自我の本質は流轉の作用にして、決して固定不變のものにあらず。現在の形式は全く是と異なれる過去の形式より生じ來りしものにして、絶えず變化しつゝあるものなり。過去に於て或は光明、暗黑又は晝夜の經驗を爲して其律動を形作り、或は寒熱、火焰等の經驗によりて冷熱の識別を爲すに至り、雲の形狀によりて想像を養成し、或は又蒼空、星辰、風雨、花卉、戰爭等によりて恐怖、愛情又は憤怒、憐憫等の情を育成し來りしものなり。精神の表面的現象は種々變化すれども、其の深き根柢は過古數千年の歴史に基づけるものにして、一言に云はゞ精神は遺傳の産物なり、過古に於て種々鑄鑄陶冶せられて難苦辛酸を經來りしものにして、未癒えざる幾多の瘢痕を殘せるなり。たとひ表面は平滑なるが如く見ゆる場合に於ても、猶其内部は野蠻粗野にして動物的衝動を有す。各個人的精神には讃嘆すべき美德あると共に、又幾多の醜惡、欠點を包藏せるものにして、何人も完全無缺なるものはあらず。

青年期に於ける精神的變化

吾人が現在爲しつゝある青年期の研究は則遺傳の力、最有力に顯はれ、過去に於ける經驗の最、迅速に繰り返され、自然及社會に對する感覺特に鋭敏なる時期に於て、獨特の變化を發見せんと欲するなり。

以上の考察は吾人が是より青年期に特有なる精神的變化を研究せんとするに當り、吾人の取るべき立脚地を明かにするの功あるべし。精神上の變化は肉體上の變化に比すれば一層複雜にして接近し難し。其變化の中に於て最緊要にして且根本的なる事は從來多くは存在せざりし衝動又は本能の中、或るものは一層其勢力を加へ、或るものは壓抑せられ、爲めに相互の間に新しき關係を生じ、かくして自我は新しき中心を形成するに至ること是なり。生殖作用に就ては。戀愛の情は是に附隨せる激情、則ち嫉妬、競爭等と共に發生し、其他戀愛に關係せるあらゆる現象を生ず。宗教的感情も亦再現し、其あるものは全く新たに發生し、個人及種族の間に新たなる精神的關係を誘起し、惹て宇宙に對する關係にも影響を及ぼすべし。自然に對する感情深厚となり、藝術に對する熱心も亦加はる。從來も藝術を解し是を樂みしことありしと雖、眞に是を

味ふに至るは此時期にあり。道德的生活も亦非常に其深さと廣さとを加へ、自己の罪障容易に拔き難きものあるを自覺するに至る。要するに遺傳の門戸は此時期に於て小兒の時代に於けると同じく開放せらるゝなり。

小兒は大人の父なり

ある點より云はゝ、青年期の如きは人間の高尙なる性質の搖籃時代とも云ふべく、吾人は此際自然の母より勢力と進化との最後の資本を受領すべきなり、かの小兒は大人の父なりと云へる諺は此意味に於て適切なりと云ふべく、吾人は是と同時に高尙なる能力の若干に關係して云はゞ、再度、自然の狀態に復歸し、ために單に指導を要するのみならず、相當の保護を必要とする狀態に陷るなり。則ち吾人の自己に就ての知識は從來よりも不適當にして、吾人は進んで徐々に自己の救濟を圖らざる可からず。而して此際性格、氣質、情緒、情慾等一變すべければ、父母たり、敎師たる者は自然が再び吾人を其膝下に引き寄せたる事を理解し、靜に自然の爲す所を注意し、然る後、是に對する適當なる方法を講ぜざる可からず。

九歲より十二歲に至る頃の兒童はよく其境遇に適應し、調合よく發達し居れども、青年期の始めに達する時は、此舊時の自然に對する調和と統一とは破壞せられ、兒童は其樂園より驅逐せられ、自から一層複雜なる新境遇に適應する必要を生じ、從つて凡ての方面に新らたなる危險を伴ふべし。此際一步を誤ることあらんか、則退步墮落に陷るが故に生涯中、最危險なる時期に遭遇せるものにして、「エデン」樂園の神話は恰かも此時期を描寫せるものと見るを得べし。從來兒童は自己の現在の境遇に大なる趣味を感じ、其未來に就て、若くは成人の生活に就てはさまで興趣を感ぜざりしも、此際舊趣味の徐々に消失すること、恰枯葉の落下するが如く、乳齒の脫離するが如し。

最危險なる時期

未來の自己の職業に思を勞することを始め、英雄崇拜の念、心頭に起り、先運動遊戲の類の競技に於て、次には精神上の競爭に於て、他人を凌駕せんことを望み、絕えず不安思慕の情に驅らるゝに至る。而して他人と爭ふことを好み、安逸なる生活よりは寧困難にして奮鬪的生活を欲し、凡て自己の爲し得べき、又は爲すべき事を盡く仕遂げんと願ひて、或は學者たらんとし、或は名譽を得んとし、或は富豪たらんとし、或は他人に愛せられんとし、或は又有德にして完全の人たらんことを欲す。永生不死の

生活を願ふも此時なり、自己の欲する所遂げざることなき未來の世界を夢みるも亦此時なり。

身體的變化の概觀

青年の好む所は精神の激昂せる狀態にして、安靜なる快樂の如きは寧之を喜ばず。心臟及血管は此際急速に增大し、血壓も亦增加す。營養作用も亦大に增加し、身體の溫度も多少上昇す。而して急速に發達したる結果としては心臟の側壁は稍薄弱にして、是がため末梢に於ける血液は稍停滯する傾向あり。其流通を適當ならしめんがため、脈管の緊張必要となるべし。吾人は精密なる關係を知らざれども、血壓と、此時に際し凡ての器官に起る一種爽衝の感とは密接なる關係あるものゝ如し。特に野蠻人に於ては色情、食慾等の諸機能亢進するを此時期の特色とす。又感情熱烈にして不定に、恰飲酒せずして酩酊せるが如き狀あるは此時期に起る所にして、プレトーが青年を定義して精神上の酩酊者と云ふもの一理あり。蓋し青年は常に激烈なる精神狀態を經驗せんことを欲し、從て活氣に富み、自己の生活を一層充實せんことを望むや切なり。かくの如く無氣力冷淡を嫌忌し、常に何等か自己の感情を動かさんとするものを求め、活氣橫

「精神的酩酊」

溢の傾向あるは往々青年をして飲酒の惡癖に耽らしむる原因の一なり。其名譽、富、知識、權力、戀愛等を希求するは活氣の充實を得、且つ之を感ぜんとする欲求の發現せる特別の形式に過ぎず。而して是等の希求若し道德的又は知識的の熱情に變ぜざる場合には、發して酒色の欲となり、爲めに墜落の深淵に陷ること多し。故に此際運動遊戲に熟注して殆んど狂者に類する行爲を爲すが如きは、却て肉慾の誘起を減少するものにして、卑猥なる快樂の奴隸となるに優れり。此時期に於て活氣の橫溢する所、多少の弊害を生ずることは免れざるが故に、教育家は須らく其下劣なる傾向を制抑し、眞善美に對する高尙なる思慕の情に轉化せしむるを要す。

教育上の注意

青年期は不定動搖の時期にして、情緒も亦反對の情互ひに相對立し相反應して發達するものなり。試みに其相反せる衝動の重なるものを擧ぐれば次の如し。

反對せる衝動の更替、其一、無氣力と熱情

第一、青年期には非常に疲勞を感じ易き時期あるかと思へば、又容易に普通の勞作の二倍を爲し、毫も疲勞することなきことあり。非常に懶惰なるかと思へば、又熱心に事に當り倦むことを知らざることあり。此類の變化は恐らく多少天候のために影響せ

らるゝことあり。從うて生理的基礎に依ること疑を容れず。多くの回答書は、春期、勢作を爲すに倦厭の情に堪へざるが如き感あること多きも、其間には數時間に渉り、若くは數週間異例の活動を爲し、定規の課業を終りて尙其他の事業を活潑と滿足とを以て成就することありと記るせり。蓋し青年の活動は律動的にして或は一ヶ月、或は一季を隔てゝ動搖す。當時自然の精力は相交替して或は精神上の能力の發達に、或は身體器官の增大に集注せられ、是が爲め却て經濟的に發達を爲すものゝ如し。

其二、快と不快

第二、是と密接に關係せるは快不快との兩極に動搖する事是なり。小兒に於ては氣分の變化は極めて迅速にして、しかも常に絕えず涕泣と笑と同時に結合するを常とす。然るに青年期に入るときは其動搖は稍遲緩にして暫時の間は一方に執着すべし。則ち此時に至れば單に現在のみならず、過去及未來を念頭に浮べ、其心的生活の範圍を擴大す。而して一般に快活にして愉快の念を以て充たされ、生活に對し非常なる興味を有し、幸福なる生涯を送るは則ち青年の權利なるが如く思惟す。

然れども表面あれば必ず裏面これに伴ふ。青年は何故なるかを知らずして涕泣し、嘆息することあり。輕快なると共に又憂鬱なるは此時期の特色にして、往々生活の必しも幸福にあらざることを悟り、以前に快活なりしもの却て厭世の情に支配せらる。統計の示す所によれば、此時期に於て自殺者の數は不思議にも增加す。或る人の云ふ所によれば「元氣沮喪の曲線は十一歲に始まり、絕えず且急速に十五歲まで高まり、十七歲に至りて其頂點に達し、爾來二十三歲まで絕えず下降す」。由來青年は些細なる事にも非常なる歡喜を爲すものなれども、又或は自己の力の社會と鬪ふに足らざるを恐怖し、或は友人に憎惡せられたるを憂慮し、或は自から制服し難き欠點を有するを嘆息し、或は他人に及ぼしたる災害、失戀の結果、事業の失敗、難苦を忍ぶの必要等の爲め、境遇、遺傳、氣質其他の原因のため、多少の差異はあれども、大抵憂鬱なる氣質となり、其極、自暴自棄に陷りて本能の命ずる所を恣にするに至ることあり。されど又是等は凡て快不快の範圍の擴張せるに歸因すと見るを得べし。

其三、自負と謙讓

第三、次ぎに自覺心增加し、種々の利己主義を生ず。則ち外見を飾りて自己の美を誇り、以て異性の愛を得んとし、又は傲然濶步し、言語、擧動、服裝等凡て他人に立優り

て人の注意を惹かんことを勉む。自滿の心を有し、厚顏、無禮にして往々腕力に訴ふるも自己の欲する所を貫かんとす。而して自負の心は他人の禮儀を守り、愛情籠れる甘言に接する時は、一層强大となるべし。理想のみ徒らに高くして、是に到達せしむる手段の勤勞は棄てゝ顧みず。而して自己の所期は既に達せられたる場合の如く、社會の己れを遇せんことを願ふ。他人又は敎師の忠告にも耳を假さず、反て是に反抗せんとする精神に富むなり。

されどかゝる自負に反對の心も亦乏しからず。時としては時期に於て是に先つこともあり。則ち一方に於て厚顏鐵面皮なる青年が、他方に於て自己の賴むに足らざるを覺り、未來に心を勞し、失望落膽の淵に陷る事あり。屢自己の男子として又は女子として主要なる資格を欠けりと思惟し、成功の資格を有せざるを憂ひ、意氣沮喪す。而して是に接する人をして一見極めて謙遜にして禮儀あるが如く感ぜしむることあり。時としては自己の空想の爲めに耻辱の感を深くし、些々たる事にも心を勞し、失望憂愁の淵に陷り、獨り世間と離れて孤獨の生活を送り、朋友親戚の慰藉の言も何等の効用なきに至る事あり。

其四、利己と愛他

第四、次ぎには利己と他愛との更替なり。春機發動期前の小兒は其父母の手により凡て養護せらるゝが故に、自己中心主義なれども、青年期に至りては漸やく人生の犧牲なることを自覺し、他人を中心となすに至り、他人の爲めに禮儀を盡し、他人の感情を重んじ、他人の爲めに困難を忍び、自己を犧牲として他人の爲めに盡さんとし野鄙なる慾意貪婪の側らに、容易に見るべからざる寬容他愛の精神を存するに至る。

其五、善行爲と惡行爲

第五、前述せる處と密接に關係せるは一般に善良なる行爲と劣惡なる行爲との更替之なり。此時ばかり行爲の純潔にして汚點なきはあらず。正義を求むること渴するが如く、向上の精神に富み、凡ての人に對して慈愛の情深く、誠心誠意を以て他人の幸福を望むが如き、殆んど人をして此時期に於ける青年少女は現世には見る可からざる善人なるかの感を抱かしむ。

然れども美はしき花の開く處にも雜草は繁茂すべし。此期に於ける男女の生理的慾望は甚盛にして、殆んど野獸的に是を恣にすることあり。憤怒の情、時として其束縛

を脱して逃出することあり。虚言の傾向の現はれて一時殆んど制すること能はざる場合あり。罪と徳とは此際一場の爭鬪を開き、各青年を擒にせんと圖るなり。統計の示す所によれば、青年の眞正の宗教に改宗すること最多き時期は則、始めて監獄に入る割合の最多き時期なり。精神の高尚なる抑制力を發達せしめ、是によりて下劣なる慾情を制御し得るに至らしめんがためには、多少の罪惡の行はゝを免れざるは精神發達の法則なりと考ふべきに似たり。

其六、社交と孤獨

第六、以上の如き反對は社會的本能の上にも是を見ることを得べし。則ち青年は屢羞恥の情に富み、孤獨を好み、星辰、海洋、森林、動物等を伴侶とし、人間よりは寧ろ自然と交はるを好み、交際社會に入るを喜ばずして主觀的冥想に耽るものあり。かゝる傾向は地方の青年に多けれども、都會に生活するものにも乏しからず。然るに又他方には人と交はるを以て無上の樂となすものあり。是れ種々の歡樂を主とせる會合、團隊、協會等設立せらるゝ所以なり。是等の青年は何事も他人と共にするを喜び、單獨にては毫も興味を感ぜず、又不活潑なれども、他人と協力するに及んで始めて活潑にして輕快なることを得。而して其親密なる者に交はるに際しては、胸中城府を設けず、凡ての秘密を語る。其或るものは常に他人を樂しましめんとし、或るものは他人を支配し、指導せんとし、受動的にして無氣力なるものは獨立的行動を爲すの力なく、他の奴僕となり、從者となるに甘んず。かくの如く、社會性の缺乏と豐富との兩極端は人同一人には比較的稀にして、例ひ起るも長き時間を隔つるを常とす。

一定の性格確立するに至る迄は、青年の心裡に上述の如き動搖あるを免れず。サボナロラ Savonarola ニユートン Newton シエレー Shelley バトリック、ヘンリー Patrick Henry キーツ Keats ホーソーン Hawthorne 等の少年時に於て其顯著なるを見るべく、吾人の質問に對する回答書によりても、同樣なる青年男女を見るを得べし。されど、此兩種の性格の共に必要なるは、吾人の言を待たず。ベーコンの訓言に「性格は孤獨の間に完成せられ、才能は社會の中に成る」とあるは眞理と云ふべきなり。

其七、多愛と冷酷

第七、是と密接に關係せるは非常に感じ易き性質より無感覺、冷淡乃至無情に移りゆく事なり。犯罪者は一般に冷酷不人情なることを常とすれども、多くの青年殺人犯

罪者の如きは自己の寵愛せるもの、若くは小兒等に對しては極めて愛情深く、單に其苦痛を想像するも涕泣する事あり。

其八、知識に對する渴仰と冷淡

第八、青年の時期は好奇心に富み、知識の慾望盛にして、而かもあらゆる方面に向うて熱心に知識を求むるものなり。實に青年期は質問、探究、試驗の時代と云ふべし。然れども、亦此時期に於て是と反對の傾向なきにあらず。則ち知識に對する渴仰の情甚乏しく、極めて冷淡、無氣力なる事あり。是には種々の原因あるべく、若し漸次回復すべき性質のものなれば是を自然に放任するも可なれども、放恣淫佚等の結果なる時は、是に對して十分嚴格なる治療法を講ぜざる可からず。

其九、學理の研究と實際的活動

第九、次ぎには學理を求むることゝ實際的活動を爲すことゝの更替なり。上述せるが如く、知識に對する慾望は盛んにして、博學を欲し、學者たらんことを願ひ、詩人となりて想像を恣にし、若くは科學者、哲學者となりて冥想に耽らんとするが常なり。然れども亦其反動として書窓に籠居せんよりも、寧社會に出でゝ活動せんことを欲し、多少無意識的に博學の畢竟一種の虛飾に過ぎざる事を感ずるに至る。

其十、保守と急進

第十、屢保守的思想と急進的思想との間に更替を見ることあり。即ち青年は從來のあらゆる慣習に反對して教會、學校、其他社會的、家族的生活を改良せんとし、富豪又は「トラスト」の暴虐に反對し、自己の幼稚なる見識に合せざる一切のものを疑ひ、又は破壞せんとする傾向あり。されど又或ものは、進歩的より保守的に移り、慣習の必要を認め、從來存在せるものを維持し、保護せんとし、改良の餘地あるにも係らず、既存の信條若くは制度の價値を感じ、其損失を恐る。かくして一方に凡てのものを疑はんとする傾向あり。他方に一切を信ぜんとする傾向あり。一方に凡てを肯定せんとし、他方に一切を否定せんとす。

其十一、感覺と知性

第十一、次ぎには感覺と知性との對立あり。感覺は前述せるが如く、此時期に於て非常に變化し、發達するものにして、青年は新らしきものを見聞し、外界との接觸面を可成廣くし、將來の心的活動を爲す資料を得んとするものなり。されど又或る時期に於ては沈思に耽り、實在其物に對しても疑惑を抱くことあり。普通經驗し慣れたる事をも疑ひ、頻りに書籍により、又は知友によりて是等の疑惑を解釋せんと勉むるこ

とあり。

教育上の注意

吾人は前章に於て身體の發達は不平均にして其各部、作用及び機官は相前後して發達し、是がため身體の普通の割合は一時是を失ひ、後に至りて新らたに回復せらるゝ事を述べたり。精神の發達も亦是と同じ方法によりて發達す。其種々の作用は相前後して發達し、發達の勢力は恰かも新境界に擴張し、或る時は此方面に、他の時は他の方面に發達するものゝ如し。是れ生物學的の經濟にして、是によりて精神も亦最良の發達を遂げ得るなり。教育上の理想は出來得る限り、種々の方面に諸能力を發展せしめ、一時は矛盾、撞着を生ずるも、自然の儘に放任して其發達を沮止するが如き事なからしむるにあり。或る時は二個或は二個以上の人格同時に存在するが如き觀あり。

一切の傾向を發達せしむる必要

骨相學者の所謂四種の氣質の如きも、互に其勢力を爭ふが如き事あり。されど吾人の精神は其凡てに夫々の位置を與ふるの餘裕を有するなり。當時の狀態は是を譬ふれば、兩樓類又は昆蟲類が昨年の外皮を脱棄てんとせるが如く、兒童の意識を脱して成人の新意識を着けんとしつゝあるなり。かくして吾人の心は人類の經驗に可能なる最大領域を探究するものにして、其變化の極點に到達せるなり。是が爲め一時心的生活は攪亂せられ、青年は安全に壯年期に達せんがためには奮鬪、力行するの必要を生ず。此際多くの衝動は其發現を求め、更に一層高尚なる力の其刺戟によりて發展し來りて是を指導し、制抑するものあるを待つなり。

自由と監督

此時期に於て青年に充分なる自由を與ふるは必要にして、是と同時に相當なる監督を爲し、善良なる方向に指導する事も亦勿論必要なり。此際凡ての衝動を充分に發達せしめざる時は、後に至りて之を統御し、整正す可き高尚なる能力も亦其發達の刺戟を欠くを以てなり。吾人は此際目的とすべきは人性の調和的發達にあり。此時期に於けるが如く、一個人が其自然を擴張して殆んど種族全體の生活を營むが如きは二たび見る可からず。遙かに過ぎ去れる祖先の世代の聲が、或は低くして小さく、或は高くして鋭く反響し來り、精神は飛躍を爲しつゝ非連續的發達を遂ぐるなり。

統一的生活は多少の

精神的統一は後に至りて生ずるものにして、アリストートルの所謂中庸節制の主義は徐々に精神の要素を統一し、迷想を除き、一定の性格を形成するものなり。此秩序

退歩を含有す

整然たる統一的生活は或意味にては多少の退歩を含むものなり。普通人に於ても高尚なる性質は青年期中に極めて短かき間現出するものにして、時としては成人となるの必要急なるが爲めに、單にかゝる性質の存在を示すに止まりて直ちに消失する事多し。かの天才の如きは、則ち此青年期の一層强く、長き期間、繼續したるものと見るべく、其統一過度なるか、若くは餘りに早きに失する時は、却て不幸なる結果を生ずるなり。

第九章　青年期の愛情

身體に關する自覺

小兒の生育するに從ひ、次第に手、指、口、脚、趾、耳、眼、毛髮、及び鼻等、自己身體の各部を覺知するも、幼年に於ては尙其の性的器官部を覺知すること少なし。然れども該部は幼少時代に於て既に一種羞恥的感覺の集中處となり、童時に至れば之に關する些少の暗示に因りても能く大嬉笑を惹起するものとす。而して該部に起因する羞恥的感覺は身體の他の部の擦擦に依り、若しくは他の滑稽なる暗示に因りて生ぜるものとは一種全く異なれるものとす。

裸體

正常の幼兒は自己の裸體に關して覺知する所なく、從て之に關して毫も羞恥の念を發することなし。彼等は自己の身體に於て陰私の部を有せず、斯る事に關しては彼等の意識は未だ動物と異なる所あらざる也。古代スパルタに在りては、啻に其の青年をして公衆の前、特に他性の前に於ても、裸體のまゝ競技を行はしめしのみならず、彼等をして六週間毎に執政官の面前に全身を露出して彼等の純潔、氣力等に關して其の

檢閲を受けしめたりき。或は又裸體の習を以て直接道德上に善影響を及ぼすものと爲すものあり。著名なる人類學者アンガス Angus 氏の如きも他の事情相等しき場合には人類は裸體のもの程、道德的なることを主張せり。蓋し器官の狀態は或度迄は罪惡を暴露するものなるに、衣服は實に之を陰蔽せんとするものなれば也。思ふにスパルタ人の理想は身體の露出を以て其部分の强壯健全に益ありと爲し、衣服を以て啻に罪惡の直接の結果を陰蔽するのみならず、其の觸と温とに依りて慾情を刺戟する虞あるものと爲しゝならん。

スパルタ人の理想

青年期の初には他性に對する特殊の意識著しく發達す。是時に方りて年少者は心理上、アダムとイヴとが初めて相互に其裸體なるを覺知せし時と恰も同樣の狀態に在り。從前覺知せられざりし一種性的羞耻の感は此に生ず。是れ實に着衣に關する動機の有力なるものゝ一なり。蓋し着衣の本能は單に其根據を習俗にのみ歸すべきにあらず、又之を個人が自己の人格を完成し、支配し、及び誇張せんとする衝動の一部に歸せざるべからず。ロッツェ Lotze 氏が衣服を以て自我の限界を擴張し、着用者をして羽毛、衣裾「リボン」帽子等より以て其の携ふる杖の尖端に至る迄、彼自身の感を爲さしむるものと爲すの說は亦此意なり、青年が性的器官に對して覺知するに至れば是等器官の狀態如何は迅速に精神上に反應を及ぼすものにして、斯る新なる覺知性の亦着衣の動機となるべきや明なり。然れども局部の新發達には又何等か本能的誇耀の伴ふあるべきことも亦自然の狀態に在ては信ぜられ得べきことなるべし。彼の露呈病者の如きは概して該局部に於て强大なる發達を爲せるものなるべく、又近世社會の習慣上淫褻として貶けらるゝ多くの事柄も、根本に於ては多少自發的のものにして、場合によりては恐らくは全然病的とのみ見るべきにあらざるべきは余の信ずる所なり。ドクトル、シーヤリイ Dr. Seerley 氏の語る所に據れば、氏の檢査したる少年男子にして强大なる發達を爲せるものは、何れも自己の手を用ひて身體を蔽ふ如き羞耻の本能的傾向を有することなく、之に反して發達の度、通常より小なるものに在ては一般に此の本能の著しきを見ると云ふ。

着衣の本能

シーヤリ氏の所見

有名なる生理學者にして予が師なるルード井ツヒ Ludwig 氏は青年期の數年間は精

神的過程の九分は性及び廣義に於ける性的官能に集中すと考ふる旨を語られたることあり。氏の推測は稍、過大なりとするも是れ暗に彼の犬儒學者一流の、青年が性的器官に關して強大なる自然的好奇心を有し、且つ之を陰蔽するは不德の兆にして、之を露出するは却て正直と純潔との兆なりとする感想に合するものあるを見る。有德の人は必要の場合に方りて衣服を脱するを躊躇することなく、又之が爲に赤面することなし。是れ惟り愛情に關する文學の多く叙述する所なるのみならず、醫學上の實驗、美術學校、體操場等に於て常に見る所の事例なり。更に之を他方より觀るに、肉體隱蔽の常例一たび破られたる場合に於ては、肉體露出に於て一種狂亂的なる且つ恐らくは遺傳再現的なる歡喜の生ずるを見る。又裸體を以て神祇を奉祀するの習はスパルタの古より古代宗教上の儀禮として行はれたる所なりき。乃至性器崇拜の如きも古代「アリアン」人種の諸宗教に於て既に種々の形を以て盛に行はれたりし也。原始的諸言語に於ては性の觀念は重要なるものとして存し、各種の事物は何れも性を附與せられたり。古代各種の神話の如きも多くは生殖及び成長に關するものにして、性の觀念なくして

犬儒學者の說

性的意識と宗教

は殆ど理解すべからず。基督教に於ける愛及び神子の教に於て並にプレトー氏の饗宴篇に於ける愛の說に於て、吾人は古代人類の性的意識の現今に比して極めて强盛なるものあるを觀る。而して殆ど一切の宗教は其原始的たると、種族的たると、將た基督教たるとを問はず、何れも最初此性的意識の基礎の上に成立して漸時に洗鍊を經たるの痕迹なきはあらざるなり。豈翹に宗教のみならんや、凡そ古代の神話や學問や、何れも此要素の充滿せざるはあらず、是れ實に古代の生活、信仰及び儀禮の最も深奥なる秘密藏の關鍵なりとす。

性器崇拜

性器崇拜は其の發生の初に於ては神聖崇高なる宗教的儀禮として盛に行はれしも、其の次第に墮落するや、徒に感覺と欲情とを刺戟する一種秘密的方術と化し、終に他の高尚なる宗教の出現と共に消滅し去るに至れり。蓋し此變動は恐くは人種が次第に北方に移住したる事實に關係を有するものなるべし。卽ち彼等は最早從前熱帶地方に在りし時の如く、懶惰遊逸にして生を送るを得ず、勞働に依りて衣食を得るの必要を生ぜり、而して勞働と健全なる疲勞とは實に純潔の要素なれば也。斯くて性器にのみ

集中せられし注意力は漸々他方に轉向し特に着衣の習の生ずると共に、注意の方向は轉じて全身の形狀、容貌、顏色、面相、眼、髮等に及び、更に一切の副生的なる性的諸性質、戀愛、戲劇、舞踏及び唱歌等の關係よりして種族は次第に放逸墮落の大洪水中より救ひ出さるゝに至る也。禁欲主義は元來正常的本能に基づきて起るもの也。精神が苦悶の原因を知るに及びて此に其の從來愛着せしものを憎惡し、其の崇拜せし所を燒棄し、凡そあらゆる性的關係を有するものに對し墮落淫蕩として一概に之を厭忌するに至る。要するに現在吾人の有する所の智識を以てしては何人も人類種族の太古に於ては性器崇拜の盛なりしに對し、其後に於て凡べて是等の形迹を打棄し、湮滅せしめんと勉めたりし時代ありしを否定するを得ざるべし。

種族發達上より見たる性的生活

抑も少年、特に少年男子は其の發達に方りて種族發達の各段階を縮寫するものにして、各段階は相互に合證し、說明し、從前解明の途なかりし各種の性的障害に關し發達上より說明すべき基礎を與ふるものとす。是の所見にして正確なりとせば、人類は或時代に於て、若しくは殆ど各の種族は其の發達の初期に於て、何れも遊逸の狀態に在り、快樂は苦痛に於て終局し且つ代償せられざるべからざるを知るに及びて、始めて止まる所を知るに至れる也。是に於て自己の卑賤と罪惡とを覺知するの念起り、悔悟の心盛に生ず、而も常に原始的なる、高尙なる、神聖なる、及び健全なる意義に於ける愛の再現を渴仰するの心未だ嘗て暫くも止まざる也。人類の歷史が、男女間の情事に因する悔恨は何故に今も尙宗敎的改心の好機會を成すか、愛の眞正の體現は宗敎的憧憬の目的物となりて之に關する福音は爾く歡迎せらるゝかを、或程度迄說明するを得る所以のもの、正に之が爲めなりとす。

個人に於ける愛情の模範的發達

個人に於ける愛情の模範的發達に關しては吾人の知る所尙甚だ少なし。其の幼稚なる形式は往々八才以下の男女間に發現することあり、此種の愛は毫も自ら意識せられざる透明純潔のものにして、單に相互に遊嬉を共にするを好み、紀念の爲めの贈物を爲し、特に食物を贈與し、且つ往々抱擁接吻を爲す、斯の如きのみ。然れども又往々兩者間に嫉妬心の如きものが十分に發達することあり。又兩者の間には毫も羞耻の情を有せず、其の交情に關して他人の嘲弄するものあるを恐るゝの意亦毫も之れあらず、相互に

未來の夫婦を以て相許し、將來の生活に關する巨細の案件を認め商議することさへあり。然れども斯る交情の後年迄引續きて幸福なる夫婦を成すに至ることは極めて稀なりとす。是の如き早熟せる愛は或は之を「プレトニック」の愛（Platonic love）（純潔なる愛）と呼ぶべく、又或意味に於ては之を成長後に於ては甚だ見るを得易からざるべき精神接合の極めて純潔なる種類にして、性別關係を離れたる愛なりと爲すべく、特に或種の人々、就中婦人は之を以て一種新なる天國的純潔の狀態の理想にして、且つ豫言なりとするものあるべし。然れども、斯る早熟性の愛に依りて年少者が他人に對する利害の念に差等を附するに至ることは果して是れ善良の兆候にして教育上望ましき經驗なるべきか。思ふに斯る事實は幼者が早く宗教上の信仰を有せる場合に於けると同じく、此の年齢に於ける正常的聯想力の範圍を狹隘にし、且つ身體上の早熟に陷らしむるを免れざるべし。蓋し戀愛早熟は人種發達の或時代、例へば身體極めて小なる時代に於て正常的なりし戀愛の今に殘存し現出するものと觀るべきものか、果して然らば是れ寧ろ發達阻害の一現象にして、發達の現象とはいふべからざるもの也。

早熟性の愛情

八歳乃至十四歳に於ける愛情

爾後の年齢に於ては少年愛情の他の形相はベル氏の說けるが如く、之を八歳乃至十二歳又は十四歳間に於て見るを得べし。是時期に至れば戀愛の情は前に於ける如き無意識的のもならず。前期に於ては相互に羞耻の念生ずるを以て愛着の目的物は常に追求せられながらも常に或る間隔に置かる。愛人に物品を贈る如き場合にも、直接面前に於てすることなく、却て先方に知られざるやう大抵匿名を以て之を行ふ。愛人互に相對する場合に於ても各其情を告白するに至ることなく、却て相互に煩悶混雜の情を生ずるのみ。又兩者が公然手を携へて行くが如きことをなさず、時に或は兩者の關係に就て他人の戲弄を受くることあれば往々重大の危害を生ずるに至ることあり。特に他人の嘲弄を恐るゝの結果、却て愛人に對して反對の情を有するを誓ひ、往々其の反動として眞に嫌忌又は憎惡の念を有するに至ることあり。

愛情表明の方法

男子が此種の愛情を女子に對して表明するは主として各種の誇耀的方法に依る。即ち或は各種の運動競技に依り、若しくは其他の方法に依りて機會ある毎に愛人の面前に自己を誇耀し、宛も野蠻人間に於ける求婚を縮寫したるの觀を呈するものとす。之